

---

# シャングリラ 奔流

蒼乃雪花

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

シャングリラ 奔流

### 【Nコード】

N2228B

### 【作者名】

蒼乃雪花

### 【あらすじ】

金色の髪に宝玉のごとき瞳、不世出の美貌を持つ白皙の青年セテイと、穏やかな空色の瞳に身の丈ほどもある大剣を背負った僧、リドルフは国境の狭間の町にいた。彼らを突然に訪ってきたのは国境の向こう側、ガイゼス王国の巡検使を名乗る細面の美少年、ハル。「契約成立だ」出会いは唐突で、成り行きまかせで けれど必然だったのかもしれぬ。この瞬間、彼らの運命のダイスが予想もしていなかった方向に転がりはじめた。

## プロローグ

小さな港町の酒場には明かりが灯り、家々の煙突からは夕餉の支度の煙が上がる。

海に大地に、そして全ての命あるものに、惜しみない慈愛を注ぐ父なる太陽が雲たちを従えて引き上げると、かわりに姿を現すのは、プルシャンブルーのドレスに輝く星々を散りばめた月の女神。

月光に照らされた町の広場には、家路を急ぐ人があり、酒瓶を片手に談笑する若者があり、愛を語らう若い男女がいる。

それぞれが、それぞれの時を過ごし、いつもと変らぬ情景がそこにある。

石造りの長椅子に並んで腰をかけていた一对の男女の、男の方がふと広場の中央に目を奪われていた。男の視線の先にあるものに気がついて、女は不平を鳴らす。

幾重にも重ねられた薄絹の足元まであるドレスに、ゆったりとした袖口から伸びた腕や、裾からちらりと覗く足首はよく締まり、地上の真珠アルペルムよりも白い。月光を紡いだごとく艶やかで、清らかな金色こんじきの髪に、ヴェールに覆われた顔は、遠目に見てもよく整っていいそうだ。

「ありや、月の女神アイルの落とし子だ」

ごくりと喉を鳴らした男の頬を、思い切りつねろうとした女は、どこからともなく流れてきた笛の音に手を止めた。

優しく、穏やかな音色のなかにかすかな憂いを秘めて響くそれは、聞くだけで心が洗われるよう。

男が立ち上がった。

海からの湿った風に乗って流れてきた笛の音に合わせて動くたびに、絹糸のごとく艶やかな髪はゆれ、白い月あかりを受けて光の粒を広がり散らし、幾重にもかさねられた薄絹の玉衣たまぎぬがなびいて白磁のように透った肌が露わになる。

すつと伸びた四肢は樂にあわせてしなやかに、時に力強く動く。男を窘めようとした女は、自分が何をしようとしたのか忘れた。否、その場に居合わせたほとんどの人間が呼吸をするのも忘れたかもしれない。

家族の待つ我が家へ急いでいた男は足を止め、呆然と立ち尽くす。酒瓶を片手に悪態をついていた若い男たちは、口に含んだ麦酒フエーガを飲み込むことさえ忘れた。

薄いヴェール越しに透かし見える、宝玉のような双眸は世のなにごとくも映していないようであり、ときおり投げかけられる意思のある流し目と、ほころぶ薄紅色の唇は見る人を惑わせ、恍惚とさせる。まるでそこだけが時が止まったようだった。

いつしか出来上がった人垣に響くのは、澄んだ笛の音と、舞姫の衣に縫い付けられた硝子の鈴の鳴る音と、衣擦れのかすかな音だけ。樂が終わる舞姫がひざまずいて優美に一礼しても、誰一人として金縛りにあつたように動けなかった。

風の精霊エアールたちが舞姫の薄絹の衣をひるがえして抜けていく。凧いだ大海のごとく静まり返った街道で一人の男が気が狂ったように手を叩きはじめたのをきっかけに時が動き出して、夜空に割れんばかりの拍手と口笛が鳴り響いた。

舞姫は人々の賞賛に何度も向きを変えて跪いて応える。

小さな港町の夜に、拍手と口笛はいつまでも止まらなかった。

## フィースの加護を・1

「ずいぶん不細工な顔だな、リド」

セティは目の前の青年に茶化すように言った。

面と向かって不細工と言われた青年

リドルフ・クライ

ン・アナリは、全く気にしたようすもなく、先ほどからそうしているように黙したまま、機械的な動作で料理を口に運んだ。

「この顔は生まれつきです」

いつもと変わらぬ、涼やかなテノールで返された言葉にセティは苦笑した。こういう言い方をするときのリドルフはいけない。長いつきあいの中で、それは嫌というほどに学んでいる。

「いいかげんに機嫌を直せよ」

セティも大皿に盛られた野菜の香草煮に手を伸ばした。木製の円卓に並べられた料理の大半は、菜食主義のリドルフのためにセティが注文した野菜や香草のみを使用したものである。

「機嫌が悪いのではありません。ただ、あなたの浅はかな行動を憂いているのです」

セティは杯に並々と注がれた酒に口を付けた。変った香りのする酒は、舌先が痺れるほど強烈だった。

「協力してくれたのはリドだぞ」

「自身の浅慮も十分に悔いています」

彼らしい、堅苦しいものいいにセティは思わず笑った。

天然の繊維の色をそのまま使った飾り気のない麻のローブに、剃髪した頭。神殿を出ても一向に俗気に染まる気配はなく、酒は飲まず、菜食を守り、朝、夕の祈りも欠かさない。

「とにかく」

リドルフは手と口を布で拭って、ようやくその切れ長の空色の瞳をまっすぐにセティに向けた。

「あなたはなにもせずとも、十分に人目を惹くのです。もう少しそ

れを自覚していただけませんか？」

円卓に肘をつき、片眉をひょいと上げて笑ったその仕草にどれほどの視線が集中しているのか、本当に認識しているのかと、リドルフには疑わしく思える。

セテイは美しすぎるのだ。

無造作に流した肩甲骨を覆うほどのブロンドの髪は絹糸のように艶やかで、鼻梁は通り、やや厚めの唇はきれいな薄紅色。どれほど高名な彫刻家であろうとも造り上げられぬだろう絶妙なバランスで組み立てられた面は、黙っていればまるで作りもののように、気圧されるほどの硬質の美しさだ。しかし、その端正な顔には喜怒哀楽が人目をはばかることもなくはつきりと浮かぶため、生気に溢れているのが、また魅力だった。

「これでも、自覚しているつもりさ」

その美貌に、さらなる魅力と妖しい美しさを与えるのはその瞳だ。セテイは淡紫色にほんの一滴銀色を落としたような、稀有な瞳の色の持ち主であった。その幻想的な色の瞳は、陽光と月光の下では色が変わり、角度によって全く違う輝きを放つ。その瞳に魅了されぬものなど、この地上に存在するといふのだろうか。

「そう神経質になることもないさ。ここは、国境の狭間の町だ。誰もあれの意味など知らない」

セテイは声を落とした。

「誰も、私とリドが、あの二人組みだとは思わない」

リドルフが後ろの席に座る三人組みの若い男をちよつと見遣って、セテイに視線を戻した。

北方の大国、ナディールと、今や南方の大国となった、ガイゼスの国境の狭間に位置するこの小さな港町、アイデンでは今、ある話題で持ちきりなのだ。この酒場でも客たちの話題といえばそればかりだ。

「あなたのような瞳を持つ人間は、そうはいません」

「思い込みは、そう簡単には破れないよ」

町の人々が探しているのは、二刻ほどまえ、どこからともなく現れて消えていった、舞を披露したこの世のものとは思えぬほど美しい女だ。

「だといいいのですが」

椅子のうえに片膝をたてて、豪快に酒をあおるこの青年と、先刻広場で人々を魅了した舞姫をつなげるのは、確かに難しい。

口を開きかけたリドルフを制して、セティは言った。

「もうしないよ」

セティにはさほど重大なこととは思えなかった。けれど、これ以上リドルフのお小言を聞くのは億劫だった。

「ただ、ちよつと、退屈だっただけさ」

セティを見つめるリドルフの眼は、悪戯好きの我が子を見守る母親のようだった。

食事を終えた二人は、宿までの港沿いの通りを歩いた。

この町に着いてはじめての二、三日は海面に揺れるいびつな月を指して喜び、リドルフが止めるのも聞かずに、身を乗り出して海の水をすくって口に含んでみせたり、子供のようにはしゃいでいたセティも、さすがに十日が過ぎるとただ眺めているだけだった。

彼らの生まれ育った故郷は遙か北の国で、山と谷に囲まれ、冬には雪も積もる。大陸中を行き来する商人でもなければ、そこに住む人間の多くは海を一度も見ることなく生涯を終える。むろん、十七歳のセティも二十三歳のリドルフも、海を目にしたのは初めてだったのだ。

「とうに陽は落ちたのに、暑いなあ」

海には見慣れても、この湿気を多分に含んだ生ぬるい夜の空気には慣れない。

「ガイゼス王国へ入ればもつと暑くなるでしょうね。草木は枯れ、砂の大地があるというぐらいですから」

「いいな、砂の大地か」

セティが倦んでいるのが、リドルフにはよく分かっていった。

アイデンでの滞在は一月になるうとしていた。ガイゼスの国境は目と鼻の先だとういうのに、未だその地を踏めずにいる。

ナディール王国からの完全な独立を目指し、今日のガイゼス王国の基礎とすべき勢力が北の大国ナディールを相手に大戦を展開したのは、今から十六年ほど前のことになる。およそ一年間の、決して長くはないが、世界が滅びると言われたほど激烈な戦いのち、両国間で停戦条約が調印され、そのまま今日に至る。

そうい背景があるのだから、戦時ではないとはいえ、当然、両国間の人の行き来は自由というわけにはいかないのだ。

「なあ、リド。私は何に見える？」

「何に、とはどういう意味ですか？」

「傭兵か？ それとも商人か？」

幾分酔いが回っているのか、ほのかに頬を上気させた、女神の化身のような青年を見つめて、リドルフは困ったように笑った。

「いいところ、大商人の子息でしょうね」

「大商人の子息では、審査を受けなければならないじゃないか」

セティは憤慨したようだったが、リドルフとしてはそれでも譲歩した答えを口にしたつもりだった。ひいき目なしに見て、セティが大商人の子息に見えるとは思えない。

「やはり、密入国しかないかな」

ガイゼス王国に入国するには、身分証を沿えて国境で審査を受けなければならなかった。

審査には時間がかかった。そのうえ、許可がおりないこともそう珍しくない。例外が認められるのは、大陸中を旅する傭兵や商人、一部の高位の神官などだけだ。彼らは簡単な書類の記入と、役人との面談のみで入国を許される。

「なにか、もつと平和で合理的な方法があるはずです。もう少し、考えましよう」

「懐も大分暖かくなったことだしな」

セティが芸人のような真似をしたのは、退屈していたのとは別の



理由があつた。

路銀が底をつきかけていたのだ。すぐに金に換えられるものはいくらか持っていたが、ナディール通貨もガイゼス通貨も流通する、国境の狭間の町では換金の手間賃がかなり割高なのだ。

「セティは路銀の心配などしなくていいのです。仕事なら、私がしますから」

とは言つたものの、リドルフの笛の音に合わせたセティの舞いに人々が投げてよこした対価は、今の生活を二月ほど続けられるような額のものだった。リドルフが仕事をする必要は、当面はなさそうだった。

## フィースの加護を・2

並んで穏やかな海を眺めていたセティが唐突に振り返った。リドルフの反応はそれに一呼吸ほど遅れた。

「なにかご用ですか？」

五人の中で一番先に口を開いたのは、リドルフだった。陽に焼けたうえに、酔っているのか赤黒い顔をした三人の男が、一斉に声を上げて笑った。

「坊主には用はねえ。俺たちが用があるのは、横のきれいなお嬢さんだ」

「確かに私は神に仕える者ですが、私の横に女人などおりません」

真面目腐って答えたリドルフに、男たちはまた声を上げて笑った。

「坊主、怪我をしたくなければ引っ込んでな。俺は、このあたりじや、ちいと名が通っているもんだ。大人しくお嬢ちゃんさえ置いていってくれれば、いい」

リドルフはちらりと傍らのセティを見た。儼然とした顔はしているが、まだ、剣の柄に手は伸びていない。リドルフはセティがどのくらいの酒を飲んでいたか、思い出そうとしていた。

「あなた方は勘違いをしています。この人は」

「アニキ！ こいつ、坊主のくせに剣なんか背負っていますぜ」

リドルフは彼らにとって有益で、重大な事実を知らせようとした。しかしそれは、一番小柄で前歯の突き出した男によって阻止された。

「ほう、このあたりじゃ珍しい代物だな」

リドルフが背負っている剣は、かなり大ぶりだった。鞘に納められているので定かではないが、抜けば長身のリドルフの身の丈と同じほどはありそうだ。

「北の国では、坊主がそんな物騒なものを振り回すのか。おもしれえ、お手並み拝見させてもらおう」

「これは、抜けません」

リドルフの声は静かだった。

「格好つけてる場合じゃねえぞ」

「本当に、抜けないのです」

リドルフは後ろ手に大剣の柄を掴んで、力を入れて引き抜く素振りを見せた。しかし、大剣はぴくりとも動かない。

一見で聖職者と分かるいでたちのリドルフが、背に抜けもしない大剣を背負っているその姿は異様といっても過言ではない。勢いをそがれたような格好になった男たちは、次に取るべき行動を迷い、沈黙した。

「そんなに刃を見たいなら、私が見せてやろう」

絶世の美女が、口を開いた。若い男の声が、いくぶん暑さのやわらいだ夜気によく響いた。

「お、男…？」

「だれがお嬢さんだ。お前たちの目は節穴か」

一歩前に出たセテイの背丈は男たちよりは小さいが、女性にしてはやや高すぎる。隣にいたリドルフが長身すぎたのだ。そのうえ、よく見れば、ほっそりとした体つきながらも肩や腕にはしっかりと筋肉がついており、剣も佩<sup>は</sup>いている。

「さつさと去れ。私は、機嫌が悪い」

セテイがゆつたりとした動作で剣の柄に手をかけた瞬間、腕自慢をしていた真ん中の男の顔色が変わった。

「男には、用はない」

二人の手下を伴って、踵を返した男の後ろ姿を見ながらリドルフが呟くように言った。

「それほど、酔ってはいなかったんですね」

「どういう意味だよ」

セテイがリドルフの癖を知るように、リドルフもセテイの癖をよく知っている。酒を過ぎしたセテイが、何度騒ぎを起こしたことか。しかし、リドルフが口にしたのは全く別のことだった。

「先ほどの男、名が通っているといのはまんざら嘘でもなさそうで

すね」

「どうして、リドにそれが分かる？」

「あなたが発した気がどれほどのものか、肌で感じていたではありませんか」

セティは短く笑った。

「おかげで無駄な血を流さずにすんだ。リドに叱られずにすんだな」  
無造作に衣の胸元を開いて、白い手であおぐそのさまに、近くにいた若い男たちがどよめきたつ。当のセティはきよとんとしたまま、その動作を続けていたが、後ろからリドルフに胸元を押さえられた。「暑いんだ。衣が、くつつく」

「分かっていますよ」

当然の権利で抗議するセティを宥めながら、リドルフはゆったりとした動作で、しかし有無を言わずにセティを歩かせた。

男たちの嫉妬と羨望に満ちたじつとりとした眼差しを、その広い背で受けて、通りを歩いていく。滞在している宿が遠くに見えてきたころ、リドルフは小声で言った。

「やはり、なるべく早く国境は越えたほうがいいでしょうね」

セティは立ち止まり、怪訝な顔をして、リドルフの顔を覗き込んだ。

「セティと、あの舞姫が結び付けられるのは、時間の問題ですよ」

「だから、皆が探しているのは、女だろ」

「確かにそうです」

リドルフが空色の瞳をじつと向けてきた。

「けれど、黙って立っているあなたが、必ずしも男に見えるとは限りません」

セティは十七歳の青年としては極端に小柄でもなく、華奢なわけでもない。一方リドルフは平均身長をはるかに上回る上背があり肩幅も広く、がっしりとした体付きをしている。そのせいか並ぶセティが実際よりもだいたい華奢に見えることも多いようだ。

「俺が女に間違われるのはリドのせいだ」としばしばセティは責任

転換してみせるのだが実際のところは体型というよりも、類稀な美貌と、長いブロンドの髪が原因の多くを占めていることは間違いない。

「まあ、その時はその時だな」

彼自身、旅の道中で起こった数々の「女と間違われた事件」を思い出したのか、セティは反論せずに、このうえなく魅力的な笑顔を浮かべただけだった。

### フィースの加護を・3

宿の前には栗色の髪をした太った女主人と、小柄な少年らしき人影があつた。

遠目にも華奢なその少年の肌は褐色で、不揃いに切られた顎先ほどまでの髪は夜の闇にも負けぬ漆黒で典型的な南方系の人種である。

「ああ、戻ってきた」

女主人はセティとリドルフの姿を見ると指差した。

少年はリドルフの前まで小走りにやってくる、優雅な仕草で一礼した。

「わたしはガイゼス王国の巡検史 ハル・アレンと申します」

端正な顔立ちであつた。黒鳶色の瞳は黒目が大きく、睫毛が長い。逆三角形の顎は小さく、どちらかというとな全体的に線が細い印象を受けるが、かなりの美少年である。

「突然お尋ねして申し訳ありません。街で耳にしたのですが、あなたはお医者さまでいらっしゃいますか？」

言いながら、彼の視線はリドルフの肩ごしに突き出ている大剣の柄に釘付けだつた。初対面の人間は、いつものことであるからリドルフは特に気にしたようすもなく律儀に答えた。

「いいえ、私は医者ではありません。大地神アネリに仕えている者です」

リドルフの返答に少年は明らかに落胆の色を見せた。

「けれど、法と薬草を使って病人や怪我人を看ることを生業としております」

「ああっ！」

ハルと名乗つた少年は、歓喜の声を上げた。

「わたしの部下が道中で襲われて怪我をしたのです。なんとかこの町まで辿り着いたのですが、見ていただけないでしょうか？」

リドルフは表情を変えずに一瞬困惑した。

ナデール王国の階級制度に反発した人々が、各地で反乱を起こ

したのは今から三十年あまり前のことになる。反発の意思表示は、やがてナディールからの独立というふうにも明確に姿を変えた。有能な指導者と、幾人かの勇将、潤沢とはいえないがそれなりの軍資金と食糧、それに多少の運に恵まれた彼らは大陸随一の大国、ナディールを相手取り、完勝というほどではないが、何とかその目的を果たした。以来、十六年。ガイゼス王国は物流を良くし、他国との交易も盛んで、瞬く間に大陸において富国といわれるほどの国に成長した。

しかし、リドルフが返答を躊躇ったのは、彼とセテイの郷国から独立した、敵国とも言える異国の少年に頼まれたからではない。

ハル・アレンと名乗った目の前の少年は極めて簡素な旅人のなりをしているが、その仕草や立ち振る舞いには、明らかに気品がある。また、外套からわずかにのぞく、腰に下げた剣は柄だけではなく、鞘にも装飾が施され、とても一般市民が持ち歩くようなものではない。それだけでも、この少年がガイゼス王国において、身分の高い人間であることを明確に示していた。隠れて旅をしているわけではないが、リドルフは面倒を恐れて、他人に、特に高貴な人間とはなるべく深入りしないようにしている。

無表情で振り返ったリドルフにセテイは快活に答えた。

「いいじゃないか。せっかくリドを頼ってきてるんだから」

リドルフが身分の高い人間と関わり合いにならぬように避けているのは、全てセテイのためだ。セテイもそれを知っている。理解したうえでリドルフにこう言うのだ。リドルフは彼のこんなところが好きだった。

ハルに案内されたところは、二人が宿泊しているところよりも数段豪華な宿の一番大きな部屋であった。部屋は二間続きになっており、手前には簡素ながら応接間の役割をしているようで、ソファとテーブルがしつらえてあり、奥の間は応接間よりも広く大きな寝台が二台おかれている。

「ハル様！ ご無事でしたか」

ハルの姿を認めた途端に叫んだのは、小柄なハルよりもさらに小柄な初老の女であった。

きつく結んだ髪には白いものがずいぶん混ざり、手にはしみが浮き出ている。そのくせ動きは素早く、目には人を威圧するような鋭さがある。

「こちらは、クライン・リドルフ殿だ。お医者様ではないが、カイを診てくださるとおっしゃった」

「クラインですと？」

クラインとは神に仕える男性の総称である。神に仕える女性女はクラスティーンと呼ばれる。クライン・リドルフというような呼び方は聖職者を敬う呼び方であり、俗人からはこう呼ばれることが多い。

「リドルフ・クライン・アナリです。アナリ神に仕えております」

柔らかな笑みを浮かべて差し出したリドルフの手を、老女は取らなかつた。

「リドルフ殿はまやかしの術を使って、病や怪我を治すのかね？」

「メイラ！ クライン・リドルフ殿に失礼ではないか」

メイラと呼ばれた女を叱咤するハルに向かって、リドルフは穏やかな顔を向けた。

「いいえ、いいのです。ガイゼスの方にとって、私どものような存在は決して気持ちの良いものではないでしょうから」

老女の挑むような視線を正面から浴びても、リドルフの表情も、声も憎らしいほどに平生となにひとつ変わらなかつた。

「ハル様、わたくしが町中を駆け回ってもう一度医師を探して参ります。どうかリドルフ殿とそのお連れ様にはお引取りいただきますよう」

「メイラ……」

ハルは奥の寝台に横たわっている怪我人とメイラとリドルフとを見比べて、嘆息した。彼女の姿勢は強固で、反論を許すふうではない。誰にとっても愉快でない空気が流れる部屋に、怪我人の鞆ふいしのよ



うに荒い息遣いだけが響いていた。

「あんたがリドを信用しないのは勝手だけど、一刻も早く処置しなければあの人は死ぬ。無意味なこだわりのために、助かるかもしれない命をみすみす捨てるのか？」

両腕を頭の後ろで組んだ格好で放ったセティのぶっきらぼうな言葉が、沈黙を打ち破る。

「そんな下らないもののために、人の命は左右されていいのか？」

## フィースの加護を・4

ハルが、黒鳶色の大きな瞳をさらに大きく見開いて、息を呑み眼前の美しい青年を見つめた。セテイの声には激しさも強さもなく、ただ当然のことを口にしたようすだった。けれど、その姿はあまりにも眩しかった。

下唇を噛んでうつむいたメイラが、一步横に避けた。リドルフは黙って小さく頭を一つさげてから、彼女の脇を抜けて、怪我人が寝かされている寝台の側に立った。

「これは……」

傷口を見るなりリドルフは額を曇らせた。

「刃傷ですね。しかも、かなり深い。止血はどなたが施したのですか？」

「私だ」

壁を睨んだまま、腕組みをしたままメイラが言い捨てる。

「メイラには多少医術の心得があるので」

「よく出来た方法です。失血量が少なくてすんでいます」

リドルフは宿の女主人に頼み、熱い湯を用意させた。湯を運んできた彼女の神妙な顔付きは、室内に立ち込める血の臭いと、リドルフが取り出した見慣れない医術用具が理由だろうと、誰もが気を止めなかった。しかし、このときすでに彼らはいわれのない悪意と、愚かなほどに利己的な算段の包囲網にいたことを、この数時間後に知ることになる。

煮えたぎった湯のなかに放り込んでいた針を取り出し、リドルフは右腕の付け根から胸のところにかけて大きく開いた傷を、丁寧に縫いはじめた。

「リドルフ殿はどちらで医術を会得なさったのですか？」

ハルは驚きを隠しきれなかった。彼の手付きは鮮やかで、傷口は見る間にきれいに塞がっていく。

「ナデイルの王都、ハプラティシユのアナリ神殿には、各地からすぐれた医師が集います。中にはガイゼス王国で栄えている最新の技術を持つ者もいるのです」

一般に、医術の水準は今やガイゼス王国が一番高いと言われている。しかし、北の国の人であるはずのリドルフのそれは、ハルとメイラの故国であるガイゼスの高等な医師の持つものと何ら変わりがなかったのである。

「傷口は縫合しましたが、問題は内蔵が負った傷です。それを癒す手伝いをするために法を使いますが、よろしいですか？」

首が干切れるかと思うほどの勢いでそっぽを向いたメイラに、リドルフはわずかに苦笑して付け加えた。

「悪魔被いのために法を使うわけではありません。この方自身に備わっている自ら傷を治そうという力を、強くするために使うのです」  
相変わらずメイラはあらぬ方を見据えたままだったが、ハルが頷いたのをリドルフは全体の意思決定とみなした。

ベッドに横たわっている男は、筋肉隆々とした逞しい体つきの青年で髪はハルに比べると赤い。もともとは黒髪だったのだろうが、日に焼けて色が抜けたようなそんな色である。

年の頃はハルやセティよりも年長で、恐らくはリドルフと同年くらいであろう。

リドルフは縫合したばかりの傷口の上にそっと右手を置くと、目を閉じた。

「オン ムサカ アナリ…… オン ムサカ アナリ……」

彼の口から紡がれる霊妙なマントラは優しく、穏やかに人の心に染みわたる。意識の朦朧としている怪我人やハル、セティはむろんのことメイラまでもが我を忘れて聞き惚れてしまふ始末である。

リドルフの手が返された。

いつしかメイラとともに食い入るように見ていたハルは思わず目を細め、その後ろにいたセティも顔を背けた。メイラだけが同じようにそのさまをじっと見ていた。二人が再び視線を戻したときには、

リドルフは傷口から手を離していた。

「彼は助かったのですか？」

何事もなかったかのように怪我人の体の上に毛布をかけて、リドルフは使った針を再び消毒しはじめていた。

「いいえ、まだ分かりません。これから悪いものを体の外に出す薬草を煮出して、飲ませます。私ができるのはこれまでです。あとはこの方の体力と気力しだいです」

嘆息して目を伏せたハルの脇でメイラが厳しい目で、先ほどよりは幾分穏やかに呼吸する怪我人を睨みつけていた。

「殿下をお守りする立場にありながら、これほど殿下のお心を痛ませるとはなんとたるふとき者。目を覚まさなければ、不肖の弟子にこの師自らが引導を渡してくれましょう」

彼女なりの気遣いに、リドルフは思わず目を細めた。

「カイは助かりますよね？」

大きな黒鷲色の瞳を潤ませて顔を見上げるハルに、リドルフは麻袋から乾燥した薬草を取り出す手を止めた。

「人の命を見放すのも、繋ぎとめるのもすべては全知全能オリスの神の思し召し次第。私達にできるのは、良いほうに転ぶように手助けをするだけです」

ふいとセティは部屋を出て行ってしまった。

ランプの炎が揺れ、仄明るく（ほのあか）照らし出された壁にうつる影が乱れた。

ベッドの傍らに引き寄せた椅子に膝を揃えて座るハルは、前置きなく突然肩から掛けられた外套のあたたかさに驚きながら、外套を肩にかけて人物を見上げて丁寧な礼を述べた。

「お休みにならないのですか？メイラ様も休まれたようですよ」

「メイラは襲撃にあつた時、老体に鞭打って剣を振るい、賊を必死で追い払ってくれたのです。私は、皆に守られていただけでなにもしなかつたのです。せめて、カイの側についているくらいしか、できません」

ソファの上に横になったメイラの体は小さく、寝息に合わせて規則正しく上下する背中が丸かった。

「セテイ殿はまだ外にいらっしゃるのですか？」

セテイが部屋を出て行つてから、もうずいぶんと経つ。しかし、

リドルフはそれを気に揉むようすもない。

「何か、気分を損ねるようなことをしたのでしょうか？」

「いいえ、そんなことはありませんよ。セテイは人の生き死にに、立ち会つのが苦手なのです。ただそれだけです」

「ああ、それなら私もよく分かります。目の前で人が死ぬのは本当に辛いことです」

ランプの灯りに照らされたハルの繊細な線を描く横顔は、翳っていた。

「幸いメイラは無傷でしたが、十数人の部下が瞬く間に倒れ、カイも私を庇つて深手を負いました」

「十数人の部下の方が……」

リドルフが驚いたのはハルが一時に失つた部下の多さと同時に、それだけの部下を伴う身分にあるということである。続ける言葉を

失ったリドルフに気がついて、ハルは意図的に話題を移した。

「お二人は北から南へ旅をなさっているのですか？」

「ええ、そうです」

リドルフはセティとともに一年ほど前に故郷を発ち、ようやく国境の境まで来たのだと言った。

「どちらに行かれるのですか？ ガイゼスの領内でしたら、私はほとんど回ったことがあります」

「目的地は分かりませんが、とりあはずは国境を越えて、ガイゼス王国に入るつもりです。ただ……」

リドルフが淡い苦笑を浮かべた。

「入国手続きにいくぶん、手間どいそうでした」

「クライン・リドルフ殿はアナリ神殿の神官でしょうか？ 手続きは簡単に済むかと思いましたが」

「私は下位の神官ですし、あれの説明もいるでしょう」

リドルフが目で示したのは、今は下ろして壁に立て掛けているが、平素は肌身離さず背負っている身の丈ほどの大剣だ。アナリ神殿の神官にはおよそ似つかわしくない代物であるし、何よりも、このクライン・リドルフという青年僧には全く結びつかないものだった。

「それに、私だけのことはありませんので」

「身分証は？」という言葉で、ハルは飲み込んだ。ナディールとガイゼスは確かに友好的な関係とはいえないが、今は戦時ではない。それなりの階級、つまり、奴隷でさえなければ身分証があり、身分証があれば大きな犯罪歴でもないかぎり、多少時間がかかっても入国できる可能性のほうが高い。そして、ハルの目にはこのいかにも人が良さそうな、自らクラインと名乗る青年と、桁外れの美貌をもつ闊達な青年が、奴隷や犯罪人であるとは到底思えなかった。しかし、これ以上は聞いてはいけない気がしたのだ。何か簡単には口外できぬ、事情がありそうだった。

「王都に近づくにつれて治安はよくなりますが、ここ最近頻繁に腕

の立つ賊が出没するようです。私も巡検使として各地を回っておりますが、今回のような目に遭ったのははじめてなのです」

「お気持ち、お察しいたします」

リドルフ怪我人、カイの額に浮かんだ汗を拭ったりリドルフは椅子を引き寄せて、ハルと並ぶような形でベッドの傍らに腰を落ち着けた。

「道中で耳にしたのですが、ガイゼス王国では国王陛下のお体が優れないとか」

「ええ、そうなのです。国王陛下は一月ほど前より体調を崩されて、公務を休んでおられます。公式発表はされていないのですが、人の口に戸は立てられません」

ハルは包み隠さず、母国の重大な懸念を口にした。まだ出会ってからそれほど時は経っていないが、ハルはこの実直な異国の僧に対して好感を覚えていたのだ。

「賊が頻出するのは、そのあたりの事情にも関係あるのでしょうか？」

「どうでしょう。全く関係がないと断言するのは、いささか浅慮だとは思いますが」

「町の方から伺ったのですが、南に行くにつれて賊は好んで小剣を使うそうですね。気温が高くなると、重量のある大振りの剣は体力を消耗してしまうからだとか」

「おっしゃるとおりです。相当の修練を積んだ正規軍や、良家の抱える私兵では、やはり威力の強い中剣や大剣を使うものが多いのですが、それ以外では体力の消耗を抑えるために短剣や小剣を使うのが一般的なのです」

言いながら、ハルはある重大な事実に気がついた。信じられぬような思いで、額に玉のような汗を浮かべて眠るカイの姿を見る。

「クライン・リドルフ殿」

ハルの声は顔と同じように強張っていた。

「はい」

「彼の、カイの傷はどうでしたか？」

思考がまとまらず、うまく言葉にできないのがハルにはもどかしかった。

「カイの傷は小剣や短剣によるものでしょうか？」

「いいえ。傷口から察しますには、カイ殿の傷は中剣がそれよりも少し大きな刃の剣で斬りつけられたものだと思います」

ハルは記憶を辿りはじめていた。

歓声と悲鳴。土煙から垣間見える剣戟。部下が次々と倒れていく中、メイラが孤剣を抜き、右に左になぎ払う。ハルも腰間の秋水に手を伸ばし、抜き払った。剣。刃と刃が衝突して青い火花が散り、構えた両手は簡単に痺れた。眼前に迫った覆面の男、見上げるその視界に割って入ったカイの背中……

「実は私とセテイもこの町にたどり着く直前に、何度か賊と遭遇したのですが、いずれも小振りの剣を使っていました。ちょうど、セテイやハルさまがお持ちのような」

リドルフの視線の先には、壁に立てかけられたハルの剣があった。中剣よりも二回りほど小さい剣の柄にはセテイの瞳にも似た大きな紫水晶がはめ込まれており、ランプの明かりをうけてきらめいていた。

「私達を襲ったのは本当に賊だったのでしょうか」

ハルは独白しながらなにか重苦しいものがのしかかってくるのを感じた。



## フィースの加護を・6

足音もなく、いつの間にか戻ってきた女神の化身かと思うほど美しい青年の姿にハルは少なからず驚いた。そして、彼が口にした言葉はそれ以上に彼を驚愕、というよりは慄然とさせた。

「困まれたみたいだ」

「困まれた ?！」

ハルが上げた甲高い声に、別の間で休んでいたメイラが目覚ます。リドルフは相変わらずゆったりとした動作で、寝台に横たわるカイの額の汗を拭った。

「宿の主人は買収されたようだ。主人も他の客もいない。ここはすでに、もぬけの空だ」

冷静なセテイの声とは裏腹に、ハルの顔は蒼白といってもいいほど蒼ざめていた。

「ハル様、ご心配には及びませぬ。私が賊を追い払って参りますゆえ、ここから動きなさいませんように」

目を覚ましたメイラがハルの傍らに寄ってきて、そう言った。

「賊なんかじゃない。かなりの手だれ揃いだし、宿の主人を買収するぐらいの金があれば、わざわざ襲撃など企てない」

セテイの言うことはもつともだった。そして、ハルは自身にのしかかってきた重いものが、決して杞憂ではないことをこのとき悟った。

「逃げる　　のは、無理だな。今、この人を動かすわけにはいかない」

カイを見遣ったセテイに、リドルフが小さく頷いた。

「宿への入り口は、正面と裏口の二つ。外へ出て困まれるよりは、そこを塞いだ方が確実だ。正面は私が引き受けよう」

「お待ち下さい。狙われているのは、私たちです。お二人を巻き添えにするわけにはいきません。お逃げ下さい」

「もう、巻き込まれているよ」

セテイの口調には嫌味が全くない。それどころか、口元に浮かべた笑みは不敵といつてもよく、呆れるほどに魅惑的だった。

「それに、怪我人と年寄りと子供を放つて逃げるなんて、私はともかく、リドが納得するはずもない」

「人のせいにするんじゃないやありません」と、空色の瞳が雄弁に語っていたが、実際にリドルフはくすり、と笑っただけだった。

そして、彼の言葉にもっとも分かりやすい反応を示したのは子供扱いされたハルではなく、老人と言われたメイラだ。日に焼けた浅黒い顔を赤くして、険しい顔でセテイを睨みつける。当のセテイは涼しい顔だった。

「リドは怪我人を頼む。私が正面を引き受けよう。裏口は、婆さん」  
今にも噛み付きそうな様相をていしていたメイラが、その一言に毒気を抜かれたような顔で黙然とセテイを見返した。寸分の狂いもなく整った顔には淡い微笑が浮かんでいる。身のこなし、まとう空気が、そんなものだけで、セテイはこの中で剣に長けているのは誰なのかをよく分かっていた。

「婆さんではない、メイラだ」

セテイは片眉を上げて、眼前に仁王立ちした小柄な体を見つめた。

「メイラ・ロト」

「メイラ・ロト様。それは、失礼致しました」

膝を折って一礼したその仕草は、常人ならば鼻につくほどにわざとらしいものだったに違いない。けれど、セテイがすると王侯貴族のように優雅に見えるから不思議なものだ。

「ふん。小童のお手並み拝見といこう」

メイラとセテイが連れ立って部屋を出ていくさまをハルは半ば放心状態で見送った。リドルフは相変わらずゆったりとした動作で、眠るカイの額に手を当て、自分の外套を彼の体にかけた。

「リドルフ殿は、落ち着いていられるんですね。このような騒ぎに巻き込まれたというのに」

「セテイがいますからね。彼に任せておけば大丈夫でしょう」

ハルはリドルフの穏やかな声に、面食らった。

「セテイ殿は、お強いのですか？」

「さあ、どうでしょう」

リドルフが小首を傾げた。

「私には剣のことは、よく分かりません。でも」

ハルは壁に立てかけられたままのリドルフの大剣を、ちらりと見遣った。

「心配なのは、セテイが人を殺めすぎることです」

セテイの耳は襲撃者との距離をほぼ正確に測っていた。板一枚の簡素なドアまでは、あと十歩ほど。セテイは目を閉じた。さらに神経を研ぎ澄ませる。

四歩、三歩、二、一……。

六人の襲撃者たちには、光が走ったようにしか見えなかった。

簡素な木戸に先頭の男の手が触れるか触れないかというところで、木戸は向こう側から勢いよく開いたのだ。予期せぬ事態に口と頭巾に包まれた顔から、わずかにのぞく目を大きく見開いて、男はその光の正体に気がついたか否か定かではないが、そのまま前のめりに倒れた。

驚愕に半歩ずつ退いた頭巾に顔を包んだ襲撃者たちが目にしたのは、淡雪のごとく白い頬に、紅い返り血を受けた目を疑うほどに美麗な存在。

「次は誰だ」

浮かんだ不敵な笑みは、つくりもののように美しいその顔を、妖艶に彩った。同時に目の前の人のかたちをしたものが、生きている人間で、なおかつ若い男だということを知らしめる。

セテイは、長剣をかまえたまま呆気にとられている男の右腕を切り上げた。獲物の柄を握ったままの、逞しい腕が四カベル（約二メートル）ほど飛んで、鈍い音を立てて地面に落ちる。苦痛と憤怒に顔を歪め、男は地を転げた。

「不意打ちとは、卑怯ではないか」

この世のものとは思えぬほど美しいその顔に、先刻のものは異なる類いの微笑を浮かべて、青年は浴びせられた罵倒に応えた。

「子供と怪我人の一行を人数で囲むのは、卑怯とは言わないのか」

これは戦の一騎打ちではない。名乗りを上げる必要などないし、それどころかセテイに言わせれば倍以上の人数を相手にするのだから、先手を打つのは当然であった。もつとも、襲撃者たちにとっては、これほどまでに腕の立つ人間がいるのは計算違いであるから、泣き言の一つも呶えなくなるのも、それは当然だった。

「小賢しいことを！」

セテイの動きには一切の無駄がなく、流れるようであった。

強烈な一撃を逆らうでもなく、受け止めるでもなく、いとも簡単にいなし、手首を翻す。男の首筋に光が走ったのとほとんど同時に、紅い液体が吹き上がり、白い覆面を染める。

セテイの舞は、先刻町の人々をそうさせたように、まさに見惚れるほどに優美であった。しかし、それがただの舞ではなく、襲撃者たちを一秒ごとに死後の世界へと誘う魔の舞であることは疑う余地もない。彼が金色の髪をなびかせるたびに、覆面の襲撃者たちは血飛沫を小さな港町の夜に撒き散らす。

ものの数分で残る一人以外を戦闘不能に追い込んだセテイは、渾身の力をこめて打ち込まれてきた刃をひらりとかわし、その男の鼻先に切っ先を突きつけた。

「仲間を連れて引け。勝負はついている。私は無用な殺生は好まない」

彼の言うことはまんざら嘘ではなかった。絶命しているのは、最初に斬り付けられた男だけで、それ以外は重傷で済んでいる。もつとも、早く処置をしなければ命に関わるものは多いだろうし、処置をしてももう二度と剣の柄は握れぬだろう。

白い覆面の男は、セテイの言うとおりにした。彼の忠告を素直に聞き入れたわけではないが、どう考えてもすでに勝算はなかった。

一人で六人を相手どりながら、あのいかにも優しげな美青年には五人の命を奪わぬ余力すらあったのだ。それは恐るべき事実だった。

動ける仲間たちを引きずって、男が去るのを見届けたのち、セテイは宿の中に戻った。リドルフとハルが待つ二階へあがる階段で、セテイは全身を返り血に染めたメイラと鉢合わせた。元気すぎる老女は息も上がっておらず、悪態をついた。

「小童に正面など譲ってやるんじゃないわい。役不足じゃ」

メイラが相手にしたのは、セテイが引き受けた半分の人数だった。宿の周囲には合計四つの骸が転がっている。

セテイが面食らったのは一瞬のことで、次にはらしくもない殊勝なことを口にして破顔した。

「師匠の腕前を拝見できなくて、残念でした」

## フィースの加護を・7

返り血に衣を紅く染めて戻ってきた二人に息を呑んだのはハルの方で、リドルフはなにも言わずに立ち上がると懐から布を取り出して、セテイの白い頬にはねた人血を拭った。

「早く、血を落としていらっしやい。染み付きますよ」

その言葉でハルは彼らの身を汚しているのは、返り血なのだということに気がついて、安堵する。

セテイは至極素直にリドルフの言うことに従った。一人黙って今戻ったばかりの部屋をあとにするセテイの後ろ姿と、それを見つめる感情が読みにくい空色の瞳の持ち主とを見比べて、ハルとメイラはなんとなく気圧されたようになり、なにも言えなかった。

「少しのあいだ、カイ殿を頼みます」

そう二人に言い置いて、リドルフも部屋を出て行ってしまった。寝台に横たわるカイの呼吸は穏やかなものにかわり、眉間に深く刻まれていた皺は薄くなっていった。

生温かい夜風によつて流れてきた、かすかな人の声に気がついてハルは開けっ放しの窓から顔を出した。虫除けの細かい網を片手で押し上げて、階下を見下ろせばその正体はすぐに分かった。

リドルフがそれなりに手を入られた中庭に四人の死者を並べ、マントラを唱えている。やはり、聞いているだけで、心穏やかになれるような声だった。同じ人の口から紡がれたマントラによって、一人は命を繋ぎとめようとし、四人は送られようとしている。それはハルになにか不思議な思いを抱かせた。

「殿下、これは非常事態です。一刻も早くウルグリードに戻り、国王陛下にご報告なさいませ」

聞きなれた老女の声に、ハルは現実に戻った。振り返ると、いつものまにか返り血を浴びた衣を改めたメイラが険しい顔で立っていた。「それは、分かっているよ。けれど」

ここは国境の狭間の町、アイデンなのだ。ガイゼスの王都、ウルグリードまでは最短ルートを進み、どんなに急いでも半月はかかる。その上、カイという怪我人を連れての旅ともなれば、倍近くはかかると思っただろうがいい。

「使者を出そうにも、人もいない」

ハルたちが置かれた状況は、彼らにとって限りなく不透明であった。使者を出したところで、無事にウルグリードに辿りつけるかも分からない。襲撃者たちはここで自分たちを殲滅せんめつさせるつもりだったのだ。それほどの覚悟と用意が彼らにはあった。そして、それは限りなく成功する可能性が高かった。

外からはまだリドルフのマントラが聞こえる。

涼やかなテノール。それは驚くほどすんなりと、心の中に入ってくる。

あのととき、偶然一軒の酒場で耳にした、異国の青年僧とその美しい連れの噂が結果としてカイだけではなく、ハルとメイラの命をも救った。一つ何かが違えば、ここで命を落としていた…。そう思うと途端に、得体の知れないひどく寒いものが体を包みこんで、ハルの思考を止めてしまう。

重い空気のなかに戻ってきたのは、リドルフではなくセティの方だった。

メイラと同じように衣は改めており、さらには血を洗い流してきたのか、金色の髪は毛先が濡れている。

「命を狙われる覚えは？」

ぶしつけと言ってよいほど、率直すぎるセティの問いに反応したのはやはりメイラであった。今にも噛み付きそうな従者を目でなだめて、ハルは肩をすくめた。

「ないといえませんが、それは自分が勝手に思っているだけなのでしょう」

セティはハルのものの言い方に好感を覚えた。彼のつつましかかな人柄の全てがその言葉に表れているようだったのだ。「そんな覚

えがない」と断言できてしまう人間のほうが、自分が意識しないところで、およそ人の恨みや妬みを買ってやうなものである。

「何が起こっているのか、検討もつきません。情報も足りないです。今、我々にできることは一刻も早く王都、ウルグリードにこのことを伝えることでしょう」

ハルは彼の従者と話していたことを、そのままセティに伝えた。

「どうやって？」

間髪入れずに返された問いに、ハルは苦笑し、メイラは無然とした。

先刻出会ったばかりの異国の青年にすら、それが現実的にどれほど難しいことなのか分かっている。ハルは考えをまとめながら話しはじめた。

「まずはガイゼスに戻ります。国境には、警備隊もいますからそこから王都に使者を出すことにします。その後は」

言葉を、失った。

国境には警備隊の駐屯地と小さな村があるだけで、そこで半月もあいた王都からの迎えを待つのはあまりにも心細い。彼らを狙っているのが賊ならば、それでもいいかもしれない。しかし、自分たちを取り巻いている状況は、それほど楽観できるようなものではない。さそうなのだ。

「殿下、ラガシュに向かってはいかがですか？シノレ公ならば、必ずお力を貸して下さることでしょう」

何やら思案していたようすのメイラが、ハルに進言した。

ハルは逆三角形の華奢な顎に、負けないくらい細い指をかけて「従兄上のところか」と小さく呟いて、また沈黙する。メイラの口から出た人物の名は、ハルにとって頼りになる人であったが、それまでの道のりを考えると慎重にならざるをえない。

歩いて五日。確かに、王都よりは近い。警備も万全だろう。けれど、ラガシュに行き着くまでに襲撃がないと、どうして思えるだろう。国境警備隊から兵を借りるにしても、そこまでの権限は巡



検使には与えられていない。

同じことを考えたのか、進言した張本人も壁をじつと睨んだまま沈黙する。

二人のようすを見比べながら、彼なりに何やら思案していたらしいセティは突如その二人に向けて悪戯つ子のような笑みを浮かべた。「私たちを、雇わないか？」

唐突な申し出に、ハルはきょとんとして白皙の美青年を見つめた。「巡検使殿が雇った傭兵ならば、国境で審査を受ける必要はないだろう？」

「あ」

入国手続きに、いくぶん、手間取りそうでした。

淡い苦笑を浮かべて言った、リドルフの言葉をハルは思い出していた。

「私たちは国境を早く越えたい。あなたたちには、向いたところがあるが護衛できる人間がない。私は、多少剣が遣えるし、リドルフは怪我人を診れる」

「どうだろう？」と、いうふうにはセティは髪と同じ色の眉を器用に片方だけ上げて、右手を差し出した。

ハルはメイラをかえりみた。

彼自身に、素性の知れぬ異国の青年達を傭兵として雇うことに不思議と戸惑いはない。それどころか、願ってもいない申し出だと思っただ。彼らが、正規の入国手続きを踏めない理由は知らない。けれど、現実にリドルフはカイを治療し、セティは無関係のはずの自分たちのために剣をふるってくれた。それ以上、何があるというのだろうか。

「ありがたい、お言葉ですな」

メイラの言葉にハルは喜んで、セティの手を取った。剣の柄を握るはずなのにセティの白い手は思いのほか柔らかく、温かかった。細められた今まで見たこともない、宝玉のような色彩の瞳は息を呑むほどに美しかった。

出会いは唐突で、成り行きまかせで けれど必然だったの  
かもしれない。

ハルにもセテイにもこの瞬間、自分達の運命のダイスが予想もして  
いかなかった方向に転がりはじめたことなど、むろん知る由もない。  
「契約成立だ」

それからの彼らの行動は実に迅速であった。

死者の弔いをすませて戻ってきたリドルフに、セテイは事の成り  
行きを伝えた。セテイが決めたことには滅多に口を出さないリドル  
フは、ほんの一瞬困惑するような表情を見せたが、意気揚々と語る  
セテイに押されたような格好で、それを受け容れた。もつとも、彼  
ら二人がこの町に留まるのはすでに状況が許さない、ということ  
をリドルフはよく分かっていたのかもしれない。

セテイは一旦、彼らが根城にしていた宿に大して多くもない荷物  
をとりに戻り、それから身支度を整えたハルとメイラ、そして広い  
背に軽々と怪我人のカイを背負ったリドルフと街道の入り口で合流  
した。

夜が明けはじめていた。

明るくなれば、血に汚れた石畳や丁寧に弔われた四人の死者が明  
らかになり、この小さな港町は騒々しくなるに違いない。

「出発にはいい朝だ」

一睡もしていないのが信じられないほど、爽やかな面持ちでセテ  
イが有明の空を手をかざして見ていた。

「私たちの故国では、こんなときこう言うんだ」

「風の神の加護を！」  
フィース

声の持ち主を想像させる、セテイの明朗な声に、ハルの透明感の  
ある声が重なった。

セテイは意外そうな顔で繊細な顔立ちの美少年を見つめた。

「ガイゼスにも、その慣習は残っていますよ。もつとも、信仰心の

篤い人間はほとんどいないですし、法力がある人間もいないんです  
けどね」

元は同じ国、今や別の国の人となった、白い肌の青年と褐色の肌の少年は、顔を見合わせて曖昧な笑みを交し合った。

今日も暑くなりそうだった。

## 巡検使殿・1

昼寝は怠情である。

北の国での常識は、暑い国に生まれ育った人間たちにとっては、とんだ無知と笑わざるをえない。

気温が高い日中は、木陰や岩陰を見つけて入り、眠ってその暑さをやり過ごす。そして、陽が落ちて灼熱の大地が幾分冷めてから、また陽が高くなるまでのあいだだけ歩くのだ。

無用な体力の消耗をさけるため、南国の人間たちは皆そうする。国籍も年齢もばらばらな一行も、むろんその例外ではなかった。

ナディール人は暑さに弱いというのが、ガイゼスでは通説であった。

しかし、彼らを見ているかぎり、その認識は改めざるをえないかもしれない。

「やあ、暑いなあ」

一行でもっとも口数の多い青年は、日に何度もその言葉を口にしたが、それはちっとも嫌そうではなくて、それどころかむしろ愉しんでいるかのようだった。見慣れない植物を見つけては、指差してあれは何かとメイラとハルに問い、害のないものに関しては片端から触りに行く。抜けるような青空を仰いで、口元をほころばせる。

「あまり、太陽を見てはいけませんよ。瞳が焼けてしまいますよ」

一方、保護者のように口うるさくセティに注意するリドルフの方も、暑さに辟易しているようすは全くない。

それどころか、ハルとメイラの二人をなによりも驚かせたのはその、リドルフである。

彼の治療により、通常では考えられないほどの回復をみせたものの、未だ体が完全でないカイを、リドルフは背負ったまま、平然と汗一つかかずに一行の最後尾を全く遅れることなくついてくるのだ。

そのうえ、彼が飲む水の量は他の四人の半分以下であった。驚きを隠しきれずにハルが尋ねると、「神殿ではいろいろな修行を積みましたから」とリドルフは穏やかな口調で答えたものだ。

アイデンを発つてから三日が過ぎていた。

ほとんど互いのことを知らぬまま、利害の一致と成り行きで、行動をともにすることとなった五人だったが、それでも三日も寝食をともにすれば何となく、お互いのことが分かってくるものだから不思議なものである。

セティは、神秘的で儂げなその浮世離れした容姿からは想像できないが、自由奔放、明朗闊達という言葉が服を着て歩いているようなものだった。雇用主であり、平穩無事に国境を渡らせてくれた恩人であるガイゼスの巡検使、ハル・アレンに向つて言った言葉が次である。

「私と一つしか変わらない？ そんなに、小さいのに？」

次の瞬間、横合いから放たれたメイラの孤剣を彼は身軽に跳躍してかわした。そして額に青筋を立てている巡検使殿の気の短い従者に向つて、事もなげに言った。

「危ないだろう。私じゃなければ、貴重な戦力が一人死んでいた」  
日に何度か、セティとメイラのあいだにはこういうやり取りがある。もつともメイラは半分本気で、確かにセティが言うとおり彼が剣技に長けていなければ、命の一つや二つはとうに落としているはずだ。

ハルの忠実な従者で、剣技に長けていて、やや短気な老女は自ら道案内を買って出て、先頭を歩く。正確な年齢は分からないが、恐らくセティやハルよりも四十年以上は齢を重ねているはずの彼女は、信じがたいほどとにかく元気だった。

ぴつたりと予定通りの距離を進むような歩調で進み、休憩の時間は稽古と称してセティと剣を交えたりもする。そして、セティが彼女の主であるハルにぞんざいな口を利くと、先のように鉄拳制裁を行使する。

この時はセティとハルはひよんなことから年齢の話になり、自分よりもずっと年少だと思っていたハルが、実はセティよりも一歳年少の十六歳であるという事実を知って、その驚きを率直に口にしたのが原因だった。

「私は生まれつき体が弱いのです。いくら鍛えても腕は細く、小剣ですら満足に扱うことができません」

確かに、セティが驚くのも無理はなかった。

ハルが華奢なのは顔の造りだけではない。身の丈はセティよりも頭一つ半小さく、衣から伸びた腕や足は少女のようにか細い。

実際一行のなかでもっとも体力がないのもハルで、進むにつれて息が上がリ、ともすれば遅れがちになるところを、皆に迷惑をかけないように健気に何とかついてくる。

「セティ」

窘めるような口調でその名を呼ぶのは、リドルフである。

「あなたは少し無神経なところがありますよ。ハル殿と、メイラ様に謝罪なさい」

品行方正、清廉潔白という言葉は間違いなく彼のために存在している。

遅れがちになるハルを優しい目で見守り、自身もその背にカイという怪我人を背負っているくせに、ハルが限界を迎える直前になるとどうして分かるのか、何も言わず、そっと手を差し伸べる。ためらうハルも、リドルフの優しい空色の瞳を見ると、心がほぐれるような感じがして、なぜかそれに甘えてしまっただ。

四日目の午後。何はともわれ、表面的には平穩にほぼ予定どおりの地点まで到達した一行は、太陽が中天にさしかかったのを見計らって、その日も手頃な岩陰を見つけ、仮眠をとることとなった。

疲労を色濃く見せはじめたハルと、その従者のメイラが先に休む交替の時刻になるとハルは仲の良い上下の臉を無理やり引き離して目覚め、北国生まれの二人組みに休むように勧めた。

「……………クライン・リドルフ殿は眠らないのですか？」

ハルはふと妙なことに気がついた。 外套を敷いたうえに横になったのは、セティだけで、リドルフは自分の外套をセティの体にか  
け、当の本人は安楽座のままむき出しの岩のうえに座っている。リ  
ドルフはおだやかな口調で答えた。

「眠りますよ。セティが完全に眠ったら」

リドルフの大きな外套に包まれたセティがわずかに、身動きした。  
「この子は、そうしないと眠れないのです」

こんなとき、ハルは何とも言えないような気持ちになる。当然と  
いえば、それまでだが彼らについて知っていることは、どれも表面  
的なものばかりなのだろう。

金色の髪を慈しむように撫でて、空色の瞳を哀しげに細めたリド  
ルフの顔を見ていたら、なぜ、と口に出すよりもさきに、なんと  
なく羨ましく思えてしまって、ハルは黙って頷いてみせた。

干し肉と、小麦を薄くのばして焼いたもの、それに水という簡単な食事を済ませた一行は、再び歩きはじめた。あと数時間歩けば、目的地ラガシユに到達する。

歩きはじめてすぐに異変を察知したのはセティ、それに一呼吸遅れてメイラとリドルフである。

薄い膜のように、あまりにも頼りなく自分たちを包んでいた、平穩というものが破れたのだと悟っても彼らは驚愕も落胆もなかった。

「リド」

「殿下」

メイラとセティが同時に、呼ぶ。

ハルが訝しがるようにリドルフの顔を見上げた。

リドルフは「こちらへ」とハルを促し、灌木を背にして座らせる。器用に片手でカイの体を支えながら、自分の外套を脱ぎ、その上にそつと彼を横たえた。そして、歩いているあいだはセティに預けてある大剣を背負い直す。

「大丈夫、心配ありませんよ」

指で地面になにやら見慣れぬ文様を描きながら、リドルフはいつもと変わらぬ穏やかな口調でそう言った。

「ハル殿をお守りするために、私たちは雇われているのですからね」ハルは、両手を握り締めて小さく頷いた。

襲撃者の人数は、一行の一・五倍ほどだろうか。もっともこちらはその半分以上が非戦闘員であるから、セティとメイラが相手にする人数は単純に約四倍という計算になる。

「聞く耳はもっていないと思うが、一応言っておく。私は、無用な殺生は好まない。命が惜しい者は退いてくれ」

セティは言ってから、主語が違うと思った。無用な殺生を好まないのはリドルフで、彼のお小言を聞くのが面倒だから、セティは結



果として無用な殺生を避けなければいけないのだ。自ら好んで人を殺めることはないが、身にかかる火の粉を振り払うのは当然だと、セティは思っている。もつともリドルフに議論を吹っつけたところで、勝てたことはないのだが。

セティが悠長にも不毛なことを考えているあいだも、状況はやはりというべきか、なに一つ変わっていないなかった。相変わらず、七、八人の白覆面の人間たちが前に出たセティとメイラを、半ば囲むような格好で立ちはだかっている。

「やれやれ」

セティは小さく零して、ちらりと後方を省みた。灌木を背にしたリドルフが、一つ頷いた。どうやら準備は終わったらしい。

「確かに、忠告はしたからな。不可抗力だ」

後半の言葉は、リドルフへの宣言だったかもしれない。セティの口元に不敵な笑みが閃いたのが、開戦の合図となった。

正面から白覆面が踊りかかる。メイラに一人、セティに二人だ。メイラが刃に独特な反りがある愛剣を抜く。金属と金属が触れる甲高い音が、澄んだ夜気に響いた。

弾かれたのは、彼女よりも一回り大きい中剣を持った、覆面の方だ。腕力は男の方が勝っているが、老女は正面から向かってきた力を逃すのが巧みだった。

男の動きが止まったのは、ほんの一瞬だったかもしれない。

しかし、彼女は一瞬の隙さえも見逃さず、がら空きになった男の腹部にめがけて孤剣を水平にないだ。

「婆さん、やるなあ」

一方のセティは、相手の剣先が自分の体に触れるか触れないかというところまで、柄に手をかけたままだった。

抜き打ち。早い。一人を切り上げ、もう一人が剣を振り下ろす前に切り下げる。メイラが剣を振るうのを、しっかりと視界のなかで確認しながらこの腕前である。セティが飛び退くのと同時に、二人は倒れた。

「余所見などするな。ここで小童に何かあつては、残りの道中殿下がお困りになる」

悪態のなかに紛れ込ませた気遣いに、セティは思わず破顔した。打ち込まれてきた刃をきれいに受け流し、舞いを舞うかのように優美にそのしなやかな体を反転させる。男が体勢を立て直すまえに、彼の珍しい片刃の剣は覆面の背中を袈裟に切り下げていた。

「おかしいな……」

口中で呟いて、セティが意識を違うところに向けたのは、一瞬の半分にも満たぬ時間であつたかもしれない。しかしその間に覆面の一人がメイラの危険極まりない弧剣と、セティの死の剣舞のあいだをすり抜けて、一目散に駆けていく。

メイラが三人目の返り血を浴びながら叫んだ。

「何をやってる!」

「リドがいるから、大丈夫さ」

怒鳴られたセティは悪びれたようすもなく、悠々と血に汚れた刃を懐から取り出した布で拭った。

「ハル殿。ここを動いてはなりませんよ」

穏やか、というよりはどこか神妙なリドルフの声に、ハルははたと気が付いた。セティとメイラの剣から奇跡的に逃れた白覆面が一人、こちらに向かつているではないか。

「私を、信じてくださいね」

リドルフの言葉は、ハルの耳を右から左へ抜けていった。

それは、現実感が褪せて、ひどく、ひどくゆっくりと、ハルの目に映っていた。

目前まで迫った男が、両手で構えた剣を振り上げる。白刃が青白い月の光を冷ややかに反射した。「殿下!」と、メイラの緊迫した声が遠くで響く。その時

「<sup>シュダイ</sup>発動」

となり座していたリドルフが静かに唱えた。

ザザツという、土を踏んだような音。ハルに向けて振り下ろされた

刃は、彼の華奢な体に届くことなく、鈍い音とともに見えない壁に阻まれた。

驚いたのは、なにもハルだけではない。予想だにしない事態に、白覆面は口と目を大きく開いて、硬直する。

「ガッ……」

不幸なことに彼は、自分の大手柄を阻止したものの正体も永遠に分からぬまま、絶命した。メイラが投げた短剣が寸分変わらず男の心臓を貫いていたのである。

「殿下！ お怪我はありませんか？」

駆け寄ってきたメイラに、ハルが強張ってうまく動かない頬を叱咤して笑ってみせる。

「リドルフ殿が守って下さいました」

メイラはハルのすぐ足下に描かれた、不思議な文様の数々を見やつて、わずかに眉をしかめた。リドルフはなにも言わずに苦笑するだけである。彼女の理解を得る日はまだまだ遠そうである。

「婆さん！ ハル！ ちょっと」

白覆面達の遺体の検分をしていたセテイが、手招きをしていた。

この期に及んでなお律義に「殿下を呼び捨てにするとは云々」と、呟きながらも「殿下」に怪我がないことを確認したメイラが踵を返す。自分のことを敬愛をこめて「婆さん」と呼ぶ、白い肌をした美しい青年のことをメイラはすでに悪くは思っていないかったのだ。

「土の壁……」

その背を見送りながらハルがぼつりと呟いた。リドルフが、空色の瞳をわずかに大きくしてハルの線の細い横顔を見る。

「あ、いや、私も行かなくては」

視線に気が付いたハルは、取り繕うように微笑んでメイラの後を追う。リドルフはその後ろ姿を、数秒見つめ、何かを確信したかのようにつつ頷いた。

「どうかしましたか？」

一人の遺体の周りを取り囲むように屈みこんだ三人のあいだには、

異様な空気が流れていて、最後に姿を現したリドルフの問いは、いささか間延びしたように聞こえたかもしれない。セティが困ったようにリドルフの顔を見上げて首を傾げた。どうやら、彼にも事態が呑み込めていないようだ。

背を、セティによって袈裟に切られたその男は、すでに絶命していた。ガイゼス特有の袖の短い衣の左肩のあたりに、布が重ねられて縫われているところがある。上の布が切れ、ほつれたその下に覗いていたのは、リドルフとセティには見覚えがない豪華な刺繍であった。

「これは、どういうものなのですか？」

緑の盾に金の王冠、盾のなかに勇壮な一匹の獅子が描かれた紋章。

リドルフの問いかけに、すぐに答えは返って来なかった。

ハルの顔はひどく強張り、薄桃色の唇はわなないている。

「これは」

彼が口を開いたのは、たっぷりと時間が経過してからだった。

「これは……王家の紋章です」

メイラが唇を噛み、眉間の皺を濃くする。

「私の従兄上、ラガシュのシノレ公の」

## 巡検使殿・2（後書き）

本日、自サイトを立ち上げました。

これからはそちらの更新を優先していくつもりです。

作者紹介ページからリンクしてありますので、ぜひ覗いてみてください。

血の臭いをのせた生温かい風が、さわりと頬を撫でていく。

ハルの短い黒髪が揺れ、月光を背に受けた四人の影が不気味に地面に伸びていた。

「と、いうことは　　ハルはガイゼスでかなり身分が高いということがあるか」

「…」

一瞬の間のあとに、一同の視線が一斉にセティに集まる。セティは馬鹿に神妙な顔つきだ。

「だってそうだろう？　従兄が王族なんだから」

この時のセティは一人だけ異邦人のようであった。同郷のリドルフがすぐ側にいたにも関わらず、である。それは時が止まってしまったのではないかと危惧するほどに長く、微妙な沈黙であった。

ややあって、メイラが呆れたように、というよりは不憫そうにセティを見つめる。それを皮切りに、続いて、リドルフがため息をついた。

「なんだよ。二人とも」

港町アイデンの風よりも、多分に湿気を含んだ彼らの視線を受けて、さすがのセティもたじろいだ。ばつが悪そうに美しい金色の髪に覆われた頭に手を置き、無造作にかきまわす。

「ふっ…」

ハルが、不意に笑った。

「殿下？」

メイラの気遣わしげな視線にも気がつかずに、ハルは口を手で覆って笑った。

彼の従者は驚いたような顔を、リドルフは穏やかな微笑を、セティは憮然とした顔を彼に向ける。つい先刻までの重苦しい空気が嘘のようだった。

「ラガシユのシノレ公の亡き父君は、私の父の兄君にあたります」  
ようやく笑いを納めて言ったハルの表現は、いささか回りくどいものとなった。

「と、いうことは？」

言いにくそうに視線を泳がせたハルの代わりに、メイラが胸をはって答えた。

「ハル・アレン殿下はガイゼス王国の第二王子にあらせられる」

「王子、さま…？」

狼狽したセテイが見上げると、リドルフは淡い苦笑を浮かべてまたため息をついた。

「メイラ様が、ハル殿のことを殿下とお呼びしていたでしょう」

リドルフの冷静な声は、セテイの驚きに拍車をかけることとなった。

「リドは、知っていた？」

「あるいは、そうでないかと思っていました。ただ、ハル殿が巡検使と名乗られたので」

「今の私は本当に、一介の巡検使にすぎません。王宮で過ごすのは、年に一月ほどのあいだけ、ほとんどはこうして国内を回っているのです」

「王子が…巡検使、か」

セテイの故国では、考えられないことだった。ナディールでは巡検使といえば閑職で、左遷の代名詞ともいわれる。その役目自体は全国の政情や民情の視察、災害の実態調査など立派なものだが、その実情は国中を放浪する根無し草である。それとも国によって価値観に大分隔たりがあるのだろうか。セテイはあとでリドルフにでも聞いてみよう、と思った。

「正直を申しますと、私自身が何よりも王族扱いにはなれておりません。なので、変にお気を遣わないでいただくとありがたいのですが」

「セテイは高貴な方への口の利きかたを知りません。こちらこそ、

「ご無礼を働くことをお許し下さい」

リドルフの返答に、ハルがいかにも嬉しそうに笑った。まだ幼さの残る顔だ。

「見当違いの疑念が解決されたところで、殿下。これはいかがいたしますか？」

メイラの言葉にハルは真顔に戻った。

「これが、ラガシユのシノレ公の紋章だということは、事実をこのまま捉えれば、ハル殿を狙っているのは、これから我々が向おうとしている、そのお人だということですか？」

リドルフの言葉はあくまでも慎重だった。

「そういうことになります。紋章を掲げているのは、各將軍麾下きかの正規軍であるという証なのです」

「紋章が偽物である可能性はありますか？」

ハルとメイラが力なく首を横に振った。

ガイゼスでは、個人や組織を特定する紋章の管理は国家機関で行われており、特に王家の紋章に関しては非常に取り扱いが厳しいのだと、ハルは事情を説明した。

確かに、白い衣に刺繍された金色の糸も赤の糸も、色鮮やかで重厚な雰囲気を受ける。万が一にでもこれが偽物だとしたら、かなり手間も金もかかっているだろう。

「私は、違うと思う」

一同の視線は再び、セテイに集まった。

「太刀筋がばらばらだったんだ。それに、技量にも差がありすぎる」  
セテイの発言は先刻とは異なり、鋭すぎるぐらいのものであった。そのため彼の言う意味を、即座に理解したのは同じく剣を遣い、襲撃者と刃を交えたメイラだけであった。

メイラは弾かれたようにセテイの涼しい顔を見て、次に主の顔を見た。

「殿下、小童の言うとおりでございます。今回の襲撃はシノレ公の兵によるものではありません」



ハルとリドルフがじつと老女の顔を見つめた。

「我が国、ガイゼスは殿下もご存知のとおり、武力で栄えた国です。そのため、正規軍はよく修練を積んだ者ばかりです」

「つまり？」

「師範の元で、剣を学びます。そうすると、もちろん太刀筋は似たようなものになります。そして、軍の中では技量に差があると綻びができ、そこに隙ができるのです。正規軍は同等の技量を備えたものだけで組織されます」

「ああ」

剣に疎い二人も、ようやくその意味を理解した。

「私が相手をしたのは三人。一人目と二人目は、それなりには遣えるようだったが、構え方が全く違った。そして、三人目は柄を握る手もおぼつかないほどだった」

セティはあのととき感じた違和感を忘れてはいなかった。正直すぎるくらいに真っ直ぐに打ち込まれてきた剣は、手応えがなさすぎたのである。あまりの拍子抜け具合に、それが原因で一人を取り逃がしたのだ。

「シノレ公は、三將軍きつての勇将です。それほどの方が指揮する兵が、あの程度であることは考えられません」

メイラは、セティのように太刀筋の違いや技量の差までは認識していなかった。それだけ、ハルを守るということに必死だったのだ。しかし、手ごたえのなさは、無意識のうちはどこかで感じていた。

「確かに、もしもシノレという方が、本当にハル殿の命を狙っているとしたら、正規軍など動かさないでしょうね。自分が犯人であると、宣言するようなものですから」

リドルフが言うことももつともであった。

「では一体、誰が私を。そして、この紋章は……」

ハルの眩きは闇に溶けた。得体の知れない悪意にからみつかれたようで、ハルは背中が薄ら寒くなり、自分の体を自分で抱いて視線を落とした。視線のさきでは、ほつれた上布からのぞく豪華な紋章

が、無遠慮にもその存在感を主張していた。

しかし、今、巡検使殿の問いに毅然と答えられる者は残念ながら誰一人存在しなかった。

「殿下、まずはやはりラガシユに向い、シノレ公とお会いになるのがよいかと」

メイラの提案は至極現実的で、建設的なものであった。与えられた情報が彼らにはまだ不十分すぎる。むろん、シノレ公の疑惑は完全に拭い去られたわけはなかったが、携行している糧食も水も残り僅かである。どちらにしても近場で調達しなければどこにも向えないのだ。

メイラの提案に意を唱えるものはいなかった。現実的にそうするしかないということは、誰もがよく分かっていたのである。

口数も少なく、一行は残りの行程を進んだ。

雲行きが怪しくなった彼らの道に、唯一光が差したことといえば、重傷を負い、生死の淵を彷徨っていたカイが、リドルフの背のうえではっきりと意識が覚醒し、一言、二言、三言ではあるが話してみせたとだろうか。

「ラガシユだ」

朝日を背に彼らの前にそびえたつのは、城塞都市、ラガシユの城壁であった。

## 巡検使殿・4

城塞都市、ラガシユ。

北はナデイル、東はアドリンドとの国境にほど近い場所に位置し、古くは大国ナデイルの南方拠点として繁栄し、十七年前の世紀の独立戦争時には、ガイゼスの攻守の要として両国の軍が激闘を繰り広げた。

現在ではガイゼス国内においてももつとも精強を誇る軍が逗留し、現王安キウスの甥であり、三將軍の一人であるシノレ・アンヴァーン公が治めている。

一行が城壁の門をくぐったとき目にしたのは、夜明けとともに活気づきはじめた城下町であった。

大通り沿いには小さな商店が軒を連ね、よく熟れた果実や新鮮な野菜、油漬や塩漬けに加工された魚などの食料品の他、ガイゼス人の日常着となる薄手の袖が短い衣、日光や砂埃から体を守るための外套など、実にさまざまなものが売られている。なかには簡単な食事を提供している店もあり、風に乗って流れてくる羊の肉を焼く香ばしい匂いが食欲をそそる。

女たちが談笑しながら、昼食や夕食の材料を買い求め、男たちが本格的な食事の前に屋台で軽く腹ごしらえをし、子供たちは広場を走り回る。

「いい町だな」

セテイは呟いて目を細めた。

多くの兵士が逗留し、戦時ともなれば最前線となる町だとは信じられない。

眼前に広がっていたのは、ひどくありふれていて、けれど平穏で幸せに満ちた日常だった。

「ラガシユは、ガイゼスにおいても極めて治安のよい町です。シノレ公は非凡な武人であるとともに、優れた領主でもあるのです」

同じように目を細めて、ハルもその光景を眺めた。

大通りを真っ直ぐに進み、城門まで来るとメイラがハル・アレン王子の来訪を門番に告げた。セティやハルと同年ほどと思われる若い門番は慌ただしく城内に消えていった。

ややあつて、彼とともに姿を現したのは壮年の男である。

「ハル殿下！これは、これはお久しゅうございます」

男は恭しく腰を屈めた。

「お元気そうで、何よりです。ランド殿」

来訪の意図を告げるよりも早く、彼らは慌ただしく城内に招き入れられた。むろん、巡検使殿の従者と、得体の知れぬ二人のナディール人も例外ではない。

客間に案内されるとすぐさま、冷たい蜂蜜水が運ばれてくる。

有難く蜂蜜水で喉を潤わせたハルは実に要領よく、手短かに事情を説明した。

「將軍は、公務で外出しております。日が沈むころには戻りますので、まずは旅の疲れをお癒しくくださいませ。湯殿と食事の支度をさせましょう」

これは、一行にとって大変ありがたい気遣いであった。

この五日間は砂埃にふきさらされつぱなしで、セティとメイラは夜半の戦闘で多少、返り血も浴びている。そのうえ、食事といえは干し肉と薄く焼いた固いパンだけである。当然、肉食主義のリドルフは水とパンしか口にしていない。

「お連れの方もご一緒に」という、いかにも有能そうなシノレ公の片腕の言葉に甘え、リドルフとセティも風呂に入り、砂と血の臭いを落とし、用意された衣に着替えた。

「ガイゼスの男子は、こういう格好をするのか…？」

金色の髪から水滴をしたたかせたセティが、用意された衣に袖を通しながら怪訝な面持ちでリドルフに尋ねる。

「さあ、どうでしょう。何分、文化が違う国ですからね」

答えながらリドルフは、脳裏にひらめいた懸念が杞憂に終わるこ

とを心から祈っていた。

客間に戻ると、先に風呂に入って衣を改めたハルが、クッションのきいた長いすに座って、ぼんやりと外を眺めていた。彼が着ているふちを金糸と緑糸で縁取られた衣は、嫌味なく上品なものだった。

「ハル、ガイゼスの男子はこういうものを纏うのか？」

「え？」

セテイの訝しげな声に、ハル・アレン王子がはっとして振り返った。

「足元が心もとない気がするんだが」

自分が着ているものと、ハルが着ているもの、さらにはリドルフが着ているものを見比べてセテイは首を傾げた。

裾が膝丈までの長さの胸元が広めに開いたつくりの衣からは、セテイの白すぎる肌が露出し、彼が動いたびにひらひらと裾がなびく。

ガイゼスでもっとも一般的な女人の衣は、おどろくほどセテイに似合っていた。

「あ……。はい、ええと……」

ハルは分かりやすく窮した。セテイより一步下がった位置のリドルフは苦笑を浮かべている。彼は恐らく察している。

「こういうものを着ることもありますが、それではセテイ殿は何かと不便でしょう。もう少し動きやすいものを用意してもらいましう」

この世のものとは思えぬほどに美しいこの青年は、何よりも女に見紛われることを嫌うのだと、ハルはリドルフから聞いて知っていた。いささか不自然であったかもしれないが、ハルとしてはこういう具合にしか危機を切り抜けられなかったのである。

セテイとリドルフの横をすり抜けて、慌てて部屋を出て行く華奢な王子の体から、かすかに甘く、典雅な香りがふわりと舞ってすぐに消えた。

身綺麗にした一行は、カイを除いて食堂に案内された。未だ体が十分とは言えぬ彼は水で湿らせた布で体を拭いたあと、リドルフが

煎じた薬湯を飲み、よく眠っている。

石造りの城内は、大分太陽が高くなってきたにも関わらず、涼しく、快適であった。

この五日間、炎天下の中でわずかにできた日陰に身を寄せ合って眠ってきた一行にとってはそれだけでも十分にありがたい。

「本来ならハル・アレン殿下にお出しできぬような、庶民の料理です。お口に合うとよいのですが」

ランドの言葉は謙遜としかとれぬ。彼の合図で運ばれてきた料理は急ごしらえで用意されたとは思えぬほど、見事であった。

焼いた羊肉の柘榴ソースかけ、トマトと野菜のシチュー、バターライス、オイル漬けの魚に香草をまぶして焼いたもの、もっちりとしたパン。薔薇水、チーズ、熟した果実。そして、よく冷やされた麦酒<sup>フラガ</sup>。

「どうぞ、ごゆるりと」

ランドと侍女が下がったのを視界の隅で確認して、ハルを制して毒味をしようとしたメイラを、さらにリドルフが制した。

「私の体は毒に慣れていきます。多少ならば口に入っても問題ありませんし、何かが混じっていればすぐに分かります」

毒味ならば任せろ、とリドルフは言っているのだ。しかし、メイラはそれを肯じられなかった。

「私たちは傭兵です。いくらでも替わりがいます。けれど、ハル・アレン王子の信頼のおける従者殿はメイラ様しかいません。違いますか？」

この青年の言うことは、どうしてこうも簡単に人の心をほぐすのだろうか。まるで、そこを突けば崩れるというのが分かっているように、静かに心地よい声音でそれを言うのだ。

メイラの良くも悪くも頑なな性格をよく知るハルは、彼女が黙したまま手にした匙を置いたのを、半ば感嘆して見ていた。

リドルフは全ての料理を少量ずつ口に入れ、慎重にそれを吟味した。そして、三人に向かって頷いてみせる。

「問題ありません」

その言葉におおいに喜んだのはセテイであった。異国の料理の数々を皿に取り分けて、口に運ぶ。彼のすらりと均整の取れた細身の体からは想像もできないような量が、飲み込まれていった。しかしその動作は粗野というのには無縁で、どこか品があるのが妙だ。

「食欲がないのですか？」

対照的に、一向に食の進まぬ華奢な巡検使に、リドルフは小皿に取り分けた料理を置いてやる。

「いいえ。そんなことはないのですが……」

律義に謝辞を述べて皿を受け取ったハルは力なく笑った。

「ただ、シノレ公の城でさえ料理の毒味をせねばならないということが、哀しいのです」

このときリドルフは、ハル・アレンという人物の一端に触れた気がした。華奢なのはきつと姿形だけではない。それがガイゼスの王子という立場にある彼にとって、善いか悪いかは別として。

「しっかりと食べないと、いざというときに動けませんよ」

優しいリドルフの言葉に背中を押されるようにして、ハルはぎこちなく笑って料理を口に入れた。

食事を終え、さしあたっては焦眉の急もないと悟ると、満腹の彼らの体が欲したのは睡眠である。

この五日間、硬い地面に外套を敷き炎天下のなか交代で短時間の睡眠を取ってきた彼らにとって、いかにも清潔そうな客間の寝台は天国に等しい。

見張りに立つと言って聞かない老女と、彼女の主である巡検使殿を奥の間の寝台に追いやり、セティとリドルフは二間続きの広い客室の、入り口側の部屋のソファにその身を落ち着けた。奥の部屋からはほどなくして、規則的な寝息が響きはじめた。

暑さに弱いはずのナディール人の二人組みは、連日の炎天下での野宿にも大して疲れもせず、それどころか、入浴と満足な食事ですっかり体力を回復していたのである。

「リドは、ハルがガイゼスの王子だって分かっていたんだな」

セティはいささか不満気な顔だった。姿勢よくソファに腰掛けたリドルフが困ったように小さく頷く。

「初めから分かっていたわけではありませんよ。途中から、予想が確信に変わったというだけのことです」

「どうして止めなかつたんだ？」

「止める機会を逸したのです」

リドルフの口調はいつもと変わらなかつた。

「でも、これ以上の深入りは止めた方がいいでしょう。今ならまだ大丈夫です」

「ハルを、見捨てるっていうのか？」

非難するようなセティの眼差しを、リドルフはやんわりと受け止めた。

「そうは言っていないですよ。ただ、私たちが側にいることで、問題が余計に大きくなる可能性があるという意味です」



「問題が、余計に大きくなる可能性？」  
リドルフは頷く。

「あなたはハル殿が命を狙われる理由は何だと思えますか？」  
セティは形の良い口を尖らせて、眉間にしわを寄せる。  
命を狙われる理由など、怨恨、妬み…そのぐらいしかセティには  
浮かばない。しかし、それをハルに当てはめてみると、しっくりこ  
ないのが正直な感想だ。

困惑するセティのようすを眺めて、リドルフは付け加えた。

「ハル殿がガイゼスの王子であるという事実を踏まえて」

セティの脳裏にすぐさま閃くものがあつた。

「……政争」

「国王が体調を崩されている今、ガイゼスの内情は安定していると  
は言えません。詳しいことは分かりませんが、ハル殿は何らかの権  
力抗争に巻き込まれている可能性が高いのだと思います」

セティは頬杖をついて、眉根を寄せた。

「加えてハル殿は王子という立場にありながら、巡検使という役に  
就いています。背景にはなにか複雑な事情があることも十分に考え  
られます」

それは、セティも疑問に思った点であつた。しかもリドルフの口  
ぶりだと、どうやらガイゼスにおいても巡検使という職はさほどナ  
ディールと概念は変わらないようだ。

「そこに、あなたが関わっていると分かったら、ナディールの人間  
は穏やかではいられないでしょう」

「私はナディールの政には関係ない」

セティはむっとして言い捨てた。  
「直接は関係なくとも、与える影響力は強いのです。分かっている  
でしょう？」

白い頬がみるみるうちに紅く染まり、セティは金色の髪を揺らし  
て勢いよく立ち上がった。

「強いのは、影響力じゃない。利用価値だ！」

リドルフは何も言わずに左手の人差し指を、唇の前に立てた。その仕草にセテイもはっとして、奥の間を見遣る。穏やかな二種類の寝息は、変わらずに続いていった。

「私は、セテイ・コヴェだ」

「知っていますよ」

空色の瞳はいつもにもまして優しい。

「自分の道は、自分で拓くと決めたんだ」

複雑な色彩の瞳は、直視するのもはばかられるほどにきらめき、結ばれた口には頑強な意思がよく表れていた。

「私が共にいることで、問題が大きくなるのなら、問題そのものを切り捨ててやる」

リドルフが眩しそうに眼を細めて、諦めたように笑った。

「私の主はあなたです。主が選んだ道を、私も進むだけです」

セテイはふいと横を向いて、元のように椅子に座った。

それからセテイはリドルフには一言も口を利かずに、部屋に運ばれていたファーガ（麦酒）をしこたま飲み、そのまま長椅子に寝そべって寝息を立てはじめた。

白い頬をほんのりと紅く染めて、すっかり寝入ってしまったセテイの髪を撫でて、リドルフは思わず目を細める。

セテイは、元からあまり酒に強い体質ではない。

確か、はじめて口にしたときは気分が悪くなり、ひどく嘔吐していた。それでも酒が与えてくれる、朦朧とした時間が好きで口にするのだろう。

まるで幼子をあやすように髪を撫でてやると、セテイは眠ったまま、にこと笑い、彼の体に対してはいささか小さい長椅子のうえで、器用に寝返りを打つ。

どれほど悪態をついても、我儘を言<sup>わがまま</sup>つてもいい。こうやって、いつも、安穩な顔で眠ってくれるならば。リドルフは、心からそう思うのだ。

寝息の三重奏を聴きながら、リドルフは窓の外へと視線を動かす

た。

乾燥した大地に、灼熱の太陽。故郷からは遠く離れた、場所。雪というものがどんな感触だったのか、もう忘れてしまったような気がする。

「とうとう、こんなところまで来てしまいましたね」

それは悲嘆でも歓喜でもなかった。ただ事実を口にしただけだった。

リドルフの瞳は、それと同じ色の空を映していた。

陽が沈み、夜の帳がすっかり降りてもシノレはまだ戻らなかった。ランドの勧めで先に夕食を済ませ、ナデイル人の二人組は城主の帰りを待たず、あてがわれた寝室で休むこととなった。一方のハルとメイラは、シノレ・アンヴァーン公の帰りをただひたすらに待ち続けた。昼間に十分な休養は取っていたし、ハルはこのまま眠れるような気分でもなかったのだ。

戸を叩く音に気がついて、ハルは読んでいた書から顔を上げた。視線を交わし、メイラが立ち上がって薄く戸を開ける。

「シノレ將軍…！」

堂々たる体躯、束ねられた漆黒の髪と褐色の肌。ガイゼスきつての勇将に相応しく、その威風堂々とした姿はシノレ・アンヴァーンに違いない。

「壮健そうだな、メイラ」

將軍自らのおとないに驚く王子の従者に、まるで親しい友人に向けるように言って笑う。

切れ長の瞳は眼光が鋭く、一見人を圧するようにも思われるが、そうすると信じられないほどに優しい顔になる。こんなところが、国民に人気があるゆえんの一つなのだろう。

「ハル・アレン公。ずいぶんとお待たせさせてしまい、申し訳ない」「いいえ、とんでもありません。私の方が、突然尋ねたのですから」

ハルは背の高い従兄の彫りの深い顔を見上げた。

「ランドから、およそのことは聞きました。急いだのだが、ずいぶん遅くなってしまっ」

その言葉は紛れもない真実であったろう。恐らくシノレは城に戻り、すぐさまその足でハルの待つ客間を訪れたのだ。その証拠に彼は剣を佩き、外套を羽織ったままだった。

「すぐにでも詳しい話を伺いたい」

用意して私室で待つと言った従兄の広い背中を見送って、ハルは小さく一つため息をついた。

ハルとシノレの会談に、さすがのメイラも「同席する」とは言い出せなかったが、彼女の複雑な心境はそのままよく表情に表れていた。

「ハル殿下……」

「行ってくるよ」

何とも形容しがたい心境は、ハルも同じであった。

十以上も年の離れた従兄は、王宮にいる誰よりもハルを可愛がり、気にかけてくれる。そんな人と、二人で話しをするというのに、懐に短剣をしのばせるかどうか一瞬迷う自分がいた。

「大丈夫。きつと、大丈夫だよ」

まるで自分に言い聞かせるかのように言って、ハルは部屋を出た。侍従に案内されて闇に沈んだ城内を歩く。男の持つランプだけが、ハルの足元を頼りなく照らしていた。

シノレの私室に辿りつくまでのあいだ、ハルはなにも考えられなかった。と、いうよりはどこかに考えたところでどうしようもない、という思いがある。

いつも、いつもそうだった。考えても選んでも、自分の意思とは無関係にことが起きるときは起きるし、それに抗うのは難しい。

なにか大きな流れのようなものがあり、自分はただそれに流されていくことしかできない気がする。それは、達観といえるほど崇高なものとはほど遠く、諦めというものに近いのかもしれない。

案内されたシノレの私室は城主の部屋とは思えぬほど、ひどく簡素なものだった。

卓やと長いす、奥には寝台。調度品に客間にあるような豪華なものは何一つない。それが彼の清廉な人格をよく表しているようだった。

平服に着替えたシノレはハルに長いすにかけるように勧めた。

「ハル殿がラガシユにおいでになるのは、いつぶりだろうか？」

「確か、前にお会いしたのは半年ほど前だと思います」

「もうそんなに経っただろうか？」

シノレは切れ長の瞳を大きくして、葡萄酒シャルルを注いだ杯をハルに手渡した。ハルはそれを受け取りながら答えた。

「ラガシユは豊かで、平和で、人々は皆満足して暮らしております。巡検使が視察に来る必要などないではありませんか？」

「それは、どうか」と笑って、シノレは葡萄酒を飲んだ。

ごく短い世間話を交わしたあと、ハルは改めて事情を説明した。ただし、このラガシユに着く直前にシノレの紋章をつけた人間に襲撃された、という事実を伏せて。

シノレはただ黙って真剣な顔でハル・アレン王子の話聞いた。

「通り、従弟の話聞いた彼が口にしたのは、一見関係なさそうな一言であった。」

「最近トウルファの叔父上にはお会いになられたか？」

唐突な問いを怪訝に思いながらも、ハルは律儀に答えた。

「トウルファは国境から王都に戻る途中に寄るつもりでした。なので、久しくお会いしていません」

ラガシユが軍事拠点であるならば、トウルファは商業拠点である。ガイゼスの一大貿易都市であるトウルファは、現王アンキウスの実弟、ロガンが治めている。他国との物流を一手に引き受けるその町は、ガイゼスの商業の生命線と言っても過言ではない。港に並ぶ帆船の姿は壮観で、見るものは必ずと言っていいほど圧倒される。

「私は今、トウルファから戻ってきた」

「従兄上が…トウルファ、ですか？」

ラガシユからはかなり遠い町である。城主であり、軍を束ねる立場にある三將軍の一人であるシノレ自らが行くのは、非常に珍しい。公務ではあらぬ。叔父上に内々に話したいことがあると呼ばれて、行ったのだ」

「内々に……？」

シノレは葡萄酒をまた一口飲んで、ハルの問いには答えずにいさ

さか不自然な話題転換をした。剛毅と形容されるこの英傑には相応しくない歯切れの悪さである。

「ウルグリードと連絡は取っておられるのか？」

「多くの部下を失いましたので、いつものようには…。今回の件に関しては非常事態ですので国境から使者は出しましたが」

「しばらく連絡は控えたほうがよいかもしれぬ」

俯いていたハルは、弾かれたように顔を上げた。シノレの漆黒の瞳がひどく真摯に向けられている。

「今、なんとおっしゃったのですか？」

「連絡は控えた方がいいと。そう言ったのです」

「どういう意味ですか？」

巡検使の役目は各地を視察し、その報告を国都に送ることだ。それではまるで仕事にならない。

「端的にお伝えしよう」

何かを決めたかのように、シノレが手に持っていた杯を置き、一息を吸った。

「ハル殿のお命を狙っておいでなのは、王太子殿下だ」

「王太子…殿下」

ハルには従兄が一息で言ったことばの意味がよく理解できなかった。

「ハル殿の、兄君だ」

「兄君…」

口中で何度か繰り返して、ようやくハルはシノレの言った言葉の重大さを認識した。

それに気がついたとき、危うく声を上げそうになって、両手で口を覆う。血の気の引いた、線の細い端正な顔をやや心配げに見遣って、シノレは話しはじめた。

「叔父上の話というのは、どうも、国王陛下のご病状が芳しくないらしい。というふうなものだった」

病床にあるガイゼス王国の現王、アンキウスは未だ壮年と呼ばれる年齢である。体調不良と称して国王が公の場に姿を現す回数が減ったのは、二月ほど前のことになる。

王の病状の詳細は国家機密とされ、それを知るのはごく一部の限られたものだけである。その中にはハルやシノレなど王家の一族ですら入っていない。

国民の強い支持を受け、臣下からの信頼も篤いアンキウス王の病状が懸念されるのは当然であるが、王の容態に関し、周囲がこれほどまでに神経質になるのは他にも理由がある。

「国王陛下おつきの医師のなかには、亡命してきたナディールもいて、全知全能の神オリスの崇りではないか、などと言っているらしいが……」

ガイゼス王国は以前にも、有能な指導者の早世という悲劇に見舞われている。

イミシュ・アンヴァーン。ガイゼス王国初代国王で四十二歳の若さで早世した、シノレの父にあたる人物である。

ナディールの人種差別主義、不条理な特権階級制度に反感を募らせた下層階級の人々が決起したのは、今から三十年ほど前のことになる。

決起といえども、カモ武器もない人々の集まりである。町の役所に火を付けて一晩暴れただけで、それはいとも容易く鎮圧された。しかし、その一つの小さな反乱は、まるでナディール全土に鬱積していた不満に火をつけるかのようにしてたちまち燃え広がった。

鍬くわや鋤すきを取り暴れまわる男たちは、火の神アテンの神官たちに「法」の炎でその身を焼かれ、国都ハプラティシュになだれ込む人間たちは、



目に見えぬ壁に弾かれた。人知を超えた力を行使するナディール軍は決して数は多くないが、「法力」を持たぬ人間が立ち向かうにはあまりにも強大であった。

「白人どもに法力があるのなら、我らにあるのはこの腕である」

南方の小勢力の頭領であったイミシユ・アンヴァーンはそう高らかに宣言し、剣技に磨きをかけてそれを人に伝え、器用な手先を活かして武器の改良にいそしんだ。筋力に恵まれていながら、繊細な作業に向く彼らのそれは、法を自在に操る白色人種にはないものであったのだ。

赤褐色系の肌と、濃色の髪と瞳を持つ人々の大半にとっては、不気味で恐ろしい「法」を使うナディールの白色人種たちに対し、イミシユは自らが手を加えた武器と練りに練った策略で向った。

ナディール暦二二五年。イミシユが率いる軍勢と、国王軍の精銳が衝突。イミシユの大剣が火の神の神官長アテンの首を跳ね飛ばしたとき、国王は戦慄し、反乱勢力には希望の光が差し込んだ。じつに反乱軍初の勝利であった。

武勇と指導力とに優れたイミシユは私利私欲がなく、公正で理想主義者だった。

先の戦い以来、彼の下には多くの人が集まるようになり、反乱軍は彼の下で統制されていった。

イミシユは理想主義者であったが、戦においては至極現実的な考えの持ち主で周囲の人間たちの意見をよく聞き、自ら剣を取り、馬を駆り、いかなる時も先頭で闘った。

身に着けていた甲冑が目の醒めるような青であったことから、敵である国王軍からは畏敬の念を込めて、味方からは親愛を込めて彼はいっしょに「青い英雄」と呼ばれるようになった。

以来、十五年。

イミシユは漠然とした不満の噴出に、「独立」という明確な方向性をつけ、ついにガイゼス王国を建国。翌年、ナディール風と言えば、神すらも眉を顰める凄惨な大戦に突入していくこととなった。

ガイゼス国民は女子供も剣を取り、弓を持ち、全国民が総力を挙げて闘った。先頭に立つ国王イミシユをはじめ、優れた将であるアンキウスら王弟たちにも鼓舞され、「独立」という強い信念に支えられていた彼らは、十倍以上の敵に怯懦きょうたすることもなく実に果敢に戦った。

ナデイル暦二二七年。ナデイルの下層階級の集まりであった烏合の衆は、激闘の末大国ナデイルと対等の停戦条約を結ぶこととなり、ついにガイゼス王国の独立が国際的にも認められることとなったのである。

およそ一年間の激闘、通称「ヤルカドの会戦」とそののち締結された事実上ガイゼスの独立を認める条約は、ナデイル国内だけではなく近隣諸国にも大きな衝撃を与えた。人知を超越した強い法力をもつて他を圧倒するナデイル軍が、なんの法力も持たぬ人間どもに事実上破れたのである。

しかし、幸運は長く続かなかつた。

条約締結からわずか五年後、イミシユは原因不明の病に冒された。国中から評判の医師たちがあつめられたが全く治療の目処は立たない。国のただ一つの支柱が突然倒れたことに、臣下のみならず全国民が恐慌し、国内は半ばパニック状態になった。独立からまもなく、未だ壮年と形容するのも早い年齢であった国王の後継者は正式に決まっていなかったのである。

高熱に喘ぎながらもなんとかイミシユは、自分が死んだ後は、息子のシノレではなく弟アンキウスに後を継ぐように言った。国の将来を憂いた国王は未だ若い王子が即位し、国が分裂、または混乱することを恐れたのである。

臨終間際の兄王の言葉に神妙に頷いた、王弟アンキウスの姿に安心したかのように、治療のいかなくイミシユは病床についてからわずか五日でこの世を去ることとなった。

青い英雄王イミシユ・アンヴァーン、四十二歳の若さであった。遺言どおりイミシユに替わり、王位についたのは弟アンキウスで

ある。

青い英雄王の突然の崩御に国中に衝撃が走り、人々は悲嘆にくれていた。イミシュという男は、ガイゼス国民すべての心の大きな支えであったのだ。

アンキウスは即位以来、それまで戦乱続きで疲弊した国民と国を立て直し、充実させるために、外征に出ることはせず、ただひたすら内政に力を注いだ。

まず全国から有能な人材を発掘し、ひとりひとりと話してじっくりとその資質と人柄と見極めて有望な人材には、権限を持たせて仕事をさせ、権力の分散を図った。次には規制を緩和させて商業を活性化させ、他国との貿易も盛んに行った。その成果はめまぐるしく、ガイゼスはごく短い期間で大陸でも有数の富国に成長した。

イミシュの功績は軍事的なものが大半であるが、兄王が健在のときから陰ながらそれを支えていたアンキウスの政治的手腕は即位以降いかなく発揮されることとなり、アンキウスはいつしか「微笑みの賢王」と呼ばれるようになっていたのである……。

アンキウス王の病状が芳しくないということが国にとって大変な懸念であることは、ハルにもよく分かる。しかし、それと兄が自分の命を狙う関連が、彼には全く分からなかった。

「近頃、王都では噂が流れているらしいのだ」

ハルはじつとシノレを見つめた。

「アンキウス王の次は、王太子殿下ではなく、ハル・アレン王子ではないかという」

「なにを…馬鹿なっ！」

ハルはあまりの驚愕のため、今度こそ声を上げてしまう。

「国王陛下はご健在です。それに、私は、王位継承権を持たぬ身です。なぜ、そのようなことが」

大国と称されながら、ガイゼス王国は未だ歴史の浅い国である。その分、主軸が失われたときの衝撃は他国とは比べものにならぬほど大きい。さらに、イミシュのときは正式の後継者が立てられていなかったこともあり、混乱は大きかった。その教訓を踏まえて、アンキウスは権力を分散化させるとともに、長子フェウス・アレンが十五歳になったとき王太子立式を行い、国内外に向けて跡継ぎを明確にしている。

「ハル殿に王位継承権がないというのは、周知の事実だ」

王位継承順位はフェウス・アレン王子以下、十二位まで正式に定められ公表されているが、そのなかに第二王子であるハル・アレンの名はない。

「でしたら、なぜそのような」

「しかし、ハル殿が民によく慕われているというのも、また事実なのだ」

ハル・アレン王子は、幼少のころから体が弱く病気がちで、本人が公言しているとおり、小剣すら満足に扱えぬ。ガイゼスの男子と

して最高の褒め言葉である「勇猛」というのにはかけ離れているが、柔らかな物腰と王族でありながら奢ったところが全くなく、誰に対しても分け隔てなく優しく、穏やかな人柄であるというのが第二王子の評判であった。

一方、ハルよりも三歳年長の王太子、フェウス・アレン王子は父王に似て筋骨逞しく、剣と槍の扱いが巧みで、その技量は三將軍に勝るとも劣らぬという。また、書見や詩を読むのも好み、王者の風格を備えた文武両道の堂々たる王太子である。ただし、若さゆえか少々気性の激しいところがある。というのが評判であった。

「そんな……」

薄紅色のハルの唇が震える。

「私はなんの責任も負っていないからこそ、そういわれるのです」「シノレは口許を僅かにほころばせた。こういうところが人に好かれるのだということに、この王子は自分で気づいていないのだ。」

「国王陛下がご壮健であらせられるときには、さほどお気になされていなかった『王太子』というお立場が、急に真実味を帯びて思えてきたのだろう。そこにハル殿を推す人間たちが王宮にもいるらしいことを知って、疑心暗鬼になられたのだと思う」

「王宮にも？」

「叔父上の話だと、そういうことらしい」

従弟の顔色はひどく悪い。彼が巡検使などという過酷な役に就くときに、真っ先に反対したのは他ならぬシノレである。このいかにも優しい王子は、王宮の奥で過ごすことが大半で、季節の変わり目には必ずと言ってよいほど床についていた。

「ハル殿、ご気分が優れぬように見えるが」

「いいえ。大丈夫、です」

ハルは震える唇をかみ締めて答えた。切れた下唇から血が滲む。シノレはふっと顔を緩めると手を伸ばし、華奢な逆三角形の王子の顎に手をかけて、指先で唇に滲んだ血を拭ってやる。

「今日はもう休まれよ。ご無理をされると、体に差し支える」

「でも！」

立ち上がったハルの小柄な体が、柔らかいものでも踏んだかのようにはぐらりと傾いた。シノレが素早く細い腕を掴んで支える。

「すぐに公の従者殿をお呼びしよう」

「でも……」

言いかけたハルの言葉には先ほどよりも力がなかった。なんとか自分の力で体を支えようとしているが、それはひどく頼りなく、シノレが手を離せばすぐに崩れてしまいそうだ。

「ご無理をなさるな。ハル殿のお体のことは、私もよく存じている」シノレは優しい声で囁いて、軽々と抱き上げて長いすに従弟を横たえた。

ハルは、それ以上は抵抗せずに遠ざかっていく従兄の足音をまるで現実のものではないように思いながら、ぼんやりと聞いていた。

体がなにかひどく冷たいもの侵食されていくような気がする。それは非常に不快な感覚で好まざるものであるのに、それを拒絶する術を知らない。

また、流れているのだ。

ハルはそう思った。

自分を取り囲むものがゆるゆると流れはじめている。それはもしかしたら激しい流れになるのかもしれない。その行く先になにがあるのかも分からない。

体が侵食されていく。芯まで冷えていく。いつだったか、前にもこんなことがあった。あれは、いつのことだっただろう。

そこまで思い出しかけて、ハルは考えるのを止めた。

考えるのは無意味なのだ。流されはじめたら、それに従うしかない。自分の力ではどうにもならない。抗えない。ただ、流れていくしかない。

瞑った目蓋の裏によぎる、美しい金色の髪の女の姿。あれは、何だっただろう。

両手で耳を塞いで、頭を振る。

何も思い出したくない。考えたくなかった。

遠くで何種類かの足音が聞こえた。よく聞こえない。まるで水のなかに潜ったようだった。

そこで、ハルの意識は途切れた。

殿下が倒れた。

メイラが慌てふためいて部屋に飛び込んできたのは、明け方近くだった。

ドアが開く前から気配を察知したセティは、眠ったふりをしたまま枕下に忍ばせていた短剣に手を伸ばし、一方のリドルフは彼の指さどおり寝台のうえでじっとしていた。

「なんだ、婆さんか」

部屋に飛び込んできたのがメイラだと分かり、跳ね起きたセティは短剣を持ったまま拍子抜けした。

ろくに事情も説明せずに、半ば引きずるようにしてリドルフを連れて行くその後ろ姿を見ていたら、自然とセティの口許はほころんでいた。

おそらく城には医師も常駐しているだろう。たぶん、ガイゼス人の。

それでもメイラはリドルフを呼びにきた。それが、セティにはなんとなく嬉しかったのだ。

メイラに先導されてリドルフがシノレの私室にたどり着いたとき、ハルは蒼白な顔で質素な長いすに横たえられていた。すっかり意識はないようで、シノレが心配げに傍らに膝をつき様子を見ている。

王子の従者に連れられてやってきた、足元まである麻のローブ姿の青年を見て、何か言いかけたシノレにリドルフは恭しく跪いて、しかし、はっきりと言いつつ切った。

「今はどうぞお忘れ下さい。確かに私は法も使いますが、医術にも多少の心得がございます」

シノレは思わず苦笑した。とはいってもそれは決して苦味の強いものではない。言葉を交わさぬとも、それだけで、この青年の人となりが推察できてしまったからだ。



シノレは黙って立ち上がり、場所を青年僧のために開けた。リドルフはそれに少し頭を下げて跪き、ハルの顔を覗き込んだ。

「ハル殿…ハル殿…」

優しく頬に手を添えて名を呼ぶが、反応はない。力を失った細い腕がだらんと垂れる。

「殿下」

頭の側から顔を覗き込んだメイラは絶句した。ガイゼス人であるハルは赤褐色の肌を持つ人種であるが、病弱なせいなのかメイラやシノレに比べると肌の色が薄い。すっかり血の気の引いた顔と、色を失った唇は見ているだけで痛々しい。

リドルフは脈を測ろうとしてハルの手首をとり、僅かに眉を顰めた。

はたから見ても、十分にハルの腕は細い。しかし、実際に触れるとそれは、はっとするほどに華奢だったのだ。

「ここではなく、部屋の方に」

ハルが身に着けている衣を緩めようと手をかけたリドルフに、メイラが慌てて部屋に運ぶように言う。

「ここを使って構わない。私が部屋を出よう。もうじき、夜も明けらる」

二人に有無を言わずに素早く部屋から出ていくシノレに、メイラは深く頭を垂れた。

「前にもこういうことがありましたか？」

「殿下は、お体があまり丈夫ではない。倒れられるのはそう珍しいことではない」

空色の瞳に、わずかに哀れむ（あわ）ような色を浮かべて、リドルフは診察を続ける。

その様子を呑んでメイラが見つめる。

「心配いりませんよ」

ごく短い診察の後、リドルフはメイラに向って微笑した。

「疲れと心労が重なったのでしょうか。ゆっくり休めばすぐによくな

ります」

安堵したメイラは、ハルを客間の寝台に運ぶようにリドルフに言った。

大事がないと分かった以上、いつまでも城主の私室に滞在しているわけもいかぬ。

シノレは使ってもかまわないと言ってくれたが、ハル・アレン王子の性格からいって、ここでは王子の気が休まるとは思えなかったのだ。彼の性質をよく知るメイラらしい気遣いである。

すっかり脱力したままの小さい王子の体を毛布でくるみ、リドルフは壊れものでも扱つかのように抱きあげた。なるべく振動が伝わらないようにゆっくりと歩を進めながら、リドルフは前を歩く老女の名を静かに呼んだ。

「メイラさま」

「なんだ？」

廊下の明かり取りからは、白みはじめた空が覗いていた。

「ハル殿はどうして、王子殿下なのですか？」

メイラが足を止めて振りかえる。それは、まるで幽霊でも見るかのような顔つきだった。

「……」

リドルフは腕に抱えたハルの青白い顔を、慈しむような優しい顔で見ている。

「そういう星の下にお生まれになったのだ。私にはどうにもして差し上げられぬ」

言い捨てて元のように前を向いて歩きはじめたメイラの背に向って、リドルフは悲しげに微笑んで小さく頷いた。メイラの皺だらけの手は、固く握られていた。

あてがわれた客室に戻り、ほどなくして意識を取り戻したハルに、リドルフは何種類かの薬草を合わせたものを飲ませた。

「もう少しお休みください」

夢とうつつを彷徨っているようなようすのハルは、心地よいテノールの響きに誘われるようにしてそのまま眠りに落ちていく。完全に夜は明けようとしていた。

部屋を訪ねてきたランドにハルの容態が落ち着いたことを告げると、一行は朝餉に招待された。昨日晚餐に同席できなかったシノレの客人への心遣いだという。

ハルの傍らから離れようとしめないメイラの代わりに、セティとリドルフの異国人二人組みが身支度を整えて、食堂に向かう。

「やあ、これは美しいな」

部屋に入るとすぐさま、大きな卓の向こうから、美丈夫がセティに向って人懐こい笑顔を投げかけた。紺青に控えめに金糸で刺繍が入った、ゆったりとした衣を着て、肩甲骨を覆うほどの漆黒の髪はきつちりと一つに束ねられている。

「従弟がお世話になった。私はシノレ・アンヴァーンだ」

立ち上がったシノレに、セティは慌てて膝を折った。

「セティ・コヴェと申します」

シノレが目を見張る。

「や、これは……。もしかして、きみは、男なのか？」

率直すぎる問いに、宝玉のような瞳を数度瞬かせ、セティの微笑が凍りつく。逆に慌てたのは、リドルフである。名高い三將軍の一人に、つかみ掛かったりしては洒落にならない。

流れはじめた不穏な空気を打ち破ったのは、他でもないシノレの豪快な笑い声である。

「これは、失礼。勿体ないとは思いますが、安心したよ。きみのような美貌を持った女子がいては、災厄の種になりかねない」

ばんばんと、二度セティの肩を叩き、シノレはまた笑う。毒気を抜かれたのか、ややあつてからセティもつられたように笑った。

「先程は失礼いたしました。リドルフ・クライン・アナリと申します」

「アナリ神というと、大地の神だったかな」

「お詳しいのですね」

「幼い頃、大怪我をして、ナディール人の女神官に傷を治療してもらったことがある。そのせいか、私は、法術にたいしてあまり偏見がない方なんだ」

さらりと言ったシノレの言葉に、珍しくリドルフは驚きを隠し切れなかった。ガイゼスの要職に就いている人間の口から、こんな言葉を聞くとは思ってもみなかったのだ。

咄嗟に返答できずにいるリドルフに追い打ちをかけるかのように、シノレは親しげに彼の肩を一つ叩いて「まあ、こんなところに赴任しているから、大きな声では言えないがね」と、小声で悪戯っ子的ように笑って付け加えた。

身振りで二人に座るように指示して、シノレは自らも席につく。それを合図に、用意された料理が運ばれはじめた。

ずらりと卓に並べられた料理の数々は朝食にしては、手がかけられすぎています。特に目立つのは野菜や木の実を使った料理と、豊富な果物である。この辺りの人間は羊や牛などの肉料理をよく食べるから、これは菜食主義であるリドルフへの心づかいであろう。

「ハル殿のご様子はどうだ？」

薄く焼いたパンに、羊の肉のソーセージを乗せながら、シノレがリドルフに問う。

「こここのところの疲れと心労が重なったのだと思います。大事はございません」

「むかしから、体があまり良くないのだ。食が細いから、体も細い」シノレは言葉をきって、ひき肉がけバターライスをせつせと口に運んでいるセテイを見て目を細めた。幻かと思紛うほどに美しい青年は、惚れ惚れするほど実に美味しそうに食事をする。

ナディールの首都、ハプラティシュからもナディール人の商人などはよくこのラガシュにも訪れるが、大抵は暑さにやられて食欲を落とし、運のないものなどは命に関わるような大病を患うこともある。そのぐらい、この辺りから南の地域の気候は、北国の人間にとっては辛いものだが、この若い二人組みには無縁の話のようだ。「あの子に、セテイ殿の半分でも活力があればいいのだが、そうもいかぬ」

シノレの口調はまるで弟を案じる兄のようなものになっていた。

「だから私は巡検使など止したほうがいいと言ったのに」

「ハル様は自ら巡検使を志願なされたのですか？」

リドルフは手にしていた杯を置き、シノレに問う。

「どうやら、王宮での暮らしには興味がないようなのだ」

肩をすくめ、やや婉曲的にシノレはリドルフの問いを肯定してみせる。

「あいにくと私も王宮暮らしには興味がないが、ハル殿のような方には静かな暮らしがよく似合うように思えるのだがね」

リドルフは柔らかい微笑をたたえたまま、シノレの後ろの壁にかかけられている、紋章に視線を動かしてすぐに戻す。

シノレの漆黒の瞳にこめられた感情と、言葉のうらにある彼の意図を読み取るうとしたが、リドルフにはそれができなかつた。相手が一枚上手なのか、それとも穿ち（うが）すぎなのか、今の段階ではそれすらも分からない。

それから、シノレはハルのことは話題にしなかつた。

話題にのぼるのはたわいないことばかりで、リドルフとセティの故国のことや、この辺りの気候のこと。そして、セティの美しさなどだ。

若い將軍は異国の話を聞きながら、まるで少年のようにいちいち驚いたり、目を輝かせたりする。宝玉をはめこんだような瞳や、絶妙なバランスで組み立てられたセティの美貌も率直すぎるほど素直に賞賛する。それは、二人にとって意外であつたが、決して不快ではなかつた。

「して、あなたたちはこれからどこに向かうのだ？」

会食も終盤になり、一同が食後の果物に手をつけはじめたころ、シノレが言った。

これまで主にシノレの質問に答えてきたリドルフが、黙って切れ長の瞳をセティに向ける。これは、彼らの主導権がリドルフではなく、年少の美貌の青年にある証拠であり、少なからずシノレを驚かせた。

「私たちはハル殿に雇われた身ですので、雇用主の指示なくしては動きようがありません」

二人がガイゼスの巡検使と交わした契約は、「ハル・アレンの警護」であり、特に期間などの取り決めはない。

「それでは、ハル殿の回復を待つのだな？」

「そうするつもりです」

セテイの答えを、リドルフはただ黙って聞いていた。

「リドは　　リドルフは腕のいい医者ですから、遠からずハル殿は回復されると思うのですが」

「そのようだな。カイの回復具合には、私も正直を言って驚いた」  
シノレは別室で養生しているハルの腹心の部下である、カイも訪ねていた。随分回復しているが、塞がりかけた傷を見れば、彼が負った怪我の重大さはよく分かる。最先端の技術を持つといわれるこのガイゼスの医師でも、治療は難しかっただろう。

「セテイ殿も、何か法を使うのか？」

「いいえ、私が遣うのは剣です」

「ほう、珍しいな。北の人間が剣を使うか。しかも、セテイ殿のよう美しい人が」

シノレの笑みは、種類の異なるものに変わった。

「ぜひ、お手並みを拝見したいものだ」

「私の剣は自己流ですので、ご披露できるようなものではありません」

「まあ、そうおっしゃるな。今日は修煉場を視察することになっている。良ければ、一緒に行ってみないか？ 帰りに町も案内しよう」

「　　私たちはナディール人ですが」

セテイが窺う（うかが）ような視線をシノレに向ける。

「あなたたちは、雇われたとはいえ大切な従弟を護ってくれたのだらう？ と、いうことは私にとっては大事な客人だ。客人をもてなすのに、国籍が関係あるのかい？」

悪戯っぽく目を細めた若い城主に、セテイは好感を覚えずにはいられなかった。

二人のやり取りをリドルフは淡い苦笑を浮かべて見守っていた。

会食が終わったあと、セティとリドルフは支度が整い次第、シノレの待つ裏門に向うことになった。リドルフは外出に関し、消極的だったが、セティには面と向ってはなにも言わない。

言えば機嫌を損ねるのは目に見えているし、自分も共に行くのだから、何かあったときもそれなりに切り抜けられるだろうとも思っていた。

しかし、あてがわれている客間に戻るまえに、さりげなくハルの部屋を訪ねたことが、リドルフの思惑を大きく狂わせた。

シノレに誘われて兵の修練場と町を見学してくるとメイラに告げると、彼女はリドルフだけはここに留まるように強く願った。今のところハルは穏やかに眠っているが、彼女は倒れた王子がひどく気にかかっていたのだ。リドルフがハルの容態は落ち着いているからと説得しても、実直な王子の従者殿は聞く耳をもたない。

「私が一人で行ってくるから、リドはハルの側についててやれよ」  
不毛な押し問答を見守っていたすえついに放たれたセティの一言に、リドルフは押し黙ったまま困惑した。せつかくのシノレの誘いを断るわけにもいかず、かといってセティを一人でいかせることも、リドルフにはとうてい容認できない。

「あの人、悪い人じゃないと思うんだ。だから大丈夫だよ」  
過度な心配や口出しを、セティはうつとうしがる。特にここ最近はその理由もなんとなく分かってはいるが、やはり一人では行かせたくない。かと言ってそれを口に出して、機嫌を損ねられて飛び出していかれるのも、かなわない。表情を変えぬまま、ごくわずかな時間のあいだにリドルフの頭のなかでは、さまざまな考えと思いが錯綜した。

そして短い逡巡のすえ、彼が口に出した言葉は、「気をつけて」



の一言であつた。セテイの実に嬉しそうな笑みに、リドルフは珍しく複雑な思いを隠しきれなかつた。

支度を終え、侍従に案内されて一人で裏門に姿を現したセテイの姿に、先に待つていたシノレは驚くようすもなかつた。

訝しがるセテイに、シノレは「先ほどリドルフ殿が事情を説明しに来た」と告げた。甲冑を着込み、マントを羽織つた勇ましい将軍は事の成り行きに関し、「実にメイラらしいことだ」とわずかに口許をほころばせたのだった。

かくしてセテイはシノレとその部下五名と少し離れた場所にある、兵の修練場へ出かけることとなつたわけである。

馬に乗れるかとシノレがセテイに問うと、彼は首を横に振り、目を輝かせた。

「乗つたことがないので、乗りたいと思つていました」

出かけにやつてきたリドルフがそつと耳打ちしたことをシノレは思い出していた。

セテイは田舎育ちのため、貴人に対する礼儀作法を知らないので、気分を害させることがあるかもしれない。シノレは特に構わなかつた。確かに王家の血は引いているが、軍人として扱われることの方が多し。それに、奇蹟の結晶のように美しい面に浮かぶ、生気に溢れたさまざまな表情を追うのに、いつの間にか夢中になつていて、セテイの言葉遣いなど気にする余裕もない。

「こうするのですか？」

自分の目の前で嬉々として乗馬の指南を受けるセテイをみていたら、シノレは心底彼が男であることに安堵した。国籍も家柄も関係ない。彼がもし女人であつたなら、どのような手を尽くしても自分のものにしたと思つただらう。

セテイが魅力的なのは、造形によるものだけではない。無論、姿形は完璧と言つても差し支えないが、整いすぎたものは逆に生々しさがなく、冷たく感じることもある。しかし、彼の場合それが全くないのだ。綺麗な顔を驚くほどに惜しげもなくよく動かす。

「シノレ様…？」

白い面差にみとれていたシノレは、セティの言葉で我に返った。

「では、早速駆けてみようか」

すでに灼熱が大地を支配しようといっていた。

周囲の景色はどれほど進んでも代わり映えせず、色彩に乏しい。

けれど、その分だけ晴れ渡った青空が引き立ち、ひどく目に眩しいのだ。

ごく短い時間でセティはよく馬を乗りこなせるようになっていた。彼のバランス感覚にはシノレも瞠目するほどであった。はじめに馬に乗ったとは思えぬほどの柔軟な体づかいと堂々たる姿である。彼を乗せている馬もどこか生き生きとして心地良さそうなのだ。

シノレと並んでセティは駆けた。少し離れて後方からシノレの麾下が五名ついてきている。

日が高くなり気温が上がって来ているぶんだけ余計に、頬をなぶる風が気持ち良い。

セティとリドルフが一月ほど滞在していた、国境の狭間の町よりも南東に位置するラガシュ近辺は、内陸になるせいか乾燥しており、日差しも強い。本当ならば、すっぽりと頭から覆っている外套などセティは脱いでしまいたい気分だった。

「脱げばいい。肌は陽に当たるとだんだん強くなっていく」

出かけに着せられたリドルフの身の丈にあった大きな外套を、うつつしそうにしているセティにシノレが笑って言った。

「リドルフにきつく言われているのです」

拗ねたような子供っぽい表情すらも、彼の顔をひどく魅力的に彩る。それを見ていたらシノレは、思わず口にせずにはいられなかった。

「きみにとって、リドルフ殿はなんだ？」

それは、嫉妬にも似た感情だったかもしれない。

「なに、とおっしゃられても」

シノレと並んで馬を小走りに駆けさせながら、セティは淡紫色の

瞳を宙に泳がせる。そして少し考えたあと、はっきりとした口調で答えた。

「リドは私にとって、師であり、兄であり 他のも  
代えがたい大切な友人です」

「そうか」

真つ直ぐ前を見つめるその瞳を見て、シノレは今更ながら、となりにいる甘美な夢の住人のように美しい存在が、紛れもない生身の青年であることを改めて認識したのであった。

「どうした、アゲラルブ」

つと、歩みを止めた愛馬にシノレは訝しげに呼びかけた。そして、ほとんど同時に気がついた。丘の向こうから姿を現した、一団の存在に。

後方からついてきていたシノレの部下五名が、事態を察知して素早く二人の前に馬を並べる。

「止まれ！ 止まれ！」

旗本で一番年長らしき男が声を張り上げた。

「ここは左将軍、シノレ・アンヴァーンの領地ぞ！ 許可なく武装するとはどういう見だ」

詰問にむろんと言うべきか、答えはない。当然、言った本人もシノレ自身も答えを得られるとは思っていない。現れた一団が覆面で顔を隠している時点で、彼らのおおよその目的は分かる。

「昨日ハル殿には言いそびれてしまったのだが、命を狙われているのは私もそうらしいのだ」

セテイに向けたシノレの言葉に焦りは全くない。それどころか、まるで「昨日は雨だった」というような実に悠長な口調である。

「警戒を怠っていたわけではないが、このあたりは私にとっては庭のようなものなのだ。まさかここで襲撃してくるとはな」

どこか愚痴っぽくなったのは、自身の身の危険を感じたからではない。客人を危険な目に遭わせてしまったという自責の念からである。

普段、シノレは修練場の視察に護衛の兵を連れて行くことはない。ラガシユ周辺はガイゼスでもかなり治安が良い一帯であるし、何しろかれはガイゼスで三本の指に入るほどの技量の持ち主なのだから。それでも今回、部下の精鋭ばかりを伴ったのは、彼なりの客人に対する気遣いであった。

「客人を巻き込むのは非常に不本意なのだが、そうも言ってもらえうにない」

「そのようですね」

セテイの返答は実に落ち着いたものである。

「一人で走れるか？」

問われたセテイは逡巡することもなく、あっさりと言つてのける。「走れないことはないと思いますが、土地勘がないので目標を見失うと思います」

「馬上で剣を遣つたことは？」

言つてすぐにシノレは愚問だと思つた。この青年は馬に乗つたことがなかったのだ。セテイの口許に不敵な笑みが閃く。

「せつかくの機会ですので、將軍にご指南いただくことにしましょう」

悠然と前に馬を進めたシノレは、束ねた漆黒の髪を風になびかせながら二十人ほどの一団を見据えた。

「念のため、誰の差し金かだけ聞いておこう。殺してしまえば、永遠に聞けぬからな」

やはり、答えはない。かわりに返ってきたのは、陽光を反射した白刃のきらめきだけである。

「このシノレの首、たやすくはやらぬぞ」

口許に好戦的な笑みを刻み、シノレは長大な剣をゆったりと構えた。

亡き父が「青い英雄王」と呼ばれたゆえんである、青い甲冑をシノレは引き継いでいた。偉大な父を象徴するそれを身につけるのは、国王陛下からも勇将と賞賛されるシノレであつてもやはり畏怖の念を禁じえない。四年前に左將軍の位についてからは、特別なときにだけ何度か着用して、そのたびに国民を沸かせた。だが、今、彼が身につけているのは乾燥した大地と同色の、地味なものである。

しかし、その姿は青い英雄王の息子として全く恥じぬものであつた。

三人の部下はセテイの護衛のために下がらせ、自らは二人の部下を率いて、臆することなく敵中央を堂々と駆けていく。

遠目から見ると、シノレの動作は一見、無造作で、緩慢にも見える。しかし、向き合ったものには到底そうは思えなかった。

並みの男では長時間構えることすら困難であろう、重量のある長大な剣を、シノレはまるで自分の腕のように軽々と操る。馬で駆け抜けるその一瞬のうちに、間合いを読み、完璧に計算されたタイミングで刃を一閃させるのだ。

彼の長剣が描く軌跡のあとには、悲鳴があがり、血の雨が降り注ぐ。敏捷でありながら、重い一撃は覆面に覆われた頭を跳ね飛ばし、

胸を半ば両断する。

「こちらへ」

シノレが一団を割っては反転するという、かく乱攻撃をしているあいだ、セティはシノレの部下に促されるがまま馬を走らせた。囲まれないように進路をとる若い男は、シノレが信頼を寄せるに相応しいと思えた。ただ、セティの馬を操る技量がそれに応えられなかったのだ。

セティが囲まれた人数はそれほど多くはなかった。シノレの作戦が、やはりきいているのだ。目の前で自分を護るようにして男と斬り結んでいた、シノレの部下の一人が倒れたとき、セティはほとんど逡巡する間もなく、無意識に剣を鞘走らせていた。

地上であれば彼の抜き打ちをかわせるものは、ごくわずかであろう。事実、馬上から放たれた一太刀を、対峙する男は追えなかった。しかし、今、セティの剣が切ったのは宙だけであった。

馬上では長さのある武器を使用するのが一般的である。そうしなければ間合いが狭くなり、圧倒的に不利だからだ。しかし、彼が使う剣は、通常使われているものよりも、さらに刀身が短いのだ。

セティの斬撃を免れた男が返してきたのは、十分に力を乗せられた重い一撃である。

金属と金属がぶつかりあい、青い火花が散る。

地に足がついていたなら、セティはこうして相手の剣をまともに受けることは少ない。軽捷な身のこなしを存分に発揮し、ひらりと身をかわすのだ。彼の剣技が舞踏のようだといわれるゆえんである。しかし、今彼がいるのは馬上であり、馬は自分の体のようになやかには動いてくれない。

第一閃は両手で柄をもち、なんとか受けた。しかし、大男の力をまともに受け止めた手は痺れ、握り締めた手のなかで、柄が滑った。完全に形勢不利で受けた第二閃目で、やけに澄んだ音を立てて、細身の剣は主の手のなかから空しく飛び、地面に突き刺さる。

そのとき、セティがかぶっていた外套のフードがはらりと脱げた。

「なっ……」

実用性のみを重視して作られた飾り気のない外套の下からあらわれたのは、女神と見紛うほどに美しい造形である。長い睫毛に覆われた幻想的な淡紫色の双眸に、通った鼻筋。地上の真珠アルペルムのように白い頬は、上気してほんのり紅く染まっていた。

浮世ばなれした、あまりの美しさに男は一瞬我を忘れた。しかし、セティはその空白のときを見逃さなかった。

ごく軽い動作で懐から短剣を取り出して放る。放たれた短剣は、その何気ない動作とは裏腹に、鋭い直線を描いて、寸分の狂いなく男の覆面の下の右眼に突き刺さった。

「ぎゃあああ」

覆面の右半分を紅く染めて馬から転げ落ちた男に目もくれず、セティは鞍上から手を伸ばし、地面に突き立った愛剣を引き抜こうとする。

馬から決しておりてはならぬ。

彼の部下を通して、シノレから与えられた唯一の助言を、セティは忠実に守ろうとしていたのである。下馬すればどうということになるか。それは経験のないものでも、人並みの想像力があればなんとなくは分かる。

「セティ殿！」

地面に突き立った愛剣の柄に手が触れるか、触れぬかということこそ、セティの耳は新たな馬蹄の響きと、シノレの緊迫した声を聞いた。

陽光を浴びて眩い銀白色の光を放っていた、柄にはめこまれた月長石が、あらわれた馬影に覆われた。

わずかな迷いもなかった。

耳と目で得たわずかな情報からセティは事態を察知し、動いていた。

片方の足を勢いよく鎧から外し、くるりと体を反転させてその足で側方からあらわれた馬の腹を蹴る。

鎧にかけたままの足と、馬の腹を蹴った足とでほんの一瞬だけ体を支え、愛剣の柄を握る。

不意に横腹を蹴られた馬が動転して、旗手の制御もきかずに駆け出すと同時に、反動を利用して、もとのように鎧に足をかける。

「なんとこの身のこなしだ」

右と左に覆面を切り払い、客人の危機にかけつけたシノレは、眼前で彼が行った軽業に舌を巻いた。物心つくまえから馬に乗っているが、同じことができるかと問われれば、いささか自信がない。それ以上に、あの局面であれも簡単に思い切れるかどうか、それも分からない。

もはや、現場は混戦状態と化していた。

相手は半数以下に減っているが、五人いた部下も、剣をふるっているのは、三人しか確認できない。

「なるほどね」

二人の覆面に左右を囲まれたセテイの呟きは、側で肩を並べて剣をふるうシノレの耳にも届かずに、血の匂いが立ちこめはじめた熱い空気に溶けた。

セテイは向き直り、左の男の方へ馬を寄せた。

攻撃は前と斜め後方から、同時に放たれた。

斜め右後方から繰り出された一撃を、セテイは後ろ手でかまえた愛剣で弾いた。

正面から放たれた剣は、顎をわずかにひいて避ける。それでも切っ先は頬をかすめ、淡雪のように白い頬に美しい紅い線を描く。

「セテイ殿！」

自らも二人と切り結びながら、視界の隅でそれを見ていたシノレは慄然とした。

しかし、次の瞬間、シノレは違う意味で背筋が冷たくなった。

間合いを詰めたセテイの剣が、白光と化して男の頸動脈を走った。赤い噴水を吹き上げて、男がどうと音をたてて地に倒れる。

左頬から血を流したセテイの顔には、冷たい微笑が張り付いている。



た。

まるで気おされたかのように、一呼吸おくれてもう一人の男がふるった刃はセティの左胸を薄く切った。裂けた外套と衣のすきまから白い肌が覗く。

セティは相手の刃が自分の体を切ると同時に、馬を進め、逆手に剣をふるった。

ほとばしる紅い液体。セティの一撃はまたしても頸動脈を切断していた。

「セティ殿」

シノレが一人の首を斬りとばしたとき、戦闘はようやく終焉を迎えようとしていた。残りの手負った数名が、ばらばらと無秩序に逃げ去っていく。

振り返ったセティの姿を見て、シノレは思わず息を呑んだ。

左の目尻から頬の中ほどまでが切れ、白い頬を赤く汚していた。流れる血は顎を伝い、外套の襟に染みをつくっている。

「顔に傷が」

「かすり傷です。ご心配には及びません」

「しかし」

「故意に、斬らせたのです」

「故意に？」

シノレは一瞬セティの言った意味がよく分からなかった。

「そうしなければ、私の剣は短くて届かなかったのです」

セティは傷口に自分の白い指をあてた。指先はすぐさま紅く染まり、血が滴りおちる。かすり傷というには、深すぎる。

「少し、斬らせすぎたようです」

自分の顔に傷がついたことなど一片も気にしたようすもなく、シノレを安心させるかのように、セティは肩をすくめて笑ってみせた。

気温が一番高くなる時間だった。

このころになると、町は急に静かになりはじめる。

仕事に汗を流していた男たちも、市で買い物しながら談笑していた女たちも、皆直射日光をさけて、昼寝をして休むのだ。

リドルフは昼寝をして休むわけでもなく、客間で一人、異国の書物に目を落としていた。

セティがシノレと出かけていってからほどなくして、ハルは一度目を醒ました。

顔色はずいぶんよくなり、多少は食事も口にいった。メイラとリドルフに心配をかけたことを律儀に詫びて、それから少し、独りになりたいと言った。具合が悪くなったらすぐに知らせるようにとだけ伝え、リドルフはメイラと部屋を後にして、メイラにも休むように言った。彼女はハルにつきっきりで、昨夜から一睡もしていなかったのだ。

それから、セティと自分のためにあてがわれた客間に戻ると、リドルフは手持ち無沙汰を解消するために書棚にあった書物を手に取ったのだった。

異国といえども、つい十数年前までは同じ国である。当然、言語や文字は同じものを用いているから書を読むのには苦勞しない。しかし、根本的な考え方が全く違う国なので、新たな発見に驚きが尽きることはない。

こんな、静かな時間は本当に久しぶりだった。

書見に没頭すれば、寝食も忘れてしまうリドルフのことである。本来ならばこのような時間は至福のときであるだが、今の彼にはとてもそうは思えなかった。

何頁か読み終わるごとに、席をたち、窓から景色を眺めてみる。風通しが良いように、広く窓をとった石造りの住宅。背の低い、

不恰好な植物。色彩の乏しい情景。

眼下に広がる異国の風景は、どれもリドルフの心のなかには入ってこない。ただ、傍らにない見慣れた金色の髪 of 青年のことが、気にかかつて仕方ないのだ。

どんなにセテイが嫌がっても、やはり自分は側を離れるべきではなかったのではないか、という思いが過ぎる。

セテイは無謀、というほどに浅はかではないが、あまり慎重ではないところがある。と、いうのも、彼自身が認識しているかどうかはさだかではないが、セテイは感受性が強く、ほとんど直感のようなもので物事を判断するのだ。

人に関しては特にそうだ。だから、見ず知らずの人間のために平気で剣をふるったりするし、よく知らない人間に対して深く感情移入したりもする。どんなに物理的に不透明であっても、悪い人間ではないと感じたら、それを信じる。

シノレ・アンヴァーンという人物は、その一端に触れたかぎりではリドルフにも悪い人間のように思えなかった。しかし、道中でシノレの紋章をつけた一団に襲撃されたというのも、また事実の一つなのである。しかも、その点に関しては新たな情報もないし、なんら解決もされていないのだ。はたして、そんな人物と二人でセテイを外出させてよかったのだろうか。

そこまで考えて、急に頭は冷める。自分は考えすぎているのだ、という思いに駆られる。

第一、セテイは剣の達人で物理的攻撃から身を守るということに関しては、リドルフよりもはるかに長けているし、セテイの勘が外れたことなどないのだ。

しかし、胸に巢食うこの漠然とした陰のようなものは何なのだろうか。

リドルフは、空色の瞳を伏せて何度目かも分からぬため息をついた。

胸騒ぎが、現実にかわつたのは太陽が中天をすぎたころであった。

なにやら城内が騒がしい。

扉の向こうの廊下を、何人もの人々が行ったり来たりしているのである。異変に気がついたリドルフが、様子を伺うおうと、扉に近づいたとき、慌ただしく向こう側からその扉が叩かれた。

「シノレ様……」

扉の向こうに佇む、美丈夫の姿を見た途端、リドルフは心がざざめきたつのを感じた。

「リドルフ殿、申し訳ない」

髪を乱し、外套を羽織ったままのシノレの体からはわずかに血の臭いがした。

「セテイ殿が怪我をされた」

リドルフは切れ長の瞳を大きく見開いて、息を呑む。

「事情は後ほど詳しくご説明させていただくが、とにかく今は、セテイ殿を診ていただけないだろうか」

「セテイは、セテイは無事なのですか？」

「私の言い方がいけなかった」

シノレはなだめるようにリドルフの肩に手を置いた。

「怪我は命に関わるようなものではないのだが」

「命に…関わるようなものではない」

その言葉の意味をかみ締めるようにリドルフは呟き、一つ安堵のため息を漏らす。

「ただ、顔に傷がついてしまって」

「顔…ですか？」

「本人は故意に斬らせたと言っている」

色の薄い眉根を寄せて沈黙したリドルフに、シノレは言いにくそうにつけくわえた。

「私も側で見ていたが、確かにそう見えないこともなかった。避けようと思えば避けられたはずなのだ。セテイ殿ほどの腕前があれば」

あのとき、セテイが浮かべた身の毛がよだつような冷たい微笑について、シノレは触れなかった。

シノレに案内されて、リドルフが通された部屋は城内の医務室であった。あてがわれている客間の半分ほどの広さで、室内には独特の匂いが立ち込めていた。

硝子製の瓶に少量ずつ詰められた薬草の匂いである。人によっては不快に感じるであろう癖のあるその匂いが、かえってリドルフを落ち着かせた。

人の気配にも気がつかないかのようになり、後ろ向きに長いすに腰掛けたセティは肩を覆う長さの金髪を自然に流したまま、ぼんやりと窓から外を眺めていた。

「セティ」

びくり、と肩を震わせ、ややあつてから振り向いたセティの左頬には、血の滲んだ布が貼られていた。

「たいしたこと、ないんだ。シノレ様が大げさに」

まるで言い訳をするようなセティの言葉など、聞こえなかったようにリドルフは険しい顔のまま大股で近づき、正面に屈みこんだ。

「切っ先がかすただけなんだよ」

リドルフは何も言わず、セティの左の目尻から頬にかけての傷を覆う布に指をかけた。

露わになつた傷口にわずかに眉を顰める。

上質の絹織物のような白い頬を抉る傷口のふちに、赤黒く変色した血がこびりついている。さらに奥には白い頬と対照的な赤い肉が覗いていた。セティは不世出の美貌の持ち主であるがゆえ、それはひどく凄惨に見える。

この姿を見れば、誰もが心を痛めるに違いなかった。

しかし、リドルフが嘆息したのはセティの美しい顔に傷がついたからではなかった。

あとほんのわずかでもずれていたら、剣先はセティの瞳を抉っていたのだ。

「胸にも傷を」

切れた外套と衣のすきまから覗く、白い皮膚に走った赤い線に手

を当てて、リドルフは調べた。左胸の傷は外套と衣のうえから受けたせいか、顔の傷に比べると大分浅くすんでおり、かすり傷といってもよさそうだ。

リドルフは立ち上がると、セテイの顔の傷に指先で触れた。その途端、それまでおとなしくしていたセテイが避けるように、ふいと横を向く。

リドルフはなにも言わなかった。

なにも言わず、反対の手をセテイの顎にかけて、やや強引にもとのように前を向かせ、傷に指を添える。

「このままでいい」

リドルフがしようとしていることを察したセテイは、それでもなお首を振って顎にかけられた手から逃れようとする。しかし、リドルフはそれを許さない。

「放っておいても、このくらい自然に治る」

「このままでは、傷跡が残ります」

「傷跡ぐらい、どうってことない」

顎にかけられた手を振り払って、セテイは言い捨てた。

「わざと、斬らせたのですか？」

弾かれたように顔を上げたセテイは、何か言おうと口を開きかけた。まるで心を射抜くかのように少しも逸らすことなく向けられた、澄んだ湖面のようなリドルフの瞳を直視できず、視線を逸らし、下唇を噛んだ。いつもは太陽の光を宿しているかのようにきらめく瞳が、急速に翳る。

なぜ、そんなことをしたんです？」

リドルフの口調は諷める（いさ）というよりは、率直に疑問を尋ねるようなものだった。

「剣が届かなかったからさ」

「本当に？」

「他になにがあると言っただ」

リドルフは得心したわけではなかったが、それ以上の詮索を止め

た。と、いうよりは、哀しいことに、突き詰めたところでセティ自身はその答えを認識しているとは、リドルフには思えなかった。

「傷口から悪いものが入ることもあります。傷は塞ぎます」

「考えすぎ」

「なにかあつたらどうするんです」

セティの言葉尻を奪って言ったリドルフの声に、激しさはない。

「あなたの身に、なにかあつたらどうするんです」

ただ切々とした眼差しをセティに向けるだけである。セティは気圧されたようにおとなしくなった。

リドルフは指先で傷を覆い、マントラを唱えはじめた。

唇から紡がれるマントラは、いつもより低く、どこかもの悲しい。他のだれが聞いてもその違いは分からないかもしれない。しかし、セティにはそれがよく分かった。

空を、一羽の鳥が飛んでいった。

低い声で詠唱されるマントラが佳境に入ったとき、それまでされるままにしていたセティが、ぼつりと呟いた。

「リドのそういうところが嫌いだ」

リドルフは答えずに、セティの傷口にあてた指先に力と意識を集中させていた。それだけ、余裕がなかった。一刻も早く傷を塞ごうとしていた。しかし、それが、一層セティを苛立たせたのかもしれない。

心の奥底でくすぶっていたなにかに油を注いだかのように、セティは一気に爆発した。

「そんなに一生懸命力を使うなよ！」

リドルフの手を乱暴に振り払い、セティは立ち上がって叫んだ。あまりの勢いに、リドルフはよろめき、近くにあった卓に手をついた。卓に置かれていた硝子の杯が転げ落ち、ばらばらに砕けた薄紫色の破片が飛散する。

「リドの手は、力は！ 恵まれない人のためにあるんだろ！ 私のためになんかに 顔の傷を消すためなんかに、使つな！」

口から出た声と言葉の激しさに驚いたのは、言った本人のセテイである。肩で荒く息をつきながら、狼狽したように視線をリドルフから逸らす。

一方のリドルフは、振り払われた手に驚きもせず、突如激昂したセテイに戸惑うでもなく、じつと空色の瞳でセテイを見つめた。

「私は、あなたのそういうところが好きですよ」

返されてきた思いがけない言葉に、セテイは潤んだ瞳をリドルフに向けた。

「確かに、神殿にいたころの私はそう思っていました。けれど、今の私の力は、ただあなたのためだけにあるのです」

リドルフは穏やかに微笑した。

「一緒に旅に出ると決めたあの時から」

強い意志とそれとは裏腹の、今にも崩れてしまいそうな脆さを抱え、不均衡な感情を隠すことなく美しい顔全体に浮かべて旅に出ることを打ち明けてきた、あのときのセテイの顔をリドルフはよく覚えていた。拭い去れない虚無感を抱えていた心が、揺り動かされた。

「……………私が、セテイだからか」

眩いほどに快活な光に満ちた淡紫色の瞳が揺らぐのは、こんなときもそうだ。

こういう眼を向けてくるときのセテイに、なんと応えたらいいのか、リドルフはいつも分からない。どこかに、正解があるのだろうか。

呻くような声に、痛いほどに込められた得体の知れない暗い感情を、リドルフは本人よりもよく分かっていたかもしれない。

「あなたがセテイス様でも、セテイでも、それはどちらでも変わりません」

「変わらない…？」

「あなたという存在が、私には大事なのです」

たしかめるような眼差しを向けるセテイに、リドルフは柔らかく、けれど哀しげに微笑した。



「さあ、まだ途中ですよ」

リドルフは今度はそつと顎に手をかけた。セティは拒絶こそしなかったが、その瞳は翳ったままだった。

日が暮れても、城内は相変わらず慌ただしかった。

それも当然である。国民の絶大な支持と人気を得る左將軍、シノレ・アンヴァーン公が領内で襲撃にあつたのである。むろん、無用な混乱を避けるため領民たちにはその情報は伝えられなかったが、城内はそういうわけにはいかない。シノレが伴っていた部下も二名は命を落としていたし、襲撃者に関する情報収集も行わなければならなかった。

傷を負ったのが嘘のように、セテイの顔と胸はリドルフによってきれいに治り、事情を知るものは心から安堵し、リドルフの力に改めて畏敬の念を覚えた。あの美しい顔に傷跡が残ることなど、誰もが生理的に受け容れられないのだ。

「眠れないのですか？」

人の動く気配に、リドルフは目を醒ました。

「どうやら、いつの間にか眠っていたらしい。」

いつものように酒を所望したセテイに、今日ぐらいは止した方がいいと言ったら、やはり、というべきかふて腐れた。そして、そのまま床に入ったセテイの傍らで書物を開いていたはずなのに、あるうことかセテイよりも早く眠っていたようだ。日中、久々に大きな力を使ったせいかもしれない。

あれからどのくらい時が経つたのか分からない。灯していたランプは消え、蒼白い月の光が、大きな窓から差し込んでいる。

「ちょっと、出てくるよ」

「それなら私も」

「リドは、先に寝ている」

セテイの声からは、昼間の刺々しさは消えていた。

「今日は、悪かった」

薄暗いなかで真っ直ぐに眼を向けて、セテイは拍子抜けするほど

素直に詫びた。リドルフは穏やかに微笑してそれに応えた。

「少し外の風に当たりたいんだ。城から出たりしない。もう、心配はかけないよ」

リドルフは、黙って頷いた。

セテイは部屋を出て、廊下を歩いた。ところどころに灯されたあかりは、暗く、頼りない。

いつも食事に招かれる部屋に行く途中の、中庭に通じる道をセテイは覚えていた。

薄明かりのなかに、小さな人物がぼつんと独りで座っていた。

寝巻き姿のままの、ハルである。その姿を認めたたん、セテイは引き返そうかと思った。

憂鬱そうな顔。衣から伸びた細い手足。そよとでも風が吹けば消し飛んでしまいそうなほど、はかないその姿。

視線の先で、ハルが嘆息して俯いたその仕草をとらえた瞬間、セテイの足は勝手に中庭の方へと進んでいた。

「もう具合はいいのか？」

「セテイ殿……」

突如頭上から降ってきた声に、ハルは慌てて顔をあげた。

「はい、もう良くなりました。ご心配をおかけしました」

取り繕うように浮かべた微笑みは、やはりつつけば崩れてしまいそうなほど儂げなものだった。

「ちよつと、風に当たりたくなつたんだ。隣りに座つてもいいか？」

ハルは頷いて横にずれた。セテイが一人分の空間をあけて、ハルの隣りに腰掛ける。

よく手入れされた庭には、白い花が一面に咲いていた。月光に照らされたそれは青白く闇に浮かび上がり、絵も言えぬほどに幻想的だ。

「あれは、なんという花なんだ？」

「ああ、あれは――」

ハルはセテイに言われてはじめて、庭が白い花に埋め尽くされて

いるのに気がついたようだった。

「アルベルム（地上の真珠）という花です。この時季に、ほんの一夜か二夜しか花開かないという珍しい花なのですよ」

「ああ、あれがアルベルムか」

口許を綻ばせたセテイに、ハルは不思議そうに顔を向ける。

「南に進むにつれて、私のことをアルベルムに例える人間が多かった。私はアルベルムというものを知らなかったから、不思議だったのさ」

「そうでしたか」

「北の国では、白いものは雪にたとえることがおおいんだ。ガイゼスでは、アルベルムに例えるんだな」

「セテイ殿が、アルベルムに例えられるのは、きっと肌の白さだけではありませんよ。アルベルムはガイゼス人にとっては特別なものですから」

「特別なもの？」

ハルは一つ頷いた。

「アルベルムという名は、地上の真珠という意味なのです」

美しい純白色の花弁と、高潔で優美な香り。暑さが和らぐ夜のあいだ、しかもほんのひとときだけ咲くという、アルベルム地上の真珠から作られる香は、まさにその名のごとく高価なのだという。

「セテイ殿は、ガイゼス人の目にはまさにアルベルムのように映るのでしょうか」

それから二人は石造りの長いすに並んで腰掛けたまま、言葉も交わさずにしばらくぼんやりとアルベルムを眺めた。ときおり吹く弱い風が、セテイの金色の長い髪とハルの短い黒い髪を揺らし、雅な香りがふわりと舞う。

セテイは芳しいアルベルムの香りを、どこかで嗅いだ香りだと思っただけ思い出せなかった。

「お二人は、これからどちらに向かうのですか？」

「まだ決めていない。というか、決めかねている」

「決めかねている?」

「探しているものがある。でも、それがどこにあるのか、分からない」

セティは放り出していた長い脚を、椅子の下で交差させる。行儀が悪いはずなのに、この青年がすると妙にさまになるから不思議なものだ。

「それを探すために、旅をしているのですね」

「そうなのかな」

不意にセティが笑う。その笑みはどこか自嘲気味だったかもしれない。

「口実かもしれない。ほんとうは、ただ、自分がしたいようにしているだけさ」

ハルは弾かれたように顔を上げた。セティの淡紫色の瞳は月光を受けているせいか、今まで見たこともないような複雑な色を成していた。

「私はそれでも。セティ殿が羨ましい。羨む資格など、私にはないと分かっているのに」

「資格がない? どういう意味だ?」

今までも、羨ましいと言われたことがないわけではなかった。行き先も決めず、その日暮らしの生活は、はたから見ると気ままで魅力的に映るようだった。

「自分を通すためには、なにかと戦わなくてはいけないでしょう? きっと、捨てなければならぬものもあるでしょう」

セティは美しい眼を見開いてハルを見つめた。

羨ましいと言われるたびに、「だったら、してみたらいいじゃないか」とセティは言ってきた。しかし、そうすると、返ってくるのは必ず「そんなの許されるわけがない」「あなたとは違うから」というような言葉だった。

「なにも犠牲にせずに、自分の思うまま生きられる人などいません。けれど、私にはそんな勇気がないので。だから、私のような人間

にセテイ殿を羨む資格などありません」

俯いたまま、けれどはつきりとした口調でそう言ったハルの端正な顔を、セテイはじっと凝視した。

線の細い少年の姿が、いつもと少し違って見えた。

「セテイ殿……？」

ハルは不思議そうに小首を傾げて、小さく何度か名を呼んだ。それから、ようやくセテイは動きはじめた。

「ハルは、これからどうするんだ？」

「どうしたらいいのでしょうか。考えなくてはいけないのですが」  
ハルはため息をついた。

「私の命を欲している人がいるのなら、望みどおり差し上げてもいい。そんな風に思ってしまう自分も、いるのです」

セテイは黙然と、ハルを見た。アルベルムの香りが漂っていた。

「剣を持つとき、相手がどんなに格上だとしても、負けるかもしれない。と思っではいけないんだ。そう思ったとき、もうその瞬間に勝負はついてしまう」

「では、私はもう死んでいるのと同じですね」

ハルは苦笑して首を振った。

「ハルが死ねば、悲しむ人がいるだろう？」

「どうでしょうね。私は、元よりこの世に生を受ける必要がなかった人間ですから」

この少年はそんな破滅的な言葉すらも、躊躇うことなくいつもと同じ調子でさらりと口にする。それは、彼が慰めの言葉を欲して言っているのではなく、心底そう思っているという証拠でもあった。

「生きている価値がない人間なんて、存在しない」

一陣の風が吹き抜けて、セテイの金色の髪を揺らす。

「命の重さに優劣などない」

ハルは思わず目を細めた。セテイの美しい淡紫色の瞳に活力と生氣がみなぎっていた。

「術がないのなら、私が剣を教えてやる。支えてくれる友人がない

のなら、私が一人目の友人になるう」

この時のセティは実際、なぜ自分がこんなことを言ったのか、よく分からなかった。むせかえるようなアルベルムの香りに惑わされているのかもしれない。

「だから、闘わないか」

「たたかう…?」

まるで知らない魔法の呪文を唱えるかのように、ハルは口中でその音をなぞる。

「そうさ。命を狙われているのなら、その相手と闘えばいい」

「そんなこと 無理に、決まっています」

絶望に満ちた、暗い顔。セテイにとってそれは嫌というほどに見覚えのある表情だった。

「ハルは、全知全能の神オリスに命を狙われているのか？」

訝しげな黒鷲色の瞳を向けられて、セテイは穏やかに微笑んで「そうか、ハルは、ガイゼス人だったな」と呟き、言い直す。

「私達の国では、オリスは神々の父と言われていて、絶対に逆らえないもののたとえになるんだ。ハルの国にも、そういうものがあるだろうか？」

問われて、ハルは曖昧に頷いた。

ガイゼスに法力がある人間は少ない。そのせいか、ハルの故国では実体のないものを崇めるような風習は薄い。しかし、五大神の信仰が盛んな隣国において、全知全能の神オリスという神が篤く信仰され、他の神々と比較してもどれほど特別視されているかは、知識としてよく知っている。なんでも、オリスに仕える神官は、法力がある人間の中でも家柄がよく、特に優れたものだけがなれるのだという。

「私は、たとえオリスに命を狙われていたとしても闘うよ」

ハルは潤んだ黒目がちな大きな瞳を、さらに見開いた。

「自分の存在意義は、自分でつかむんだ。誰かに決められるものでも、あらかじめ決まっているものでもない」

セテイが、晴れやかに笑う。

「そうじゃないと、あんまり悲しいだろう?」

その瞬間、アルベルムの肌と宝玉の瞳をもつ、月光に照らされた



美しい造形が、ハルにはまるで神か女神のように映っていたのかも  
しれない。

「私は……ずっと、ずっと、流されて生きてきたように思います。  
そうすることしかできないと思ってきたから」

ハルは、言葉を切つて唾を飲み込んだ。黒鳶色の瞳を落ち着きな  
く彷徨わせながらも、必死になにかを伝えようとしていた。セテイ  
はそれを、ただじっと待った。

「闘うなどということは、もちろん　それどころか、抗うこと  
すらも考えられませんでした。自分でなにかを選んではいけないの  
だと、そう思っていて」

セテイは色の薄い眉を寄せて、かすかに首を傾げた。温和で思慮  
深いこの少年がこれほどまでに自分を否定せねばならない理由が分  
からなかった。

「それを許されない人間など、いないよ。すべての人に、その権利  
があるんだ」

喜ばしい神託でも受けたかのように、ハルの顔から急速に憂いが  
消えていく。

「　ほんとうに、友人に、なつてくれるのですか？」

「ハルさえよければ」

「剣を、教えてくれるのですか？」

「遣う覚悟があるのなら、いくらでも」

不思議そうに小首を傾げたハルに、セテイは言葉を付け足した。

「剣を遣うということは、究極的にいえば、自分の手で人の命を扱  
うということだ。それがたとえ不可抗力であつたとしても、奪つた  
命は二度と戻らない」

「それも含めて、闘う、という意味なのですね」

神妙な顔で呟いたハルが、セテイにはひどく好ましいものに思わ  
れて、思わず目を細めた。

「アイデンの宿で、瀕死のカイを目の前にしてメイラに向つて言っ  
た言葉を、覚えていらっしゃいますか？」

記憶の糸を手繰り寄せてみたものの、何のことを指されているのかセティには全く見当がつかない。セティの心境を察したハルは、また、眩しそうに目を細めてほほえんだ。

「そんなもののために、人の命は左右されていていいのか？ と。セティ殿はそうおっしゃったのです。きつと、セティ殿にとっては当然の感覚、ごく普通のことなのでしょう。だから、いちいち覚えてもいない。けれど、私にとってはとても衝撃的だったのです」

「ああ、あのことが」

大方のガイゼス人がそうであるように、法術を使うリドルフに対して、メイラは非好意的な感情を露わにした。法力の有無によって差別し、法力のない人間を迫害してきたナディールと、迫害されてきた人々が中心になり、独立したガイゼスとの歴史を考えればメイラの行動は当然であった。それがガイゼス人としての誇りであり、意地でもあるからだ。しかし、瀕死の人間を前にしたとき、生きている人間の意地などというものはセティには、ひどく無価値なもののように思えた。だから、思ったままを口にした。

「本当なら、私が言わなくてはいけない言葉でした。大切な部下の命がかかっているのだから、そんなことは関係ないと。けれど、私の口はくっついてしまったように動かなかったのです。大事なことを言いたいときは、いつもそうなのです」

ハルの目が見えないものを追うように、どこか遠くを見た。

「あのときも、私は言えなかった」

長い睫毛に囲まれた黒鷲色に瞳に浮かんでいるのは、アイデンでのあの出来事でも、ましてや目の前で咲き誇るアルベルムでもないようだった。

「今度、そういうときがきたときは、堂々とそう言える人間になりたいのです。私は、セティのように、なりたい」

はじめて真っ直ぐに向けられた、切々とした濃色の瞳と目が合った途端、なぜかセティは胸の奥が疼いた。視線をそらしたい衝動に駆られた。

「私と友人になつてくれますか？」

「契約成立だな」

心の奥底にある得体のしれない感情を追いやって、セティは立ち上がり、手を差し出した。ハルもまたセティの手をしっかりと握って、引き上げられるようにして立ち上がる。

小麦色の手は少女のように華奢で柔らかかった。握り返しては壊れてしまうのではないかと危惧を覚えるほどに。それでも、しっかりと握ってくるハルに応えるように、セティもほんの少しだけ力をこめて握り返す。

一面に純白の花が咲く城の中庭で、月明りの下二人だけでしめやかに交わされた新たな契約は、ハルとセティの心をなにか温かいもので満たした。

満たされたはずの心の裏に潜む、暗いものを、突き詰めようとはセティは思わなかった。

「メイラ、これより私はセテイ殿とともにトウルファに向います」  
「リド、これからハルと一緒にトウルファという街に向うぞ」

早朝。夜風に当たると言って部屋を出たきり、一向に帰ってこない主に気を揉んでいたメイラとリドルフは、同時刻、別室にて意気揚々と戻ってきたそれぞれの主から唐突に進路を告げられることとなった。彼らの心境はほぼ似たようなものであったが、その後取った行動は違った。

部屋を出て行くとき、この世の終わりかと思うほどに沈んだ表情であった王子の顔に生気が戻ったことにメイラは驚き、けれど素直に喜んで主の決定を二つ返事で受けた。

しかし、一方のリドルフはメイラと同様に主の瞳に快活な光が戻ったことは素直に喜んだが、彼の宣言に対しては難色を示したのであった。

有能な侍従としては、これ以上ガイゼスの王子と行動をとともにすることは、やはり賛成しかねるのだ。それが、セテイとハルの双方のためであることは、論理的に考えれば間違いないことであるし、それはセテイもよく理解していた。

彼の反応を半ば予想していたセテイは、淀みなく事のいきさつを話しはじめた。

ハルがシノレから聞いた話、セテイ自身がシノレと接して感じたこと。そしてやはりなによりも情報が不足していること。そのため、トウルファという街にいるハルの叔父なる人物に会い、さらに判断材料を増やすことが先決だと、二人で相談して決めたこと。

そして、ハルと友人になったこと。  
「友人が命を狙われているんだ。それを、阻止したいと思うのは、当然だろう？」

「セテイは、ハル殿が好きなんですわね」

リドルフの口調は穏やかだった。

「ああ、私はハルが好きだ」

屈託なく、即答したセティにリドルフは思わず目を細めずにはいられなかった。それから、何かを決めたかのように小さく一つため息をついてみせたが、それは決して深刻なものではなかった。

「分かりました。あなたの友人はあなたが守るのですよ」

その言葉に飛び上がって喜んだセティは、満面の笑みを向けてハルに伝えてくると言い残し、部屋を飛び出していった。リドルフは表情にこそ苦笑を浮かべて、けれど内心ではひどく安堵して、その背中を見送った。

セティからリドルフの了承を得たことを聞いたハルは、シノレを訪ねていた。

昨晚から不眠で執務室にこもり、片腕であるランドらと今回の襲撃について、方々に連絡をとり、調査と事後処理に追われていたシノレは、いかにも申し訳なさそうに訪ねてきた従弟を煙たがるようなようすは微塵もなく、むしろ歓迎した。

「お体の具合はよろしいのか？」

「ご心配をおかけいたしました。おかげさまで、もうすっかり良くなりました」

さらにハルは昨日の出来事を、同行したセティから聞いたことを伝え、「シノレ公の御身に大事がなくてなによりでございました」と、付け加える。

「とんだことに巻き込んでしまい、セティ殿には大変申し訳ないことをした。リドルフ殿のおかげで、傷が消えたから良かったようなものの、あの顔に傷跡を残すようなことになっては、私はすべてのナデール国民から恨まれることになっただろう」

冗談っぽく笑ってみせたものの、それはシノレの本心に違いなかった。一方、セティが傷を受けたことを知らされていなかったハルは、何のことやら分からず不思議そうにシノレを見るばかりである。「襲われた際、セティ殿は將軍とともに襲撃者を撃退して下さった

のです。そのとき、あの美しいお顔に傷を受けられてしまったのですが、リドルフ殿が不思議な力できれいに消して下さったのでございます」

丁寧に説明するランドの言葉はハルを少なからず驚かせた。夜明けまでセテイと二人で話していたというのに、彼はそんなことを一言も言わなかったのだ。

「倒れられた殿下を気遣って、きつと、セテイ殿もリドルフ殿も知らせなかったのでしょうか」

顔を曇らせて視線を落としてしまったハルを慰めるように、ランドはそう付け加えた。

セテイの顔を知るものなら大抵がそうであるように、ハルもまた例外ではなかった。あの月の女神フェアレのように美しい顔に傷がつくことなど、想像しただけで嫌悪感が走る。

しかしそれ以上に、見返りを求めず、自分たちを手助けしてくれ、さらには、友人になろうと欲してくれたあの人が血を流したことにハルはショックを受けていた。もしかすると、自分は大変なことにあの人を巻き込もうとしているのではないか。

「ハル殿？ なにかお話しがあったのではないのか？」

ハルは一つ息を吐き出して、両の手を握りしめた。明け方、中庭でセテイと交わした契約という名の約束を思い出していた。

ランドが席を外したのち、ハルは静かに、けれどはつきりとした声で、叔父であり領主であるロガンから直接話しを聞くために、セテイらとトウルファに向うこと、そして、体が完全でないカイの身をここで預かって欲しいという旨を伝えた。

いつもは控えめで、悪い表現をすれば気弱にさえ見える王子の顔が、どこか活き活きとしているのにシノレは驚き、そして喜んだが、実際に浮かべたのは複雑な表情であった。

「カイのことはもちろん引き受けるつもりだが、この先も、セテイ殿とリドルフ殿と四人で行動されるおつもりか？ かりに叔父上の話しが真実だとすれば、メイラとセテイ殿の腕をもつてしても、た

「つた四人では到底防ぎきれまい」

「昨日の襲撃の首謀者をシノレは未だ掴んでいなかったが、領内で二十名ほどの人数に襲われたのだ。」

「さすがにこの城内まで手が回ることはないと思うが、不審者が紛れ込んでおらぬか、今調べているところではある。もう少し、ここに滞在されてようすをうかがってはどうかだろう」

「これ以上、ご迷惑をおかけするわけにも参りません。もしも、私の命を欲しているのが、王太子殿下だとすれば、長くラガシユに滞在すれば、従兄上のお立場を悪くすることになります」

「これは、あらかじめセテイと考えて用意した返答であった。セテイもまた、シノレ・アンヴァーン公に接して、彼に対する疑念は薄いと読んでいたが、ラガシユまでの道中彼の紋章をつけた一団に襲撃を受けている以上、完全に警戒を解くことは現段階では危険であると判断したのだ。」

「では逆に、セテイ殿とリドルフ殿は信頼してもよい人物なのか？」

「ハル殿はお二人の素性をご存知なのか？」

「それは」

「ハルは言葉を失った。」

「彼らが有害な存在でないという、確たるものがあるわけではなかった。シノレの言うとおり、ハルは彼らの素性など一片も知らない。リドルフは大地神アナリに仕えていると公言しているが、アナリ神殿の神官にはあるまじき身の丈ほどもある大剣を背負っているし、セテイにいたっては「セテイ・コヴェ」という名しか知らない。けれど、淡紫色と空色の瞳の奥に、不誠実なものが棲んでいるとは思えないのだ。はじめて彼らに会ったときから今日まで、その思いは変わらない。理性では測りきれないところで、彼らは大丈夫なのだ、そう言っている。」

「もしも、裏切られるようなことがあったとしても、後悔はありません。むしろ、兄上に命を差し上げるくらいならば、セテイの剣に胸を一突きされたほうが、私にはよほど清清しいように思えるので

す。この国の未来のためにも「



穏やかな声音のなかに、どこか凜としたものを秘めた、いかにもハル・アレン王子らしい考えに、シノレは肘掛けに肘をついたまま口許をほころばせた。

「気分を害されたなら許されよ。私も、セテイ殿やリドルフ殿に、いかがわしい思惑があるなど、ゆめゆめ思えぬのです。ただ、ハル殿はこのガイゼスの第二王子にあらせられる。行動を決めるのに、慎重すぎるということはない」

「それでは」

「丈夫で良い馬を、四頭用意しましょう。トゥルファは、徒歩では遠すぎる」

喜色を滲ませて、謝辞を述べたハルに釘を刺すようにシノレは声を落として言葉を続けた。

「十分に用心なさいませ。ともかく、ハル殿や私が真剣に命を狙われているということは、事実のようなのだ。先の襲撃について調査をしているうちに、興味深いことも分かってきている」

「興味深いこと、でございますか？」

「ナディールやアドリンドからかなりの人数の傭兵が入ってきているようです。これは、我が国の現状をふまえれば、見過ごすわけにはいかぬでしょう」

傭兵というのは鼻が利く。戦争の臭いをかぎつけて、どこからともなく集まるのだ。しかし、現在ガイゼスが戦時とは程遠いことを、巡検使であるハルはよく知っている。北に国境を接するナディールとは十六年前の停戦条約が今のところはまだ効力を失っておらず、東に国境を接するアドリンドとの関係は友好といっても差し支えない。地域によって、多少の差はあるものの、国民には暴発するほどの不満が鬱積しているようすも見られない。水面下の動きはハルもシノレも掴みきれていないが、表向き、ガイゼスは平穏なのだ。

「先の襲撃の一団の統率力は弱く、技量にもばらつきが目立った。今回の件に関して実行役を、彼らが担っていると考えるのは自然です」

「それと、つい数日前に、ナディールの神官が多数入国してきているようです」

「ナディールの神官…」

ハルの脳裏に浮かんだのは、いつも穏やかな表情を絶やさぬ、切れ長の空色の瞳を持つ背の高い青年の姿であった。シノレはそれを見透かしたかのように、言葉を続けた。

「ナディールの神官は、リドルフ殿のようなお人ばかりではありません。今回の件に関与しているか、どうかは分からぬが」

出発は、明朝の夜明けと決めた。

一行はハル・アレン王子にあてがわれている客間に集まり、彼がシノレ・アンヴァーン公よりもたらされた情報を共有し、それを元に改めて考察することになった。

王子の話を一通り聞き終えたあと、彼らは無言であった。

特別に有益な情報があったわけでも、衝撃的な情報があったわけでもない。油断がならない状況であることを再認識しただけである。ただ、一点を除いて。

「ナディールの神官が多数入国していることは、どういう関係が…？」

答えを求めるように、メイラは剃髪したナディール人の自称神官を見た。長いすのうえで胡坐をかき、腕組みをした行儀の悪い白皙の美青年の視線も受けて、リドルフは慎重に言葉を選びながら話しはじめた。

「どの神殿の神官かにもよるでしょうね。ナディールの神官は、どの神に仕えているかによって使う法術の性質が大きく異なりますから」

「どのように、異なるのですか？」

屈託のない王子の問いに、リドルフは遠慮がちにメイラを見る。

視線を逸らすかと思われた老女は苦虫を噛み潰したような顔で、静かに言った。

「殿下の御身に關わるやもしれん話した。説明してもらおう」

整った顔をくしゃくしゃにして吹き出したセテイの頭を、メイラがばかりと拳骨で殴る。その力が思いの他強かったようで、殴られた本人は目に涙すら滲ませて抗議したが、メイラは腕を組んだままそつばを向き、相手にしない。そのようすにハルとリドルフも頬を緩ませた。

いくぶん緊張感の薄れた雰囲気の中、リドルフは穏やかな口調で説明をはじめた。

ナデイルでは、アナリ大地、シルヴァアデン水、ファイース火、アデン風の神がおり、その神々の上に全知全能といわれ、神々を統率する神である、オリス空の神がいること。  
アナリ大地神とシルヴァ水の女神は、生命を育む神とされ、その二神に仕える神官や巫女は国内で主に医師の役割を担っていること。アデン火神に仕える神官は主に軍隊の役目を担っており、ファイース風神に仕える神官がそれを補佐していること。

そして、オリス空神は特別な存在であり、運命を司るといわれており、神官の数も他の神を崇める神殿に比べると、圧倒的に少なく、国内では主に祭司として役割を担っているということ…。

「法力を持っている人間は、どの神に仕えることができるのか、その能力を見極めます」

「どうやって?」

「神の声を聞くのです。私にはつきりと聞こえるのは、アナリ大地神です。それと、微かにアデン火神の声が聞こえます。けれど、私にアデンの僕である、ラマン火の精霊を御するほどの力はありません。私が御することができますのはアナリの僕である、ケイス土の精霊、ラムカイ樹木の精霊、ネヒネ花の精霊などの精霊だけです」

「そういえば……セテイ殿は、法術は使わないのですか?」

「殿” はいらない」

苦笑しながら訂正されて、ハルは思わず口を覆って、それから言

い直した。

「セテイは、法術は使わないのですか？」

「私は、法術は使わないよ」

これまで行動を共にしてきたが、彼が披露したのは、惚れ惚れとするほど優美で苛烈な剣舞だけで、術者の片鱗を見せたことはない。薄々ハルとメイラはそれに気がついていたが、改めてセテイの口から聞くと、多少の違和感を覚えずにはいらなかった。なにしろ、白い肌と淡色の髪と目を持つ青年の外見は、造形こそ浮世離れしているものの、生粋のナディール人のそれであるには違いない。

「大地神アナリや水の女神シルヴァの神官ならば、彼らは医師も兼ねているのでもしかすると、国王陛下の治療のために内密に招かれたのかもしれない」

「国王陛下の治療に？」

「今度こそ、メイラは眉を跳ね上げた。」

「為す術を見失ったとき、何か見えないものにすがりたくなるのでしょうか。人というのは案外ともろいものなのです。それは、きっと国家も人種も関係ありません」

「私は神など信じない」

「私もそうですよ」

間髪いれずに吐き捨てられたメイラの言葉に重ねられた、穏やかな同意に、メイラとハルが凍てついた。

「私も、ほんとうは、神など信じていないのです」

リドルフの口調は、平素となに一つ変わらなかった。そして、それが一層ガイゼス人たちに言葉を失わせた。

「否が応にも、声が聞こえますから。その存在を否定することはできません」

澄んだ空色の瞳に込められた感情を、彼の倍以上の年輪を重ねているメイラが読み取れないのだから、それをハルがしようとするのはほとんど不可能に等しい。いささか居心地の悪い空気を払い、会話の方向を修正したのはセテイであった。

「では入国してきている神官が、<sup>アテン</sup>火神や<sup>フィース</sup>風神のだとすると？」

「目的を特定するのが、難しいですね。特に、<sup>アテン</sup>火神の神官はガイゼスでいうと、軍の兵士と同じ意味合いを持ちます。ハル殿が命を狙われていることと関係があるのか、はたまた両国間の駆け引きの一つなのか、それとも別の目的があるのか……」

リドルフが自分に送った視線の意味を、セティはおよそ正確に理解していた。

「いずれにせよ、見過ごせない重要な情報であることには変わりないでしょう」

夕方、シノレはハル・アレン王子とその一行のために晚餐を供した。

晚餐にはハル、セティ、メイラ、リドルフの他、ランドらも同席し、楽士や踊り子なども招かれ、贅を尽くした料理と酒が振舞われた。

ハル・アレン王子ら一行の前途は明るいと、到底言えぬ。当人はもちろん、同席したすべての人間がそれを認識していた。

しかし、意外なことにハル・アレン王子は明るく、中でも異国の白晳の美青年と楽しげに談笑している姿が、同席者たちの心を和ませた。それは、荒地に咲く花のようであった。

明け方。鉛色の雲が垂れ込めた空のしたに集まったのは、たった四名のハル・アレン王子ら一行と、見送りにやってきたシノレ・アソヴァーン公と、ランド、そして王子が信頼を寄せる近衛兵長であり、ラガシユで傷が癒えるまで静養することとなったカイの三名だけである。

旅支度をととのえて、大剣を背負って姿を現したリドルフに、シノレとランドは例に違わず驚き、何ともいえぬ表情を浮かべる。それに対してリドルフはいつもと同じ言葉を穏やかな声で口にしただけである。

ハルはわざわざ見送りのために、城壁の門近くまで出向いてくれた彼らと和やかに談笑していたが、ふとした拍子に目を細めて、遙

か彼方の地平線を追うように遠くをみるその表情はいささか固い。それでも誰かに声をかけられれば、微笑して律義に謝辞を述べる。

「やあ、いい朝だな」

場違いなほどにのんびりとした声を響かせたのは、有明の空のような幻想的な瞳をもつ、美貌の青年である。

ハルは、その声に相応しく微塵も緊張感のない表情を浮かべた。セティを仰ぎ見て、破顔した。今にもはちきれんばかりに雨雲が重く垂れ込めた空は、ひどく不吉なもののように思えてならなかったが、セティが言うならばきつとそうなのだろうと、素直にそう思えたのだ。

「フィース風神の加護を！」

旅人へのはなむけの言葉に送られて、一同は勢いよく色彩の乏しい世界へと駆け出した。

白い手をかざして、セティは丘陵から乾燥した大地を見渡した。神秘的な色彩の瞳に映るのは、抜けるように高く澄んだエジプシヤンブルーの空と、わずかな灌木、そして見渡す限りの、荒涼とした黄土色の大地。大地が色彩に乏しい分だけ、空の色がよく映えるのだ。

ラガシユを出て、四日が経っていた。

シノレが彼らのために用意した馬は、それぞれが名馬と評されてもおかしくはない良馬であった。セティとリドルフにあてがわれた馬は大変穏やかな気性で、初心者である乗り手をさりげなく気遣うようにして駆り、メイラにあてがわれた馬は気性はやや荒いものの駿馬で、十七年前の「ヤルカドの会戦」では騎兵隊として戦場に出たという彼女はそれを巧みに操っていたし、ハルは名馬のおかげ、というよりは乗馬が非常に上手かった。

不躰<sup>ぶしつけ</sup>なほどに率直に驚きを口にしたセティの頭を例によってメイラがばかりと殴り、リドルフが苦笑する。

温和でやさしげで、ともすれば頼りなく見えるハルではあるが、彼は巡検使であり、このガイゼスの王子でもあるのだ。乗馬はたしなみの一つとして、当然身についている。

当初の予定どおり、野営を避けて道中の村や町で宿を取りながら、順当に進んできた。そのために、日中の酷暑の時間帯も馬を走らせただこともあった。野営を避けるのは、むしろ襲撃に備えるためである。広大な大地で身を隠すところもなく、大人数に囲まれるようなことが起これば、いかにセティとメイラが剣の達人であつてもあまりにも形勢が不利である。しかし、ラガシユ近郊でシノレ・アンヴァーン公を狙った襲撃の規模を考えれば、有り得ないことでもなかった。

この日、彼らは太陽が高いあいだ、岩陰で暑さをしのぐべく、休

憩を取っていた。先を急ぐのにこしたことはないが、次に宿を取る予定の町は目前であるし、これまでの強行旅程は彼らの体力を多少なりとも消耗させていた。このまま何事も起こらずにトウルファに到達できると考えるのは楽観というものであり、来るべきときに備えて気力と体力を充足させる必要があると彼らは考えたのだ。

「ハル、そろそろやるうか」

「はい」

暑さが和らいだのを見計らって、昼寝と食事で気力と体力とを充足させたハルとセティは、鞘を抜き払った各々の剣を手にとった。ラガシユを出て以来、日課となつている剣の稽古の時間である。

ハルの剣は一般的な中剣よりも一回り小さく、両刃であるが刃も細い。一際目を引くのは、柄にはめこまれた上等な紫水晶である。セティの瞳にも似たそれを引立たせるように厭味ない程度に細かい装飾が施され、一目で保持者の身分の高さをうかがわせる。いわゆる「飾りの剣」の意味合いが強いそれを、実戦で使用できるかどうか相談されたとき、ハルの美しい師は手渡された見事な剣を一瞥して、「ふむ」と小さく頷いた。それから、おもむろに地面にあつた小石をつまみあげて放ると、剣を一閃させた。

「切れ味は悪くないし、装飾も邪魔というほどでもない。十分使えるぞ」

眼前で起こったことを上手く飲み込めず、口を開けたままのハルをよそに、二つに割れて地面に落ちた小石をセティは見直すことすらしなかった。

剣を教えるといったはずなのに、この四日間でセティがハルにさせていることは、ただ鞘を払った剣で対峙することだけだった。ただ、向かい合う。それだけのはずなのに、ハルには長い時間セティと向き合っていることがいつもできない。

セティの剣は、このあたりではあまり目にしないものだった。刀身はハルのものと同じで一般的なものよりも短く、柄にはこの周辺では珍重される月長石がはめこまれている。そして、なによりも珍



しいのは、刃が片刃であることだ。柄に目立つた装飾は月長石以外にはないが、細めの刃の幅といい、美しい曲線を描く切っ先といい、彼の剣は飾り気こそさほどないが、どこか気圧されるような独特の雰囲気があるのだ。とはいっても、むろん、ハルが長い時間向かいあつていられない原因は、それが大半ではない。

しっかりと両手で柄を握り締めて正眼に構えるハルとは裏腹に、片手で無造作に柄を握っていたセティの剣の切っ先が微妙に上向いた。

刹那、じつとりと変な汗が滲んでくるのをハルは感じる。だんだん呼吸が苦しくなつて、肩で息をする。それでも続けていると、耳鳴りのようなものがしてくる。

「今日はここまでにしよう」

笑つて、セティは剣を鞘にしまう。返事をするよりも早く、ハルは柄を握つたまま力なくその場に座り込んでしまう。これが、四日間続いているのだ。

「昨日よりも長かったですね」

少し離れた場所で二人を見守っていたリドルフは、整理していた薬草をしまいながら、同じように二人のようすを険しい表情で見つめていたメイラに向かって言った。

「こんなときにあのような稽古など、意味がない」

メイラの視線の先では、座り込んでしまったハルの傍らに屈み込んだセティが、ハルの肩に手を置いて笑っている。

「ラガシュを出てからのハル殿は、ほんとうに良い表情をされていると思います。私には剣のことはよく分かりませんが、ご本人が楽しまれているのなら、それはそれで良いように思えてしまいますが」

「まあ……な」

ハルが活き活きとしているのは、これまでずっと側で仕えてきたメイラが一番よく分かっている。ラガシュでシノレから、自分の命を狙っているのが兄である王太子殿下である疑いが強いことを聞い

たときに、ハルが受けたショックは量りしれない。メイラはこのままハルが死んでしまうのではないかと、危惧を覚えたほどだ。

ハル・アレン王子は誰かに求められたことに関しては、大変快く応じる反面、自分でなにかを求めるということを、ほとんどしない少年だった。だからこそ、メイラは目を覚ました彼がどういう結論を出すのか、気が気ではなかった。

あの夜、少し夜風に当たって来るといって部屋を出た小柄な王子の背中には、絵に描いたような憂鬱が確かに乗っていた。それが、夜明けとともに戻ってきた王子の背にはそれがなく、瞳には見たことがないような快活な光が宿っていた。話しを聴くうちに、それを与えた人物がセティ・コヴェと名乗る美しい異国の青年であることを知り、なぜかメイラはやけにしっくりと合点がいったものだ。

談笑しながらリドルフとメイラの元へ戻ってきたセティとハルも外套をはおり、水や食料を詰め込んだ荷物を背負った。太陽は大分傾き、移動に適した時間帯が再び訪れていた。

馬をつないでおいた灌木の方へ移動しはじめた一行の最後尾で、ふとリドルフが足をとめた。眉を寄せ、怪訝な顔で後ろを振り返る。

「火精霊……？」

リドルフが漏らした低い呟きは風に運ばれて、ハルと並んで先頭を歩いていたセティの耳に届けた。セティが振り向く。

「セティ！」

振り向いたセティの顔が凍りつくのと、リドルフが声を上げたのはほとんど同時だった。

次の瞬間の二人の行動は、実に迅速であった。

セティが傍らのハルの頭を右手で押さえ、左手でメイラを抱え、自分の体を覆いかぶせるようにして地に伏せる。

セティの身体の下で、メイラとハルが聞いたのは珍しく切迫したリドルフの言葉だった。

もしも二人が法術に造詣が深ければ、リドルフの口から鋭く発せられた聞き慣れないことばが「大地神アナリよ我らを守りたまえ」

という意味であることが分かったかもしれない。しかし、セテイの腕の下でそれを聞いたガイゼス人には、当然というべきか、単なる無秩序な音の羅列のようにしか聞こえなかった。

その刹那、熱気の塊のようなものが地面に伏した体の上を抜けていくのを、セテイの腕の下にいたハルは感じた。

阿吽の呼吸というのはまさにこのことを言うのだろう。

リドルフがふたたび青年の名を呼び終えるよりも早く、セテイは左右のハルとメイラの腕をつかんで跳ね起き、そのままリドルフが急遽地面に描いたいびつな円のなかにハルとメイラを先に押し込んで、最後に自分も入った。

状況が全く分からず狼狽する二人に向かってセテイは、必要最低限の情報だけを与えた。

「誰かが法術を使ってきている。リドに任せれば、大丈夫だ」

実際、このときのセテイは、ある程度の推察を交えたうえでもう一步踏み込んだ段階まで状況を把握していた。しかし、混乱を避けるためには伝えるものはそれで十分だったし、それがすべての真実でもあった。

一方、リドルフは半跏趺坐はつかんざいの姿勢のまま半眼になり、低い声でマントラを唱えていた。

それを耳で確認しながらセテイが、険しい表情で虚空に視線を泳がせる。ハルもまた、どこか恍惚としたような顔で上空を見上げている。メイラだけが、いかめしい顔でじつと地面をにらみ付けていた。

「熱……」

どれほどの時間がたっただろうか。不意にメイラが低い声で呟いた。酷暑の時間は過ぎたはずなのに、深く皺の刻まれた額には、汗が滲んでいる。

「火精霊ラマンが取り囲んでいます。結果は完成しているので、入って行くことはありませんが、熱までは私の力では遮断できないのです」

リドルフが息を吐き、振り向いた。その表情は平時に戻っていた。

「あまり動かない方がいいぞ。結界から出たとたん、火精靈ラズンに焼かれる」

額に滲む汗を拭おうとしたメイラは、セテイのことはに打たれたように姿勢を正し、気味悪そうに周囲を見回して肩をすくめた。

彼らの会話にも参加せず、ぼんやりとまだ上空を眺めていたハルは、前触れなく頬に触れてきたた温かいものに驚いた。

「セ、セテイ……！」

目の前を見ると、正視するのがはばかれるほどに美しい造詣があり、長い睫毛に覆われた幻想的な色の瞳がじつと向けられていた。

「じつとしているよ」

セテイは指先で先ほど地面に伏したときについたらしい、頬についた土を払っていた。

「少し、擦れてしまったな」

地面にこすれて少し赤くなった部分を覗き込むように、さらにセテイが近付いた。息がかかるほどの、距離だ。一瞬にして頬を紅く染めて座ったまま後退しようとしたハルを、後ろにいたリドルフがやんわりと抱きとめた。

「まだ動くと危ないですからね」

振り向いて、リドルフに早口に、けれど律義に詫びてハルは俯いでしまう。

「何を照れているんだ。男同士だろう」

「同性でも、至近距離であなたの顔を見るのは照れくさいものですよ」

ね、と、不服そうなセテイにとりなすようにリドルフが穏やかに笑うと、ハルも慌てて頷いた。

状況自体はきわめて憂慮すべきものであったが、リドルフの法術によってさしあたり生命の危機から逃れた一行は、こんな調子で特に緊張感のある会話を交わすわけでもなく、見渡す限りの荒地の真ん中に身を寄せあい、額に汗を滲ませながらそのまま一刻ほどの時間をやり過ごした。

「火精靈ラマンが去ったようです。もう大丈夫でしょう」

周囲をひとつ見渡してリドルフは、術を解き、それを証明するよ  
うに立ち上がった。それに続いてすぐさまセティが立上がり、長  
い手足を存分に伸ばす。それにハルが続いた。三人が立ち上がって  
も、メイラだけが立ち上がろうとしない。

「メイラ、もう終わったようですよ」

ハルが屈み込んで、肩に手を置くとようやくメイラは立ち上がっ  
た。

周囲を見渡していたセティが何かに気付いて駆け出した。それに、  
リドルフ、ハルとメイラが続く。

「馬が……」

目の前では、木に繋いでいたシノレより賜わった、四頭の名馬が  
見るも無惨な姿になり果てていた。肉が焦げた強烈な臭いが鼻をつ  
く。

「迂闊でしたね。襲撃者の本来の目的はこちらだったのかもしれま  
せん」

呆然と立ち尽くす三人をよそに、リドルフが冷静に呟いた。

不幸な四頭の馬は丁寧に弔われた。

その作業に一番意欲的であったのはハルで、身の安全のために一刻も早くその場を離れようというセティとメイラの意見を、珍しく頑なに拒否して、リドルフの協力のもと土葬した。

次の町までは馬の足ならば目前であったが、徒歩ともなれば歩きどおしても夜明けまでかかる。

不幸中の幸いというべきは、日中十分な休息を取っていたことと、食料と水が無事だったことである。有効な移動手段を失った精神的な打撃は小さくなかったが、体力が充実し、飲食が保証されているかぎり、人はそこまで悲観的にはならないものである。

一行は地道に目的地に向けて歩をすすめながら、先の襲撃について各々の意見を交換していた。

「まさか、法術での襲撃を企てるとは。ナディールから、術者を雇い入れたのでしょうか」

これが、ハルの発言であったからこそ、メイラは声に出しては反論しなかった。その代わり、苦虫を噛み潰したような顔で沈黙する。「そういえば、ナディールからも傭兵が入ってきていると、シノレ様が言っていたな」

剣や槍などの武器を使わぬナディールにも、むしろ「傭兵」という肩書きをもつものは存在する。この大陸で法力を持ち、術を使える者は白い肌と色素の薄い髪と目を持つ、ナディール人以外にはほとんどいない。それ故、元は神官であったり、国に仕えていた者でも傭兵という道を選ぶものもいる。絶対数が少ないがために、例外をのぞき、どここの国でも大抵は歓迎されるのだ。

「シノレ公の仰っていたことは、ナディールに逗留していた他国の傭兵、という意味だろう。法術を使うための傭兵を雇い入れるなど、

ありえん」

むろん、例外とはこのガイゼス王国に他ならない。両国の歴史を踏まえればそれは必然ともいえる。

「私も、ナディール人の傭兵ではないと思います。あれは、明らかに火神の神官レベルの術者でしょう」

ナディールという国家も暗愚ではない。高度な術者にはそれに見合った社会的地位と報酬を与え、国外への流出を防いでいる。その政策は大方成功しており、傭兵という立場に身を落としている術者は一般的に本国にいる術者に比べれば、程度が低いのだ。不思議そうな顔のメイラとハルに、少し微笑んでリドルフは言葉を付け加えた。

「術者の姿が見えなかったのですよ」

「術者の…姿が？」

頷いて、リドルフは説明をはじめた。

「法術というものは、それぞれの神の僕である精霊を御することによって成り立ちます。力が強ければ強いほど、多くの精霊を広範囲で自在に操ることが可能です。このあたりは、見通しがよく、身を隠すところが極端に少ない。けれど、術が解けた直後、少なくとも見える範囲に術者の姿はなかったのです」

無残な姿に変わり果てた馬達を一番早くに見つけたのは、周囲に注意を払っていたセティであった。彼の行動にはもしかするとそんな意味も含まれていたのかもしれない。

「では、先刻殿下を襲ったのがナディール人の神官とやらだとすると、奴等の目的はなんだというのだ。殿下を害する利がどこにあるのだ」

国境の狭間の町、アイデンからラガシュに向かう途中も、彼らは似たような会話を交わしていた。そして、そのときと同じく、メイラの問いに答えられるものはなかった。

「もしも、私の命を狙っているのが兄上だとしても、ナディールから術者を雇い入れるほど切迫しているとは、やはり思えません」

「そのとおりです。王太子殿下は、たとえ私欲のためとはいえども、ガイゼス人としての誇りを失うようなことはないでしょう」

ハルはメイラを見て、一つ頷いた。

「しかし、私ごときを葬ったところで、外交になんらかの影響があるとも思えません。先の襲撃はほんとうに私を狙ったものだったのでしょうか」

セティが、転がっていた小石を蹴る。小石は乾燥した大地のうえを、勢いよく転がっていった。リドルフが、セティに視線を送ったが、淡紫色の瞳はこちらを向かなかった。

「なにかを判断するには、情報が足りなすぎますね。とにかく、トウルファという町に無事に辿り着くことが先決なのでしょう」

リドルフの言葉こそが、现阶段では至極建設的で現実的であった。その後も彼らは、足だけは動かしながら活発に会話を交わした。

話しながら歩くのは、余分に体力を消耗することにつながるから、徒歩の旅人たちは普通あまりそれをしない。先の襲撃では、わざわざ彼らの機動力を削いだぐらいであるから、次の町に着くまでに再度なにかがあると考えるのが当然であり、体力は温存しておいた方がいい。しかし、今、彼らにとって重要なのは体力を温存することよりも、精神的衝撃を回復させることであった。法術そのものが身近な存在であったナディール育ちのセティとリドルフは別として、ハルとメイラに関しては、得体の知れぬものの攻撃、という点においては、やはり衝撃が大きいのだ。

「精霊というのは、どういう存在なのですか？」

「簡単にいうと、万物に宿っている霊のようなものです。彼らに人格や意思はなく、統率する各々の神の意志や、法力を持つ術者によって動きます」

法術というものを積極的に理解しようとする姿勢は、もはやハルだけのものではなかった。嫌悪感を露骨に示していたメイラも、リドルフに何度か助けられたせいか、積極的に質問をすることはしないものの、二人のやり取りには真摯に耳を傾けている。



「精霊は、普段は光の玉のような状態で存在しています。これが、術者に操られて動いているときは、ほとんど実体化したように見えることがあります。いずれも、法力がある人間ではないと見えないのですが」

「実体化、ですか？」

「私の目には、先ほど無数の火の玉が飛んできたように見えました」

「それは、法力がある人間にしか見えないということですか？」

リドルフは、頷く。

「強い法力がある術者は、法力がない人間にも見えるように、実際に精霊を実体化させて見えるようにすることもできます。けれど、通常は法力がある人間以外には精霊は見えないのです」

一行は、それから払曉ふじきやうまでただの一度も休憩をとらずに歩き続けた。

そして、第二撃はあまりにも意表をついた形で訪れた。

目的の町まで辿り着いた彼らを迎えたのは、日常の活気とは別種のものに支配されたどこか騒然とした町の姿であった。

町の入り口で足を止め、一同は周囲を見渡した。日の出とともに町が動きはじめるのは、この辺りでは当然のことではあるが、それにしても人が出すぎているし、どの顔も一様に険しく、余裕がない。「もし」

メイラが慌ただしく街道を行き来する若い男の一人に声をかけた。呼び止められた男はあからさまに迷惑そうな顔を浮かべたが、声をかけてきたのが老女であることに気がつき、面倒そうながら答えを返してくれた。

「町にある井戸が、今朝、急に枯れちまったんだ」

男は言い置くとそのまま走り去った。一同が、顔を見合わせる。

「この町には火精霊ラマンが異常に集まっています」

リドルフは銀色の眉を顰め、声を落とした。

「術がかけられているのでしょうか」

「そんな……。町の人々はなにも関係ないではありませんか」

ハルの唇は色を失い、かすかに震えていた。

「井戸を枯らすなど、そんなことができるのか」

「術を使っているのが、並みの術者ではないという証拠です」

「だったら、早くその術とやらを何とかしてくれ」

「できません」

メイラは眉を跳ね上げて手を伸ばし、リドルフの胸倉を掴んだ。

「私の力ではできないのです」

リドルフも、セテイも水源が失われるということがどうということ

なのか、理解しているつもりである。しかし、それは決して実感が伴っているものではなかった。

日中、焼け付くような暑さに支配される土地にとって、井戸が枯れるということがどれほどの深刻な事態であるかは、水と緑に恵まれた国土に生まれ育ったナディール人の想像を遙かに絶するのだ。水源が永遠に失われれば、乾燥した大地に囲まれた町が辿るのは滅びの道以外にない。

「火精霊ラマンを完全に打ち払うには、対極である水女神シルヴァの僕である精霊、とくにこの場合、泉の精霊イネヌを使役しなければなりません。私には、その類の力がないのです」

胸倉を掴むメイラの手にそっと手を重ね、リドルフはあくまでも穏やかだ。

「完全に井戸が枯れたわけじゃない。一時的に抑えられているだけだ。術さえ解ければすぐに元のようになる。とにかく」

セティは周囲を見回して肩をすくめた。

「どこか、人目につきにくいところで対策を練ろう」

先ほどからこちらを盗み見ては何かを囁き合う人の姿がかなり見られる。セティとリドルフにしてみれば、それは決して珍しいことではなかった。何せ、セティは稀代の美青年なのだ。しかし、今、彼らを感じているのは決して友好的ではない感情であった。セティの美貌、というよりは、彼の金色の髪と白い肌と、それ以上に、一見ただで僧だとわかるリドルフのいでたちが、そのいかにもナディール人らしい二人の容貌が、ひどく目を引いているらしかった。非常事態に町中が殺気立っている。ただでさえ余所者には非好意的な感情が先走るであろう。さらにそれが金色の髪と白い肌の持ち主であれば、行き場のない感情のはけ口にされかねない。リドルフは、セティに外套のフードを被せ、まるでそれらを遮るかのようにしてセティの前に立っていた。

「とりあえず、宿に入りましょう。こちらです」

ハルはやはり感受性が強い少年だった。唐突なセティの発言を訝

しがるメイラを促して、先に立って移動をはじめ。異国の友人が感じている居心地の悪さとその理由を、彼の一言からかなり正確に把握していたのだ。

町に一軒しかない宿は、ほとんど無人に等しかった。宿泊の手続きを取る際も、主人は上の空で好きにしてくれ、と言わんばかりである。

「私たちがこの町に立ち寄ったからですか？ 私たちが立ち去れば、町の人々は元の暮らしに戻れるのですか？」

外套を脱ぐよりもはやく、たまりかねたかのようにハルが言った。「殿下、この町で水を調達せずに次の町に辿り着くのは難しゅうございます」

「たとえ次の町に着けたとしても、そこで同じことが起こればそれまでだ」

セテイの言うとおりであった。トゥルファまではあと二つ、村と町を経由しなければならぬのだ。

「術を解くのが無理ならば、術者を探し出して解かせるか、術者を葬るしかない」

淡紫色の瞳はじつと一点を見据えていた。

四人は二手に分かれ、疲労した身体に鞭打つてすぐさま行動を開始した。

ハルとメイラは宿を出て、町の様子を伺いながら、不審者の情報がないか調べ、ナディール人の二人は町人を下手に刺激しないよう、人目を避けて室内からリドルフの法術によって術者の搜索と捕捉を試みることにした。

「そんなに広範囲を調べるのか？」

二人きりになった部屋で、セテイは腕組みをして壁にもたれた。視線の先ではリドルフが、懐から取り出した粉末状の薬草を指先につけて、ひたむきに床へ文様を描いている。

「一刻も早く、術者の正体をつきとめて目的を把握する必要があります」

リドルフが描いているのは神霊文字サイラットと呼ばれるものだ。知識のあるものなら、それを見るだけでどのような類の法術を、どれほどの規模で使おうとしているのか分かる。

「狙いがガイゼス人のハル様だとすれば、仕掛けがいささか大仰すぎる気がします」

セティは紅唇こうしんに皮肉気な笑みを刻んだ。

「ガイゼス人を殺めるなら見習い（クラム）で十分、か」

答えずにリドルフは文様を描き続けた。まだ途中のそれは、すでにかなり複雑な様相を呈ていしていた。セティは壁にもたれたまま、逆三角形の顎に指をかけてしばしその作業を見つめる。今更ながら、これほど複雑な術式を迷うこともなくすらすらと描き続けるリドルフに、感嘆の意を覚えた。無論、神霊文字サイラットを描くだけで術は完成せず、それに伴った法力がなければ発動することはできないのだが、リドルフには当然それだけの力もある。彼は本当はこんなところで自分と二人で旅をするような人物ではなく、故国にとっては、まさに才能と勤勉さをあわせ持つ逸材であるのだ。ぼんやりとそんなことを考えていると、不意にある考えがセティの脳内に浮かんだ。

「私か」

リドルフが手を止めた。一瞬の沈黙でセティは全てを悟ったような気がした。リドルフもその可能性を考えていたに違いない。だからこそ、これだけの術を使って術者の正体を突き止めようとしているのだ。しかし、実際に彼が口にしたことは違った。

「あなたを、崇あがめることこそあれど、疎うとむことなど誰が考えつくでしよう」

「弑逆しやくとて、世では珍しいことではない。現に、ハルだって命を兄君に狙ねらわれている」

「……全知全能の神オリスに牙を剥むくまでに、神官クラインたちは俗気に塗れたのでしょか」

セティは美しい顔に自嘲的な笑みを浮かべて、沈黙した。

「いずれにしても、まずは術者の正体を突き止めることですね」

リドルフはまた手を動かさしはじめた。

ハルとメイラは町にある三つの井戸を実際に回り、そしてしばし呆然とした。昨晚まで清水で満たされていたという井戸の底は乾くどころか、虚しくひび割れていた。聞いてはいたものの、実際に目の当たりにすると事態の深刻さが急激に実感を伴って襲ってきたのである。

それから、町人を掴まえて不審者を見ていないか尋ねて回ったものの動転している者が多く、うまく問答にならない。それどころか日が高くなり、気温の上昇に比例して人々の苛立ちと焦燥は募り、空気はひどく重たく、刺々しいものに変化しはじめていた。

ハルは改めて、セテイとリドルフを宿に残してきたことに安堵した。

この有様ではナディール人というだけで吊し上げにあいかなないもつとも、黙ってそうされる二人ではないだろうが、自分たちを取り囲む状況を考えれば、無用な摩擦は避けた方がいい。それこそが刺客たちの思う壺かもしれないのだ。

日差しが強くなってきたため、ハルとメイラは木陰に入って休憩することにした。いつもは口やかましいメイラも言葉少なに、ぼんやりと空を眺めている。

疲れているのだろう、と、ハルは思った。当たり前だ。夜通し歩き続けたことはもちろん、皆襲撃に備えて気を張ってきた。宿を取る予定だったこの町に着いたとき、誰もがとりあいず休めると安堵したに違いないのだ。そこでのこの事態である。体力的には当然、それ以上に精神的打撃も大きい。ましてや普段は微塵も感じさせないが、メイラは、ハルよりも七歳年長のリドルフのさらに倍以上の年齢よわいを重ねているのだから。

「大地神アナリと対極にあるのが、風神フィース。そして、火神アテンと対極にあるのが水女神シルヴァ。四神の上に君臨するのが、空神オリス……」

ハルは石をとり、地面に書きながら小声で唱えはじめた。リドルフに教えてもらった法術に関する知識を復習しはじめたのである。それに気がついたメイラが嘆息を漏らす。

「殿下は、このガイゼスの王子にあらせられます。そのようなものに熱心になる必要などありませんまい」

「分かってるよ」

ハルはじつと地面を見つめたままだった。

「この国の人間だからこそ、この町に起きていることを真剣に何とかしたいと思う。リドルフ殿やセティに頼ってばかりではなくて。そのためにはこのような知識も必要だろう？」

「殿下……」

「私は、もう一度井戸を見てくる。メイラはそこで休んでいてくれ」  
小動物のような動きで木陰から飛び出したハルを、メイラは追わなかった。

一番町外れにある井戸が視界に入ったとき、足元がふらついた。ハルはあわてて手をついて、体を支える。手をついた地面が熱かった。

額に汗が滲み、流れている。無造作にそれをぐいと腕で拭う。

気温がかなり上がってきていた。体力を消耗した体には、その暑さがことさらに堪える。

両手についた土を払いながらハルはゆったりとした歩調で、井戸に近づいた。縁へりに手をかけて、底を覗き込む。昨日までは清水に満たされていたのが幻のように、先ほども見たとおり、底はひび割れていた。それでも、ひんやりとした空気がほんの少しだけ気持ちを支え安らがせる。

通常は法力がある人間以外には精霊は見えないのです。

リドルフの言葉を思い出していた。今、ハルの目には無数の光の球が見えている。

昨夜もそうだった。リドルフに見えていたように、ハルにも生きもののように宙を舞う火の玉が、確かに見えていた。今日や昨日の



ことだけではない。ハルの目には、ガイゼス人の大半が見えないものがいつも映っている。

北の国では法力と呼ばれているものが自分に備わっているのではないかと、漠然と以前から思っていた。その予感が確信に変わりはじめたのは、やはり、セテイとリドルフの二人に出会ってからであった。

一度目は、アイデンで瀕死のカイを治療するためにリドルフが法を使ったときだった。あのとき、ハルの目にはリドルフの手から優しい光が注がれているように見えた。二度目は、アイデンからラガシユに向かう道中で数名の刺客に襲われたとき。まさに自分の体を斬りつけようとしていた白刃を突如遮ったのは、土の壁のように見えた。

メイラには見えず、自分の目には映っているものが精霊というものだと知ったのは、昨日リドルフが説いてくれたからだ。メイラが知ったらひどく哀しみ、困惑するかもしれない。けれど、自分自身では驚きも、落胆もなかった。ああそうか、やっぱり、そう思ったただけだった。

「水女神……泉の精霊……」

覚えたばかりの言葉を口にしてみる。水女神の僕である泉の精霊シルヴァを使役して、術を解くのだとリドルフはそう言った。そして、自分にはその類の力がないのだとも。

「泉の精霊……」

眼前で弱々しく瞬いていた球形の光の集まりが、ぴくりと反応した。もう一度呟いてみる。すると、やはり反応する。ハルは目をしばたかせ、それから意を決したかのように小さく息を吐いた。

「泉の精霊……私の声が届くのなら、聞いて欲しい」

ゆらゆらと揺れていた光の群れが止まり、じつとこちらを見ていくような気がした。

「私たちガイゼスの民にいつも慈愛に満ちた恩恵を施して下さい、感謝しています。人は水がないと生きていかれません。国が富み、

日々の営みを続けていけるのは、あなた達のおかげです」

一旦言葉を切って、ハルは唾を飲む。口の中が乾いているのはきつと、水を飲んでいないせいではない。

「このままでは、町は干上がってしまいます。だから、どうか…どうか、力を貸していただきたいのです」

光の球が左右に揺れた。

「私にできることがあれば、何でもします。だから、お願いです」  
こんなことに意味があるとは思わなかった。しかし、こうすることしかできなかった。まるで自分の言うことにじつと耳を傾けるかのように静止していた光の球たちが、小刻みに振動しはじめた。

「どうか、力を貸してほしいのです」

光の球の振動は少しずつ速くなりはじめていた。そして、ハルが再び口を開こうとしたその刹那、なにかに突き上げられるように視界のなかで光が炸裂し、ハルは今まで聞いたことのない「声」を聞いた。

セテイが視線を動かしたのと、リドルフが固く瞑っていた目を開いたのは同時だった。

顔を見合わせる。口を開いたのは、リドルフの方だった。

「泉の精霊イネヌが動きはじめましたね」

リドルフが探るように目を細めた。

「火の精霊ラマンを押し返そうとしています」

「水女神シルヴァの巫女まで入って来ている、ということか？」

泉の精霊イネヌを使役できるのは、水女神シルヴァに仕える巫女クラスティヌである。しかも町全体に作用するような、これほど強い術を押し返そうとしているのだから、セテイの考えは当然と言える。しかしリドルフはわずかに首を傾げた。

「動き方がおかしいと思いませんか？ 精霊たちの動きが統率されていません」

セテイは視線を虚空に泳がせて、じつと意識を傾ける。確かに、術者に御されて動いているにしては、その動きは不揃いだった。

「だとしたら、何だっけ言うんだ」

次にリドルフが吐き出した言葉の意味をセテイは咄嗟に理解できなかった。

「ハル様かもしれません」

宝玉の瞳が振り返ってリドルフを見たのは、とっぷりと時間が経過してからだった。

「今、なんて言った？」

「ハル様かもしれませんが、そう言ったのです」

セテイの脳内は激しく混乱した。すでに聞きなれた固有名詞のほ  
ずが、うまくその人物と結びつかない。いつもの三倍以上の時間を  
要して何とか結びつけても、その瞬間には平生と全く変らぬようす  
の目の前の男の正気を疑った。

「ハルはガイゼス人で、しかも王子だ」

今更口に出す必要もないほどの事実である。リドルフは困ったよ  
うな顔をして、それでもはつきりと言い切った。

「けれど、ハル様は法力をお持ちです」

「ハルが、法力だっけ？」

「ハル様の目には精霊が見えています。アイデンでカイ殿に私が力  
を注ぎ込んだときも、眩しそうにされていましたし、道中で張った  
大地神アナハの防御陣も、しっかり見えていました。土の壁と、確かにそ  
うおっしゃったのです。それに、昨晚も」

セテイは火精霊ラマンを使った昨晚の急襲を思い出していた。セ  
テイの目には上空に無数の火の玉が飛んでいるのが見えていた。そ  
して、ハルも同じように空を見上げていた。だから、頬に触れたと  
きあれほど驚いたのだった。しかし、それでもセテイはリドルフの  
言うことが信じられなかった。認められなかった。

「まさか、そんなこと。ガイゼスは法術を使えない人々が、決起し  
て興した国だ。その国の王子が、王家の人間が法力を持っているな

んて」

「確かに、常識的に考えればその通りです。しかし、ハル様が法力を持つているのはほぼ、間違いないと思います」

金色の髪を掻き回し顎に手をやったセテイに、リドルフは穏やかに続けた。

「世に絶対ということなど、ありませんよ。なんせ、あなたが剣を振るっているぐらいなのですから。それを国王陛下や大神官<sup>クラウテン</sup>たちに伝えても、ナディールでは誰も信じますまい」

セテイはリドルフの顔を一旦見上げ、形容するのが困難なほどに、さまざまな感情をないませにしたような曖昧な表情を浮かべた。

「背景には、私たちが考えている以上に複雑なものがあるのかもしれませんが、私には何故ハル様が王子殿下なのか、どうしても分からないのです」

「どついう意味だ？」

「言葉通りの意味ですよ」

リドルフの口ぶりは謎かけのようであり、真実をそのまま述べているようでもあった。ただでさえ、顔に感情の表れにくいこの男の真意を見抜こうなど、セテイごときができることではなかった。否、四六時中一緒にいるセテイですら不可能なのである。

「とにかく、ハル様のところへ向かいます。もしも、本当に術を解いているのがハル様だとすれば、危険です」

「危ない？」

「ハル様は決してお体が丈夫な方ではありません」

術を使うというのは、気力と体力の双方を使うことである。リドルフは常人では想像すらもできないような苦行を積んだ経験があるから、それらが要因で術が使えなくなることはよほどの場合を除いて有り得ない。しかし、ハルは体が細く、ラガシュでも倒れたばかりだ。しかも夜通し歩き続けたうえ、全く休養を取っていないのである。

瞬時に言葉の意味を悟ったセテイは眉を跳ね上げて、無造作に愛

剣の鞘をつかんで部屋を飛び出した。

金色の長い髪を揺らして街道を疾駆する青年に目をとめる者はなく、あれほど張り詰めていた空気が嘘のように、町は歓喜に満ちていた。確認しなくとも、それだけで井戸が元のように満たされたのだと分かる。

息をわずかに乱して町外れの井戸にセティが辿り着いたとき、すぐ脇の木陰にいたメイラが大きな声で彼を呼んだ。その瞬間、自分たちの推測がおよそ正しかったのだということを知る。

メイラの脇に横たえられていたハルの顔は蒼白に近く、意識がない。法力を極限まで使った人間の症状によく似ていた。

「これは」

やはりセティと同じことを考えているのだろう。一呼吸遅れて到着したリドルフが、ハルの顔を見るやいなや小さく息をのむ。

「私が気づいたときには、すでに井戸の側に倒れられていたのだ。」

この暑さのなか、無理をされたものだから……」

苦々しげに呟くメイラには曖昧に頷いて、セティはリドルフに目配せをする。メイラはハルが法術を使ったことに気がついていないようだった。

「とにかく、宿に運ぼう」

疑問や確認したいことは多々あった。しかし、今は何よりもハルに処置をすることが先決であった。己の体力や気力の上限を超えて法力を使った人間は命を削ることになる。最悪の場合は死に至ることもあるのだ。

ハルの華奢な体に手を伸ばそうとしたセティを、リドルフが自然な動作でやんわりと制して、軽い体を抱き上げた。セティはちよつと意外に思ったが何も言わなかった。

メイラは倒れたハルの容態について、それほど深刻に捕らえていなかった。リドルフの名医ぶりは何度もこの目で見てきたからだ。

しかし、穏やかさの失せたリドルフの表情と慌しく動くセテイの姿を見ているうちに、じんわりと胸に暗雲が広がっていく。

「殿下のご様子はどうなのだ？」

処置の間は部屋を出ているように言われ、大人しくその指示に従っていたメイラは、復旧したばかりの井戸へ行き、清水に満たされた弦つるのついた桶を両手に提げて戻ってきたセテイに詰め寄った。

「リドが、何とかする」

そう言った白皙の青年の顔に、笑みはなかった。メイラは大きく息を吐いて、力なくうなだれて唇を噛んだ。

セテイが部屋に戻ったとき、リドルフは右手を翳して力をハルに注ぎ込んでいた。しかし、ハルの顔は蒼白から変わりない。

「私の力ではだめかもしれませんが。ハル様の体のエネルギーは枯渇しています」

セテイはハルに視線を落としたまま、無意識に自分の頬を指でなぞっていた。

つい、数日前に美しい顔には到底そぐわぬ傷を負ったその場所に今は痕すら残っていない。人はリドルフが法術できれいに治したのだと思っている。しかし、セテイはそれが厳密な意味ではリドルフが治したのではないことを知っていた。リドルフが注ぐ力は、人が元から持っているエネルギー、いわば自然治癒力を活性化させるものなのだ。だから、怪我を負った人間にはよく効くが、病に冒された人間やハルのように憔悴しきっている人間には大きな効力がない。体力的な問題だけではなく、気持ちの面でも強い人間にはよく効くが、元来ハルはそういう類の人間でもないのだ。リドルフの力が劇的な効果を発揮できないのは、当然であった。

「どう、思いますか？」

投げかけられた問いは、裁判官に判決を問うかのようにであった。

セテイにはリドルフがよほど切羽詰っているのだということが、よく分かった。この男が自分に対してこの類の質問を投げかけることなどまず有り得ないことなのだから。

セティは答えずに水に満たされた桶に手をつ突っ込んだ。感覚がなくなるまで冷えた手をハルの額に乗せる。リドルフの視線を感じながら黙然とその動作を二度ほど続けて、とうとう口を開こうとしたその時、宝玉の瞳をあらぬ方を向けて大きくする。

「水女神……」

リドルフはセティの視線の先を追い、目を細めた。彼の目にはぼんやりとした美しい光に覆われた靄もやしか映らなかったが、セティには違うものが見えていた。七色の光に覆われた靄もやが、寝台に横たわるハルに近づく。リドルフは目を細めたまま、セティは腕組みをしたままじつとその様を見ていた。

光がその強さを増した。二人は思わず目を瞑った。再び目を開けたとき、光の靄は姿を消していた。

「水女神は何と仰ったのですか？」

「ハルに、加護を与えにきたと」

「水女神が、直接ですか？」

瞠目するリドルフに向かって、セティは事もなげに頷いた。

水女神シルヴァは、生命を慈しみ育む神とされており、水女神に仕える巫女は癒しの力を与えることができるのだ。

「あなたの友人だからですか？」

「違うだろう。まあ、空神オリスによるしくというようなことは、言われたけれど」

「では、なぜ？」

「水女神には、ハルが好ましい存在であるらしい」

劇的に顔色がよくなり、穏やかな寝息を立てて眠るハルを見つめてセティは破顔した。

「もしかすると、ハルはとんでもない存在かもしれないぞ」

それから宿の主に借りた浅い桶に、井戸から汲んできたよく冷えた水を張り、寝台の傍に引き寄せた卓にそれを置いて団扇のようなもので眠るハルに風を送った。こうするとほどよく冷えた風が当たり心地よいのだと、先ほど水を汲みに行った時に上機嫌の女性が教



えてくれたのだった。

休むようにと勧めるリドルフとメイラを先に休ませて、セティはその作業を続けた。

メイラは体力的、精神的疲労から目が落ち窪んで頬が落ちていたし、リドルフは表向きには変わらないが、昨晩から立て続けに大きな法を使っているために、いくらか消耗していると思われる。一番体力を消耗していないのは、セティでありそれは合理的な提案だった。しかも、メイラはリドルフに対しては頑ななところがあるが、何故かセティの言うことには案外と素直なところがあり、彼の申し出をすんなりと受け入れた。

一方のリドルフは渋々といった呈でそれを受け入れたが、彼の思惑はセティと少し違った。ハルが目を覚ました時、詳しい事情を聞くにはセティが適任だと考えたのだった。

ハルが目を覚ましたのは、セティが桶の水を変えるために、四度ほど宿と井戸を往復してからだだった。

濃い睫毛が一度震えて黒鳶色の瞳が覗く。

「気がついたな」

焦点の定まらぬ瞳に、セティが笑いかける。左右に彷徨ってからハルは寝台の横に座り、団扇を持った友人を捉えた。

「…黄泉の国かと思いました。あなたの顔は寝起きに見るには、肝によくない」

「冗談が言えるぐらいだ。もうすっかり良いんだな」

「私はまた倒れたのですか？」

「そうだよ。法力を使いすぎたんだ」

ハルの視線がまた宙をさまよった。

「ハルが泉の精霊イネヌに力を貸して火精霊ラマンを押し返したんだろう？ 覚えていないのか？」

倒れていたハルを見て、リドルフとセティはすぐさま法力の使いすぎだと分かった。郷里で幾度となくそういう人間を見たことがあるからだ。

「よく分からないのです」

「分からない？」

「はい。井戸の奥底に光の球がたくさん濺んでいて、何となくそれが泉の精霊イネクスのような気がして、話しかけました。そうしたら、その内に光が炸裂して……」

「話しかける？ 神霊文字サイラットは？」

「サイラットとは、何ですか」

逆に遠慮がちに尋ねられてセティは拍子抜けした。

「ハルは法術を使えるわけではないのか？」

少し戸惑って、それでもはつきりとした口調でハルは肯定した。

「どうしてガイゼス人が、しかも王子が本来忌むべき法力を持っているんだ？」

思わず口をついて出てしまった率直すぎる疑問を、セティはすぐさま後悔することになった。

「それは」

苦しげに眉を寄せて、返答に詰まるその様を見ていたら、ひどい罪悪感に襲われた。

こんなふうに関わったことがないから、こういうときにどうしたらいいのか分からない。どうして、ハルがこんなに辛そうに顔を歪めるのか分からない。こんなとき、自分の不躰さが疎ましく思えてならない。きつと、リドルフならばもっとうまい具合に言うに違いないのだ。

「私の、私の母は」

セティは白い手でやんわりとハルの口を塞いだ。どうしたらいいのかは、分からない。けれど、こんなハルの顔を見るのはたまらなく嫌だった。

「言わなくていい。私が悪かった」

黒鷲色の瞳には困惑の色が揺れ、底には深い哀しみがたゆたっているようだった。

「もしも、いつか、ハルが話したいときがきたら、その時に聞くよ」



トウルファ。

その名の由来が「集まる」という言葉である通り、ガイゼス国内のものはもとより大陸中の人と物が集まるその都市は、ここからさらに南の内陸に位置する王都、ウルグリードよりも華やかでどこか浮ついた都市であった。

元来ガイゼスの国土は恵まれているとは言いがたい。

その大半が乾燥した大地であるため、一部の地域を除いて農耕は困難で、大半は過酷な環境にもつよい家畜を飼育して生計を立てている。

ナデイルの国土の一部であったところから、この辺りは主に最下層の人々や貧しい人々が暮らしていた土地であった。そのような性質をもつ土地に起こした国をここまで豊かな国に仕立て上げたのは、やはり現王アンキウスの手腕が大きい。

アンキウスが目をつけたのは、ガイゼス人特有の指先の器用さであった。産出される鉱石や岩塩にさらに一段階手を加えて、より利便性、芸術性の高い武具や、精巧な細工を施した宝飾品などに加工して輸出をはじめた。それらは非常に珍重され、瞬く間に需要が急増した。そこでアンキウスは、職人の育成に力を入れ、供給量を増やすと同時に、交易に使う帆船の精度と質を上げ、より遠くの国とも交易を可能にした。こうしてガイゼスはごく短期間で大陸でも随一の富国へと変貌を遂げたのである。

そんなガイゼスの経済の最重要拠点であるトウルファの街は、この時代には珍しい眠らない都市であった。

夜明けから正午前までは、メインストリートには市が立つ。新鮮な果物や野菜はむろん、獲れたばかりの活きのよい魚、遠い大陸から運ばれてきた塩漬にされた珍しい魚、獣肉。絹織物や麻織物。銀細工や、宝飾類。香に薬……。大陸中のありとあらゆるものが、この

街には集まる。このトゥルファで手に入らぬものなどなかった。

日が暮れると、歓楽街の酒場や娼館には次々と灯りが点る。アンキウス王はトゥルファに限っては、外国人が商売することにも寛大であった。多種多様な人種が訪れ、滞在する街である。そのため食事や酒を供する店もさまざまで、眠らない街、トゥルファに行けば大陸中の珍味と美女を味わえると言われるほどであった。

十日ほど前に大都市トゥルファに入った、ハル・アレン王子ら一行は住宅街の一角の借家を拠点にして活動していた。

当初の予定ではトゥルファに入り次第、都督でありハルの実の叔父である、ロガンを訪ねるつもりであった。しかし、問題点を整理するうちにそれが最も有効な選択肢であるとはいい難いという結論に達したのである。

彼らが速やかに確認したい点は以下の二点であった。

まずは、ハルの命を狙っているのが王太子であるという情報の真偽について。

次に、ナディールから入国している神官の目的と、道中の法術による襲撃の関連性についてである。

これらを解決するには、より広い視野で情報を収集する必要がある。トゥルファは前述したとおり、大陸中の人と物が入り出りを繰り返す交易都市である。それは同時に、情報伝達手段が発達していないこの時代において、多くの情報が、しかも最新の情報が集まるということの意味していた。そのため、一行は街でさまざまな角度から情報収集したのち、ロガンの元を訪ねるという方法が最も効率がよく、有効であると判断したのであった。

かくして、あの法術での襲撃の以後、トゥルファに到達する直前に、すでに見慣れつつある覆面集団に襲われたものの、セテイの華麗な剣舞とメイラの迫力ある剣技により難なく打ち払った一行は無事に街に入り、相談したとおり住宅街の一角に家を借り、市民に混じっての生活をはじめたのである。

「退屈だな」

窓辺に引き寄せた椅子に座り、腕組みをしたうえに頭を乗せた格好のセテイが呟いた。時刻は夕暮れ。窓の外の空は茜色に染まりはじめていた。

「もうすぐ二人とも帰ってきますよ」

笑いを含んだ声で、ハルが答えた。もう何日も同じ問答を繰り返していた。

情報を収集するにあたり、もっとも有効なのは市民生活に溶け込むことである。そのため、メイラとリドルフはすぐさま仕事をはじめることにした。メイラは知り合いが料理店を経営しているらしく、そこで掃除婦として働きはじめ、リドルフは知識を生かし、街の薬草屋の一角を間借りして医師の仕事を始めた。当初は、ハルとセテイも仕事をするつもりであった。しかし、メイラとリドルフの強い反対により二人は断念せざるをえなかった。ハルは命を狙われている身であり、街の中とはいえども不測の事態が起こらないとは言切れない。しかも、王子である彼の顔を知るものはこの大都市は決して少なくない。彼の存在が明らかになれば混乱が起こることも十分考えられた。

そして、セテイはとにかく目立ちすぎるのである。さまざまな人種がこの街には滞在しているため、金髪紫眼はさほど珍しくないが、彼ほどの美貌を持つものはやはりいない。幾度かの襲撃により、セテイの顔はすでに刺客にも割れていると考えるのが自然であり、人々の噂の糧になりやすいセテイの美貌が災厄を招く危険性は高かった。そのため、セテイとハルの二人は外出を極力控え、家の中にいることにした。自由奔放そうに見えて、意外と論理的思考の持ち主であるセテイは、すんなりとリドルフの言葉に納得はした。しかし、納得したうえでなお、それをこの好奇心が旺盛な美青年が面白くないと思うのは当然であった。

街を行き交う異国の人々、ガイゼスが誇る最先端の技術が集約された、港に並ぶ交易船。セテイはあいにくと異国の美女にこそ興味はなかったが、大陸中の珍味の数々には大いに興味があった。それ

らがすぐ目と鼻のさきに存在しているというのに、室内から出られないもどかしさ。セティは日がな一日こうやって窓辺に座り、不満を鬱積させながら窓の外を眺めているばかりだった。

メイラが先に戻り、少し遅れてリドルフが帰ってきた。

二人は各々すぐに食べられるようなものを買って戻ってくる。それらをメイラが実に手早く温めなおしたり、盛り付けたりして、それから夕食となる。この日食卓に並んだのは、羊のひき肉を串に焼いて刺したものの、ムール貝のなかにバターライスを詰めたもの、野菜をトマトで煮込んだものなど、ガイゼスで一般的な料理と、野菜と一緒に焼いた芋や、燻した赤身の魚、芋と牛肉と玉ねぎを炒めたものなどの、ナデイルで一般的な料理だった。

「何か新しい情報は？」

ほおばったムール貝を飲み込んで、セティが二人に問いかける。

食卓には常にナデイル料理とガイゼス料理が並んでいるが、セティはいつもガイゼスの料理を好んでいるらしかった。一方のハルは、リドルフが買ってきた燻された赤身の魚に舌鼓を打っている。ナデイル人のセティはガイゼスの料理を好み、ガイゼス人のハルはナデイルの料理をよく好んだ。最初はもの珍しいからそうなのかとメイラとリドルフは思っていたが、実に、毎日彼らはそうであった。「国王陛下のご病状が芳しくないというのは、真実らしい」

メイラが豆のスープを運んでいた匙を置いた。ハルの視線を受けて、言い直す。

「ウルグリードに滞在し、国王陛下を実際に診たという医師がそう言っていたのです。残念ながら、信憑性が高い話だと思えます」

メイラが働いているのは、トゥルファでも有数の高級な料理店で、社会的地位のある人物が会合や面談に頻繁に使う店であった。

「それと、アンキウス王は穩健派の代名詞でもあるが、どうやら王太子殿下は逆にナデイルとの再戦に意欲的らしいとの噂もある。街では万が一国王陛下が崩御されるようなことになれば、近い未来に開戦という可能性もあると、口々に噂されている」

ナデイル調に記せば、神々も眉を顰めるほどに凄惨な戦いは、決して終息しているわけではなかった。あくまでも停戦条約が締結されただけで、何かのきっかけで再戦という運びになることは十分考えられる。十七年の時は失われた国力を回復するには十分であった。現実には、トゥルファはこんなにも富んでいるのだ。

「最近、ナデイルの方にも再戦を強く望む過激派が出現したようです。どうやら、穏健派との主導権争いが激化しているらしいと、ナデイル人の商人が言っていました」

リドルフが布で口元を拭って、手を置いた。

「今のところはどちらの形勢が有利なのだ？」

「そこまではまだ分からないのですが、ただ、すぐにでも出兵ということではなさそうです」

「ふむ」

この場にいる人間で、メイラとリドルフはあの歴史に残る「ヤルカドの会戦」を経験している。メイラはそのとき壮年と形容される年齢で、自ら馬を駆り、兵を率いてナデイル軍と闘った。リドルフは六つか七つぐらいで、直接戦争には参加していないが、むろん記憶にはしっかりと残っている。

逆にハルは、戦後の条約締結の年の生まれで、一歳年長のセティは大戦中の生まれである。むろん、人々に語り継がれる大戦の記憶は二人には全くない。

それまで黙然と料理を口に運んでいたセティが不意に口を開いた。「どうして戦争をする必要があるんだ？ ガイゼスもナデイルも十分に富み、人は贅沢とはいえないかもしれないが、それぞれ身の丈にあった平和な暮らしをしている。それ以外に何を求めるっていうんだ」

リドルフが、その邪気のなさを愛でるかのように目を細めた。けれど、口元に浮かべたのはどこか哀しげな笑みだった。

「人というものは愚かで、あさましい生きものなのです。自分が持っているもの、ひどく魅力的に映るのですよ。そして、それを



手に入れたいとも思う。自分にさえ不利益がなければ、何を犠牲にすることも厭わずに」

いかにも憎らしい物言いだった。しかし、それにしては哀しすぎる言葉だとハルは思った。

「私は」

低く押し殺したメイラの声だった。

「白人どもが我々にした仕打ちを忘れてはいない」

言い捨てるのと憤然と席を立ち、ハルの静止の声も聞かずに部屋を出ていってしまふ。その後ろ姿を呆然と見つめるセテイと、静かに見送るリドルフに向かってハルが申し訳なさそうに言った。

「すいません。決して二人のことを言っているわけでは」

「わかっていますよ」

リドルフが穏やかに微笑むと、ハルも安心したように頬を緩めて席についた。金縛りから開放されて、再び硬いパンをかじりはじめたセテイも、メイラの剣幕に驚くだけで気分を害したようすはない。

ハルは改めてメイラが姿を消した少し開いたままの扉を見遣り、俯いて小さくため息をついた。

黄昏月が浮かぶ空を、メイラはぼんやりと見上げた。

茜色に染まつた水面がさざなみだち、潮のかおりを含んだ風が頬をなでる。メイラは足をとめてしばしその空気に浸った。

なにがどうということはない。ただ、肌で感じる海の気配がどこか懐かしいような、切ないような思いを呼びおこすのだ。

ここ何日かのあいだにすっかり見慣れた街道をすすみながら、今日は何を買つて帰ろうか考えてみる。きつと、家ではどこかあどけなさを残した顔に、控えめな微笑を浮かべた大事な主と、腹を空かせた仏頂面の金色の髪をした青年が待つている。それを想像して、ゆるみかけた目元がふつと厳しいものに戻る。どうやって昨日のことを切り出そうか。

今日は、リドルフやセティとは顔が合わせにくくて、いつもより大分早く仕事に出てきてしまった。親子はおるか、孫ほどに年の離れた彼らにあのような言葉を吐き出してしまった自分を恥じていた。あのあと、ハルはどれほど気まずい思いをしただろうか。

それなのに、夜半に部屋を訪れた王子は、「差し入れた」と笑つて、友に対する非礼を咎めることもせず、葡萄酒シャルルを置いて出ていった。こんな主人がどこにいるというのだろう。こんな従者がどこにいるというのだろう。主人の面に泥を塗ったあげく、気まで遣わせてしまったのだ。

かつてのナディールの上流階級の人間や、神官たちへの嫌悪と憎悪は忘れようにも忘れられるものではない。けれど、あの大战時に少年であったリドルフや、ましてや戦時中の生まれであるセティのどこに非があるというのだろう。彼らはむしろ被害者であるはずだ。理性では分かっているのに、心の奥底にある黒いなにかがそれを肯がえんじない。

すべてはこの夕暮れに染まる街の風景と、海風のせいかもしれない。

かった。

遠い昔、いつも夕暮れのなか帰路を急いでいた。自分の帰りを待ちわびる愛しい存在がいたからだだった。

傭兵を生業にしていた夫は、ひと稼ぎしてくると言って遠い国の戦に行つたきり、帰つてこなかった。一粒種の幼い息子を残して。

当時のナディールでは、法力を持たぬ褐色の肌と黒い髪と瞳を持つ人びとは、ダラメンという蔑称で呼ばれ、決して白い肌の人々とは交わらず、多くは過酷な土地、貧しい土地に身を寄せあつて暮らしていた。

ダラメンとは「無能」を意味する言葉で、法力至上主義のナディールでは、法力を持たぬ人間は人間ではなかった。貴人や有力者が多く住む北の地域、特に王都近くではダラメンは、ほとんど奴隷扱いで、売買や進物の対象にもなっていた。

メイラが生活していたのはダラメンばかりの小さな集落で、奴隷のような扱いはなかったが、白人の多くが住まわぬような過酷な気候の、痩せた土地である。当然、生活は苦しかった。

息子を育てるためには何でもした。普通の仕事よりは剣の腕を生かした方が金になったから、用心棒や私兵はむろん、ときには報酬に魅せられて危険な橋も渡つたこともあつた。

一人で留守番をさせられるような歳になつてからは、あまり村からは遠く離れず、日暮れまでに終わるような仕事を選んだ。父親がいない分、不憫な思いもさせたまし、苦勞もかけた。けれど、快潤で正義感が強く、人に優しい、よく出来た息子に育つてくれた。貧しくても、幸せだった。

息子は十六歳になっていた。

各地で叛乱、独立運動が盛んになりはじめていた。住んでいた村は特別に虐げられていたわけではなかったせいか、運動に加わつたり協力する者も少なく、どこかひとごとのように安穩としていた。

「メイラ様」

すでに聞き慣れた穏やかな声音に、はつとして顔を上げた。する

と、柔らかな微笑をたたえた背の高い青年の姿があった。

「同じ時刻に終わるのは、珍しいですね」

青年           リドルフは平素と全く変わらぬ調子だった。予期せぬ場所で出会ってしまったのと、感慨にふけていたのとで、昨晩のことを切り出す機会を逸してしまったメイラは、曖昧な返事を返して居心地悪く感じながらも、なんとなくリドルフと並んで歩きはじめた。

ゆったりとした調子で歩くリドルフがしばらくして足を止めたのは、ガイゼス風の家料理の惣菜を売る屋台だった。女主人に注文をはじめたリドルフの横で、メイラは雑踏を忙しく行き交う人々を眺めていた。

仕事を終えて家路を急ぐ男の姿が目立つ。

ほんとうは、ひときわ数が多いわけではなく、無意識に目をとめてしまうだけなのかもしれない。息子は生きていれば、あのぐらいの歳だ。

メイラのなかでは、息子は永遠に、今のハルと同じ、十六歳だった。

つつましやかに、ひっそりと助け合いながら営んでいたダラメンの小さな村は、叛乱軍への見せしめのために、軍が派遣され、柳の枝が折れるよりもたやすく滅んだ。

剣を使う兵士が相手ならば、そう簡単には落ちなかったかもしれない。ダラメンには巧みに剣を操るものが多いのだ。特に、息子は剣の名手との誉れが高かった。しかし、そんなことは悲しいほどに無意味だった。

小さな村の周りに法術で結界とやらが張られ、水では消えぬ炎が放たれたのだ。半球形の目に見えぬ壁に囲まれた空間からは一筋の煙も漏れなかった。全てが焼き尽くされるまで。

近くの街まで仕事に出ていたメイラは、知らせを聞いてすべてを放り出し、無我夢中で駆け戻った。村に着いたときには全てが終わったあとだった。眼前に広がっていたのは、薄く立ち昇る煙と、現

実とは思えぬほどのおぞましい光景だった。

土さえも焼けて色が変わった村であったその場所を呆然と彷徨いながら、探していた。探しながら、心のどこかで見つからなければいい、分からなければいい、と思っていた。しかし、現実には残酷だった。

息子は一月後には妻になるはずだった少女と、義父になるはずだったその父の村長を両腕で庇うようにしたままの格好で果てていた。目の前にあったのは、人の形をした黒い塊だった。それでも、身元が分かったのは、婚約の祝いにと三日前に母が息子へと送った剣があったからだ。柄に小さな紅玉がはめこまれた、ダラメンには上等すぎる剣は無遠慮に、その存在を主張していた。

「ハル様に、昨日の魚をまた買っていいこうと思うのですが、メイラ様は何を買われますか？」

問われてメイラは視線を戻した。リドルフの手には買ったばかりの温かい惣菜の包みがいくつもあった。メイラはそれを凝視した。これまでリドルフはナディール料理を買ってくるが多かったのだ。

「セテイは、ガイゼス料理の方が好きなようですから。食べ慣れた北の料理を恋しがっているかとはかり思っていたのですが」

視線の意味に気づいたらしく、リドルフは困ったように笑う。

逆にハルは、魚や野菜が中心の北の料理を好んでいた。しかし、メイラは絶対にナディール料理を買うことはしなかった。

「それに、私は元々南部の産なので、実はガイゼス料理の方が馴染みがあるのです」

「南部…？ どのあたりだ？」

「アドリンドとの国境近くの、ラントという小さな村でした」

「ラントとは、まさか」

「そうです。あの、ラントです」

リドルフの口調に乱れはおろか、感情すらもこめられていないようだった。

あの大战を経験したものであれば、「ラントの悲劇」を知らぬものは少ない。大战中に決行されたガイゼス軍のその作戦は、後々あの大战が神々もが眉を顰める　　と言われるようになったきっかけでもあるのだ。

山麓の小さな里、ラントは優れた術者を輩出するので有名な村だった。血筋が関係するような一部の特別な役職を除き、高位の神官などはこの村の出身者が非常に多いのだ。白い肌と色素のうすい髪と目を持つすべての人間は、少なからず法力というものを持って生

まれる。とりわけ、ラントには強い法力を持つ人間が多く生まれた。ナディール政府は、この山麓の小さな村を重要視し、特に子どもたちには高度な教育を受けられるよう配慮していた。定期的に火神<sup>アテン</sup>、風神<sup>フィリス</sup>、大地神<sup>アナリ</sup>、水女神の神官や巫女たちを派遣し、国の未来を担う逸材の発掘に余念がなかった。

ガイゼス軍にとつては、強力な魔法を使う術者こそが難敵であった。そのため、秀でた術者を根絶するため、芽から摘むべく、ラント壊滅作戦に打って出たのだった。

「生き残りがいたとは」

「私一人です。村の人たちは、皆、あの夜に死にました」

ガイゼス軍の攻撃は凄惨を極めた。四方から村人の十倍もの兵数で囲い、一気に攻め入ったのだ。抵抗の意思すらない老人の首をはね、我が子を胸に抱いて逃げ惑う女を、背中から赤子もろとも串刺しにした。百余の村人誰一人にも魔法をつかう暇を与えず、一つの体に何本もの剣を突き刺した。容赦ないガイゼス軍の攻撃に、大地は朱に染まったという。

「それは　さぞかしガイゼス人が憎いだろう」

メイラは目を閉じた。あの作戦は、ガイゼス陣営にいたメイラですら、後に話を聞いたとき、なんともいえぬ後味の悪さを覚えたものだ。

「憎い…？　いいえ、そうは思いません」

「なぜだ」

青年の表情は穏やかで、口許には笑みすらも浮かんでいそうだった。

「直接手を下した人、作戦を指示した人、決断した人、提案した人…。一体誰を憎んだらいいのでしょうか」

リドルフは目を閉じて一つ息を吐いた。

「皆が皆、それぞれが抱えていたもののために、ただきつと必死で、それだけだったのですから」

ふたたび目を開いた青年が、メイラには不可思議な生きもののよ

うに思えた。しかし、それ以上にひどく、ひどく不憫に思われた。きつと、頭が良過ぎるのだ。この青年は。

それは、真実に違いないのかもしれない。しかし、人の感情というものはときに正解をも認められないものであり、それが当然なのだ。自分から大切なものを奪った相手を、もつと単純に憎悪できたなら、どれほど楽だろう。救われるだろう。簡単に行き着いた境地だとは思われない。しかし、この青年はこの若さでそこに辿り着いてしまったのだ。きつと、自分を理性で捻じ伏せてしまったのだ。

しかし、意図に反して口から出たのはさらにリドルフを試すような挑戦的な言葉だった。

「ラントの作戦に、目の前の私が参加していたと言っても、憎くないか」

十七年前のそのとき、メイラは作戦には参加しなかった。一隊の指揮を執っていた人間によく知っていた者はいたが、メイラには命令が出なかった。しかしそれは単なる偶然であり、命令が出れば間違いなくメイラは「ラントの悲劇」に関わっていたはずだ。

「同じことです」

澄んだ藍玉のような瞳には微塵の揺らぎもなかった。

「立派だな」

心から出たことばだった。しかし、リドルフの面に浮かんだのは、さまざまな感情をないまぜにしたものを覆い隠すような、複雑な笑みだった。

「ずいぶんと刻はかかりました」

メイラは前にリドルフが、神を信じないと言っていたことを思い出した。

聖職者であり、強い法力を持ちながら、神が信じられない。なにをそのような世迷言を、と思ったが、それも当然なのかもしれない。年齢にすぐわぬ落ち着きも、癪にさわるほどの冷静さも、分かるような気がする。リドルフは、きつと、ひどく苦しんだのかも。しれない。



戦争とは、そういうものだった。叛乱が激化する前、ナディール軍は見せしめのために非力で罪のないダラメンの多くの集落を焼いた。メイラの集落のように。

そして、しだいに後に青い英雄王と呼ばれるイミシユのもとに、統率されていたガイゼス軍は、ラントのような、優れた術者を輩出する村や、神殿が集中する地方都市を急襲し、虐殺した。

戦場に出た人間のほとんどが被害者であると同時に、加害者であった。

息子を失って以来、憎悪と復讐の鬼となって反乱運動に積極的に加わり、剣を振るい、馬を駆り、多くの白色人の首を刎ねた。ヤルカドの会戦では多くの部下を率いて、先鋒を務めた。殺したもののなかには、もちろん家族がいたものも多かっただろう。そして、ラントの作戦に出た知人は、そのヤルカドの会戦で死んだ。

昨晚のセテイの言葉を想いだした。

あまりにも無垢すぎて、齢を重ねた人間には青臭くさえ思われる言葉だった。けれど、それは、確かに世の理ことわりの真実をついていたのかもしれない。戦後の生まれのものが皆、彼のように思えるなら、それは、もしかすると素晴らしいことなのかもしれない。

「私も、ナディール料理を買って帰る」

法术を憎いと思う気持ちは、変らない。リドルフのように思い定めることも、到底できそうにない。でも、それはそれでもいいのだろう、と思う。

「ハル様は、北の料理がお好きらしいから」

トウルファ最大の露天市場は今日も、人と物とが溢れていた。

近くで取れたばかりの色とりどりの果物を扱う露店の主人は、客の気配を察して作業を中断し、向き直った。そして思わず言葉を失った。

二人組みのうちの一人は、すらりとした長身の女だった。

白地に藍色の糸で刺繍を施された、光をとおすほどの厚さのスカーフでゆったりと頭部をおおい、肩のところ洒落た細工のピンで留めている。露出は控えめだが、ガウンから伸びた金の腕輪を重ねた手首や、足元までの巻きスカーフからちらりと覗く足首はほどよく引き締まっていて、特別に細いということはないが、均整のとれた体つきだ。北の生まれらしく、肌が上質の絹織物のようにきめ細やかで、透るように白い。

いでたちからすると、旅の舞踏手というところだろうか。顔を動かすたびにスカーフのなかで揺れる、存在感を主張する大きめの耳飾りがかすんでしまうほどに美しく、魅惑的な顔立ちだった。見たこともない高価な宝石のような淡紫色の瞳が涼やかで幻想的なのに対し、紅を差した肉感的な厚めの唇が妙に生々しく、愛嬌と色気を漂わせる。その不均衡さが彼女の魅力をより一層引き立てていた。

舞踏手らしき女が、傍らの少女の耳元に唇をよせて何か囁いた。なんと言ったのかは、分からない。しかし、少女は小首を傾げて柔らかに微笑んだ。その何気ない動作がひどく胸を騒がせる。

裾に緑糸で刺繍された袖と丈の短い上衣に、上衣の刺繍と同色の膝丈のスカートをはき、もう一人の女とは対照的に華奢な腕と足を露出していた。艶やかな黒髪はまとめ、花をさしている。こちらは楽土なのか、細い腰に巻いた帯に彼女の雰囲気によく似合う華奢なつくりの銀の笛を差していた。肌の色はこのあたりの人間にしてはやや薄めだが、おそらく南の生まれだろう。長い睫に覆われた黒

鳶色の大きな瞳はどこか潤みがちで、儂げな印象の楚々たる美少女である。

呆気にとられていた店の主人は我に返ると、系統の異なる二人の美女に、いそいそと声をかけた。二人は愛想よく微笑んで応えてみせたものの、その途端に深入りを避けるようにすつと立ち去ってしまった。彼女たちが姿を消したあと、店主はしばし恍惚としていた。あまりに一瞬のことで、二人の美しい女は幻かと思われたのだ。露店をひやかしながら二人はのんびりとした歩調で通りを進んでいた。

歩きながら背の高い女が傍らの少女にまた囁く。

「逆に目立ってるような気がするの、気のせいかな？」

若い男の声だ。

「そんな気はしますね」

答えた黒髪の少女の声は、較べるといくらか高い。

二人の姿は確かに人目をひいていた。道行く人の半分くらいはその美貌に気がつき、すれ違ってから振り返る。育ちの良さそうな若い男などは、控えめに視線を注ぐ程度だが、なかには無遠慮に見つめてくるものもいる。

そのさまを見ながら、彼女たちの後方を少し離れて歩く老女がため息をつく。

そう、二人の美女は旅の芸人に扮したハルとセティであり、彼らを離れた場所から見守っているのはメイラに他ならない。

事の発端は二日前の夜、いつもの食事の席でセティが発した一言だった。

「このままでは、退屈すぎて腐ってしまう」

ハルとセティの二人が軟禁生活を送るようになってから、半月近くが経とうとしていた。夕刻、メイラとリドルフが戻り、食事を終えると二人は毎日続けている剣の稽古のため、外に出る。出るとは言っても、所詮リドルフとメイラの目の届く範囲で、ここから半径二十カベール（約十メートル）からは一歩たりとも出ていない。そ

うしなければならぬ理由も十分に心得ているため、セティはよく忍耐していたのだが、元来彼は好奇心旺盛でじつとしていられない性分なのだ。そろそろ虫が騒ぎ出しても当然であった。

彼の発言に対し、ハルとメイラは明確な返答をさけつつ、リドルフへと視線を滑らせた。この青年の保護者役は誰か、よく知っている。

「ハル様、どうぞ」

当の保護者はそしらぬ顔で、ハルがすっかり気に入ったナディー料理を取り分けて渡してくれる。ハルは受け取りながらも、ちらりとセティを盗み見た。保護者の反応が大層気に入らなかつたらしく、食事中にも関わらず卓のうえに行儀悪く肘をつき、訴えるような眼差しでリドルフを見ている。

刺さるような視線を受けても、リドルフは全く動じなかった。

何食わぬ顔で料理を口に運び、ハルやメイラに話題を振る。ガイゼス人の二人組みはリドルフと会話をしながらも、時おり仏頂面の青年に視線を泳がせる。彼が、あまり気が長いほうではないのは、もう知っている。

「だめです。あなただけの問題ではありませんから」

まさにセティが爆発するのではないかと思われたその寸前、リドルフはぴしゃりと言い切った。

「今、刺客は恐らくハル様を見失っています。わざわざ居場所を教える必要はありません」

不服そうに口を尖らせたものの、セティは反論できなかつた。リドルフが言うことは正しい。事実、退屈とは平穩の裏返しである。トウルファに入ってから一度も物質的な襲撃も、法術での襲撃もない。もっとも、法術での攻撃の標的がハルだとは断定できないのだが。

「セティ、あなたは人の目を引きすぎるのです。もう少しそれを自覚していただけませんか？」

郷里を発つてから、幾度となくリドルフがセティに言ってきた言

葉である。

「この町は特に人が多いのですから」

セティはリドルフが言外にほのめかした意味をよく汲み取っていた。つまり、この町にはナディール人も多いということをお願いしたいのだ。

「だったら変装すればいい」

「変装？」

「私やハルだつて分からなければいいのさ。情報収集するにしたつて、二人よりは四人の方が効率がいいに決まっている。それに、私やハルでないと得られないものもあるかもしれない」

セティの言うことは確かに的を得てはいるが、リドルフは相変わらず渋い顔だ。もっとも渋い顔だと分かるのはセティだけで、ハルとメイラにはリドルフの変化は分からないのだが。

「ハルだつて、いい加減退屈だろう？」

セティの勢いに気圧されて、うっかり頷いてしまったハルは、多くの人々を魅了してやまないその淡紫色の瞳が得意げに細くなったのを見てから、しまったとばかりにメイラとリドルフに視線を泳がせた。

かくして、それからさらに一悶着はあったものの、最終的にはメイラの「私が後ろから付いていくから」との言葉にリドルフが折れる形となった。

メイラ自身もハルの身の安全を考えれば家に閉じ込めておきたいというのが本音ではあっただろうが、やはりそろそろ気分転換は必要だと考えたのだ。あまり内にはかりこもっていて、神経質になりすぎていけない。目に見えぬ敵との戦いは長期戦になりそうなのだ。英気も養っておかねばならないだろう。それに、自分についていけばある程度の安心もできる。

リドルフも自分が同行できるならば、そこまで頑なにならなかつたかもしれない。

しかし、彼の場合はメイラと違ってそれが不可能であったのだ。

リドルフはもともと長身の白色人種のなかでも群を抜いた長身の持ち主で、なおかつ、いかにも憎らしいでたちはトウルファという町でもやはり異色でる。さらには、ここ数日のあいだに彼の医師としての腕はすっかり評判になってしまい、今や借りている薬草屋の一角ではさばききれないほどの人数が押し寄せているのだ。

その反面、メイラは小柄で齢も重ねているし、ガイゼス人であるから人混みに紛れ込むのはうってつけである。さらに、彼女は剣技に長けていて、人生経験も積んでいる。不測の事態にも十分に対応し得るだろう。リドルフにとってはこのうえなく、信頼のおけるお目付け役であった。

そうと決まったからには、セテイやハルはもちろん、リドルフとメイラも真剣に彼らの変装について考えた。

顔はもちろんのこと、セテイの場合は、髪も肌もなるべく露出しないほうがいだろう。しかし、トウルファは熱帯に近い気候である。人々は薄着で過ごしているのが常で、あまりに着込んでいては不自然で、逆に人目を引きかねない。しかも、男が顔を隠すという習慣はこの国にもなく、それだけで異様だ。

問題はまだある。セテイは典型的な北の国の容貌で、ハルはやや肌の色は薄いが一見して南の国の生まれと分かる容姿である。大体にして、商いをするもの同士が旅芸人の一座でもない限り、ガイゼス人とナディール人の組み合わせで行動していること自体が珍しい。かくしてさまざまな意見を出し合い、真剣に討論した結果「旅の女芸人」というところに落ち着いた。

翌日、メイラは雇われている高級料理店に出入りしている芸人の一座から、セテイとハルの背丈に合いそうな衣装やそれに合う装飾品などの小物類を借り、化粧を施して、苦心のすえ出来上がった二人の変装は完璧であった。だれも二人がセテイ・コヴェという青年とハル・アレン王子であるとは分からないだろう。どこからどう見ても、「旅の女芸人」には違いない。

しかし、彼らは二人の身元を隠すということに熱心になりすぎて、

重大なところで失念していたのだ。目立たないようにするという大前提を…。

気温が高くなってきたため、セティとハルは立ち並ぶ露店の一つで飲み物を買って、休憩することにした。

二人が買ったのは、薔薇水に少し甘みをつけたものだ。暑いとき、男は冷やした麦酒フアーガで喉を潤すが、女性や子どもは薔薇水をよく飲む。ちなみに、同じ製法で薔薇のかわりにアルベルムを使用した「アルベルム水」もあるが、こちらは超がつくほどの高級品で残念ながら露店などでは売られていない。それを聞いたセティはたいそう残念がった。

「飲みたいのですか？」

セティの反応があまりにも意外で、ハルは思わず問い掛けた。彼には高級品がひどく似合いそうだが、彼自身がそういう類いのものに興味があるとは思えない。確かに、食べるのは好きらしいのだが、それほど食通という訳でもなさそうなのだ。

「飲みたいということではなくて」

闊達なこの青年には珍しい、歯切れの悪いものいいだった。

「なんとなく、あの香りは気になるんだ。好き、なのかな」

腕組みをしながら首を傾げたセティの言葉が、ハルにはなぜかひどく嬉しかった。

二人は木陰に腰を下ろした。照った手のなかで、井戸でよく冷やされた薔薇水と、同じくよく冷やされた杯がひんやりとして心地よい。

人目がないのをいいことに、セティはスカートとガウンをはだけて足を出し、胡坐あぐらをかく。はたから見れば、あられもないような姿に違いない。いつものセティらしい仕草だが、今、彼は目を疑うほどの美女の姿なのである。まくりあげたスカートとガウンから、すんなりと伸びた手足はあまりにもあだつばい。二人の大分後方で同じく日陰に腰を下ろしたメイラのため息がここまで聞こえてきそう



だった。

「ハルは女装が似合うな」

半分ほど減った薔薇水の入った杯を手のなかでもてあそびながら、セテイが悪戯つ子のような顔つきで茶化す。大陸中で一、二を争うだろう女装が映える男に、そんなことを言われるのは心外だとハルは思ったが、口にしたのは別のことだった。

「ガイゼスの男子は、女のようにだと言われるのが最大の侮辱なのですよ」

薔薇水を飲もうとしていたセテイが一瞬の半分だけ固まって、慌ててハルに向き直る。

「それは悪かった！　そういうつもりで言ったんじゃない」

「いいのです。本当のことなのですから」

ハルは笑って薔薇水を飲み、それから自分の横顔を凝視するセテイの意図に気づいて言葉を付け加えた。

「卑屈になっているわけではありませんよ。真実を言っているだけです」

杯を地面に置き、大きく伸びをしたハルの腕は、確かに少女のものとなんら変らない。それどころか、市で働いている少女たちよりもか細いかもしれない。

「私も真実を言っているだけだ。侮辱などではなくて、本当にハルは綺麗だと思うよ」

「男に向かつていう台詞ではありませんよ」

なぜか熱くなった頬を悟られないように、ハルは視線を逸らして笑う。

「それもそうだ。私も、綺麗と言われるのはあまり好きじゃない」  
セテイはすぐさまそれを認め、晴れやかに笑った。

「トウルファは面白い町だな。見たことのないものばかりだ」

「ナディールにはあまり外国のものはないのですか？」

「交易に頼らなくても国が富んでいるし、自国のものこそ最上と考えているところがあるからな。外国のものは高級品で、一部の人間

にしか手に入らないよ」

木陰の下で交わす会話はたわいもないことばかりだった。先刻見たばかりの異国のもの、トゥルファの街の規模、そしてセテイの母国、ナディールのこと……。

ハルは受け答えしながら、いつの間にかセテイの表情を追うのに夢中になっていた。口を開けて豪快に笑い、零れ落ちるのではないかと思うほどに美しいその瞳を大きくする。作りもののように完璧に整った造形が本当に人間らしくよく動く。それがなんと魅力的に彼の顔を彩るのだろう。

そしてハルは新たな発見をした。

セテイの、淡い紫色の瞳は明るい陽光の下では色味が失せて、銀色のヴェールをかけたかのようにきらめき、逆に青味が強い虹彩の外側はそれが引き立つのだ。それは筆舌に尽くしがたい美しさであった。大陸中で珍重される、ガイゼスで産出するさまざまな宝石を見たこともあるが、セテイの瞳の前ではどれもが玩具のように見えるだろう。

「ハル？ もう飲み終わったのか？」

気がつくともセテイが至近距離でハルの手に持った杯の中身を見ていた。あまりの驚きにハルは杯を手の中で滑らせた。

「驚きすぎだよ」

さも面白そうに笑ってセテイは、ハルの手から落ちた杯をしっかりと空中で受け止めていた。だれにでもできることではないが、ハルの剣の師は空中に舞う小石を両断するほどの腕前である。このくらい訳もないはずだ。

「さあ、次は帆船を見に行く約束だ。案内してくれよ」

「暑くないですか？ もう少し過ぎしやすくなってからでも」

気温は一番高い時間帯を少し過ぎたぐらいだ。町には人気がまだ少ない。セテイは北国の生まれで、しかも、変装のためにいつもよりも厚着なのだ。

「私は大丈夫だ。ハルは、辛いかな？」

「いいえ、私も大丈夫です」

「では、すぐに行こう」

子どものようなセテイの表情と、立ち上がってすぐに移動しようとするせつかちな仕草にハルは思わず笑った。

「そんなに急がなくても、船は逃げませんよ」

セテイが振り向いた。

「いつ死ぬか分からないだろう？」

「え　？」

「死ぬときに後悔はしたくない」

セテイの顔に浮かんでいたのは、はっとするほどに真摯なものだった。

「命を狙われているんだ。いつなにがあるか分からないじゃないか」  
そう笑った顔はいつもの、太陽のような笑みだった。

港に並ぶ帆船に、セティは目を輝かせ感嘆の声を漏らした。

防腐処理のために真っ黒にタールを塗りこんだ船体に、対照的な白い帆。メインマストの張られた帆には太陽をかたどったガイゼスの国章が堂々と描かれ、雲一つない空によく映えている。船尾楼でくつろぐ船員たちの姿が、その大きさを如実にあらわしていた。

幸運なことに今日は、交易のために出ていた船の多くが戻ってくる日だったらしく、港に揃う最新鋭の船が並ぶそのさまは壮観と形容する以外にない。

生まれて初めて見る巨大な動く建造物を前に、セティは口を開けたまま船体を見上げ、眩しそうに目を細める。小走りで移動しては、また歓声を上げる。それはまるで子どものようなようだった。苦笑しながら後を追っていたハルがある重大な事実に気がついたのは、大分陽が傾いてきたころだった。

ハルがそつとセティのガウンの袖を引いた。

「セティ、メイラの姿が見えませんか」

「えっ？」

セティはさりげなく、しかし素早く周囲を見渡した。それは、帆船の前で歓声を上げていた人物とは別人のような鋭敏な動作だった。「見失ったのでしょうか」

「そうかもしれない。とりあいず、戻ろう」

セティは即決すると、いつまでも離れようとしなかった帆船の前から速やかに移動をはじめた。

「全く、あの婆さんは」

悪態をつきながらもセティの顔はどこか神妙だ。口に出す言葉とは裏腹に、彼はメイラには一目置いている。武芸に長け、人一倍責任感が強い老女が自分たちの、否、ハルの姿を見失うなど考えられないことだった。

地理に詳しいハルが先導する。セティは半歩だけそれに遅れて進みながら考えていた。もしも、ハルを狙うものがいて、この状況でなにができるのか。自分の命を狙うものがいたとして、どうやって接触してくるだろうか。

もう少して人通りが増えはじめた広場を抜けるといところだった。二人の行く手を黄色い肌をした二人の男が阻んだ。

「芸人か？」

ガイゼス人でもナディール人でもない。どこか遠い大陸の人間だ。訛りのあるナディール語が特徴的だった。

「何か見せてくれないか？」

ハルはすぐ後ろのセティを省みた。白い面には複雑な表情が浮かんでいた。

「急いでおります。ご容赦下さいませ」

膝を折ったハルの口から出た言葉は、完全に女の口調だった。

しかし、相手は精一杯の誠意が通じるようなやからではなかった。懐に手を差し入れると、無造作に小銭を掴み出し、ハルに向かって投げ付けた。

「そうお高くとまるような生業でもないだろ」

「どうか、ご容赦ください」

頭を下げたままのハルに、男達はいやらしい笑いを浴びせた。まくれあがった唇の下から黄ばんだ歯が覗いていた。

セティの白い頬が紅潮し、えもいわれぬ美しい色に染まる。

いつもの彼ならば、尋常ならざる早さの抜き打ちで鼻先を削ぎ落とすぐらいのことはしてのけたかもしれない。しかし、それをすれば大事になることをセティはよく心得ていた。まずは見極めることが最重要課題である。ただ単に声をかけてきた街のごろつきなのか、そうでないのか。

「あつ」

逡巡しているあいだに男の一人がハルの腕を掴み、乱暴に引き寄せた。太い指が無遠慮に細い腕に食い込み、ハルが顔をしかめる。

セテイは周囲を素早く見渡した。騒動に気がついて幾人かは氣遣わしそうにこちらを盗み見てはいるが、見るからに素行が悪そうな二人組から彼らを助け出そうという勇氣のある人間はなく、メイラの姿もやはり、ない。

下品な笑いを浮かべる男に腰を抱えられながら、さらには顎にも手をかけられ、ハルは無理に顔を上げさせられていた。それがガイゼスの男子にとってどれほどの恥辱か、セテイにも容易に想像できた。

「離して…離してください」

ハルは必死に逃れようとしているが、力が及ばないのは歴然としている。しっかりと細い腰に回された男の腕はハルの腿ほどもあり、顎にからみついた指は彼の倍ほどもありそうだった。紅を差したハルの唇に、今にも粗野な男の唇が重ねられそうだった。

セテイは咄嗟に懐に手を差し入れた。変装のために愛剣は置いてきているが、短剣ぐらいはもちろん身に着けている。そして、セテイにはその短剣一本でこの場を治めるぐらいの腕に覚えはあった。ただ、事後処理がいささか面倒になるぐらいだ。

息を吸い、セテイが今まさに短剣を引き抜こうとしたそのとき、どこからか笛の音が流れてきた。

ハルを抱き寄せていた男も、セテイに近づこうとしていたもう一人の男も音色の出所を探るように、動きをとめて耳を澄ました。その瞬間、セテイの脳裏にある考えがひらめいた。

再び男達と目が合った瞬間、セテイは嫣然と微笑んだ。背筋がぞくりとするほどに、艶やかな笑みだった。

白い手首に重ねた金の腕輪が鳴る。足元までを覆う巻きスカートが踊り、白磁のような四肢がしなやかに宙を舞う。

二人の男は呆然、というよりは恍惚として眼前の舞踏手をただ追っていた。事態の成り行きを不安そうに見守っていた人間も、忙しなく行き交っていた通行人たちも足をとめ、ただ美しい舞踏手の舞に魅入っていた。それどころか、すでに力の抜けた男の腕のなかで、

ハルまでもが、軽やかに踊るセテイの姿にすっかり見入っていた。笛の音と、衣擦れの音だけが響くしんとしたその空間は、まるで異世界のようだった。

短い曲が終わると、セテイは跪いたまま顔を上げ、上目遣いに無頼漢たちを見て、またあでやかに笑った。

「行くぞ」

未だ夢から覚めやらぬようすの男の腕のなかで、呆然としているハルの耳元で囁き、腕をひいて滑るような足取りで人垣を抜けていく。

「お見事な舞でした」

人垣を抜けると、背の低い一人の男が声をかけてきた。右手には笛を持ち、つばの広い帽子の下で、碧眼が愛想よく笑っていた。セテイは軽く目礼するとそのまま通りすぎようとした。

「まさか、かのようなところで、拝見できるとは思っておりませんでした」

セテイは一瞬だけ足をとめたが、振り返らずに謝辞をのべようとするハルの手を引いて足早に歩きはじめた。

「関わらない方がいい」

小声で囁いたセテイの声は低かった。

「あの男はナディールの神官だ」

二人が、生活している二階建ての借家の近くまで戻ると、リドルフとはぐれたメイラの二人に鉢合わせた。

「あつー」

セティとハルの二人が声を上げたのと、彼らが名を呼ばれたのはほとんど同時であった。

かくして一同は家に入り、慌ただしく各々の状況説明が交わされることになった。

「老婆が離してくれなくて」

メイラが二人を見失ったのは港に向かう途中でのことだったらしい。

老婆がぶつかってきて、荷物をばらまき、メイラは手早くそれを拾って別れようとした。しかし、老婆はメイラが生き別れた娘に似ていると言い出し、離さない。セティとハルは視界のなかでどんどん小さくなってゆく。慌てたメイラは何度違うと言っても聞かない老婆を引き離そうとするが、今度は乱暴をする、と、泣きはじめる始末。周囲の訝しげな視線もあり、強行突破できぬうちにすっかり二人の姿を見失ってしまった。さらには、ぶつかった拍子に足を挫いて歩けないという老婆を背負い、街のはずれにある家まで送ってやることになってしまった。ようやく老婆から開放されたころには二人の姿はとんと見当たらない。なにせ、大都市での出来事である。二人の姿を見つけるのは容易ではない。困惑したメイラは下手に探し回るよりも家に戻った方が得策と考えた。戻るとちょうどリドルフも仕事から帰ったところで、手早く事情を説明し、二人でセティとハルを探しにいこうというところで、彼らが戻ってきたという次第だった。

メイラに大きな落ち度はなかった。しかし、責任感の強い王子の従者は自責の念から、すっかり小さくなって恐縮していた。



セティははぐれていた間にあつた出来事をかいつまんで話したが、ハルがならず者たちに抱えられて口付けまでされそうになつたことは伏せた。ハル・アレン王子にとつてそれは大変不名誉な出来事であつただろうし、知れば、この実直な従者は責任を取つて自殺するという性格ではないが、報復ぐらいには行きそうだ。

「笛を吹いた人物は、ナディール人だつた。しかも、恐らく、神官だ」

「と、いうと道中での襲撃にも関わつていた人物だろうか」

「分からない」

「でも、それならばなぜ殿下と小童を助けるようなことをしたのか」  
一同は沈黙した。

「かのようなところで拝見できるとは、思つておりませんでした  
。確か、あの人はそう言いましたね」

視線を落とし、卓の一点を見つめたままハルが呟いた。メイラが白くなつた太い眉を寄せた。

「小童、お前は 何者なんだ？」

射るような視線に込められていたのは、少しの期待とわずかな不安。王子にとつて、有害な存在であつて欲しくない。メイラの目はそう語つているようだつた。

「私はセティ・コヴェだ」

リドルフが、膝のうえに手を揃えて静かにセティを見つめていた。「国を 、何もかもを捨てて出てきた。だから、それ以上の説明のしようがない」

二階建ての質素な借家の前の通りを、家族連れが歩いていった。窓越しにそれを目で追つて、セティがどこか力なく笑う。瞬間、ハルはセティが郷里に残してきたであろう家族に、思いを馳せたのだらうかと思つた。しかし、そうだとすればどこか違和感が拭えない表情だつた。懐かしんでいるわけでも、感傷に浸っているわけでもない。ハルにはセティの顔が不思議なものを眺めているような、そんな表情に見えた。どこにでも転がっている、ありふれた情景で

あるはずなのに。

「素晴らしい舞いでした。まるで心が震えるような」

問いを重ねようとしたメイラを手で制し、ハルは言った。

「また、見せてくれますか？」

穏やかな黒鳶色の瞳が笑っていた。

「音がなければ踊れないよ」

「私も、たしなみ程度なら笛を吹きます。とても、あの舞に相應しいような音色ではないでしょうか」

セティが虚をつかれたように、宝玉の瞳を数度瞬かせた。そして、それからいつものように白い歯を覗かせて晴れやかに笑った。

「ハルが奏でるのなら、きつといい音色だ。そうに、決まっている」  
メイラが即席でこしらえた簡単なガイゼス風の夕食を済ませたと、今日はハルとセティも剣の稽古は控えて、早めに休むことになった。二つの寝室はそれぞれハルとメイラ、セティとリドルフの組み合わせで使っている。

寝台に寝転がって天井を見つめていたセティは、視界の隅で寝室の扉が開き、長身の影が入ってきたのをみとめると、体を起こした。「ああするしか、なかつたんだ。剣を遣えばもつと大事になるし、厄介なことになる」

まるで言い訳するように言うセティの言葉を、リドルフは黙って聞いていた。そして、小さく頷いた。これはリドルフもまた、彼の判断を支持している証拠である。セティは安堵したように一つ息を吐いた。

「接触してきた男は、ほんとうに神官クラインだったのですか？」

「間違いないと思う。体に火精霊ラメンが纏わりついていた。あれは火神アデンの神官だ」

「かのようなところで拝見できるとは思っていなかったと、そう言ったのですね。顔に見覚えは？」

セティは首を横に振る。

「上位の神官でなければ、あなたの舞を見る機会などないはずですよ。」

方便というところでしょうか」

「彼らの目的はなんだ？ 襲撃の狙いはハルか、それとも私か？」

「分かりません」

「リド」

セテイはいずれまいを正した。

「はい」

「リドは、ほんとうに何も知らないんだな？ 私に隠していること  
はないのか」

挑むような淡紫色の瞳をリドルフは真っ向から受け止め、静かに  
頷いた。全てを飲み込む雄大で静かな湖面のような眼だ。そして、  
その眼が絶対に嘘偽りを言わないことをセテイはよく知っている。

「明日、大地神アナリの神官クラインと会うことになっています。そこで聞いてみ  
るつもりです」

セテイが露骨に嫌そうな顔をした。

「まだ見張りがついてきているのか。しつこい奴らだ」  
「護衛です」

リドルフは困ったように笑う。

「何度も言わせるな。私は国を捨てたんだ。戻るつもりなんてない」  
「それは、皆よくわかっています。それでも、国王陛下や大神官クラヴァンた  
ちは、あなたの出奔にお心を痛めておいでになるのです。せめて、  
あなたがどうしているのかぐらいは、把握しておきたいのですよ」

セテイはため息とともにうつむいて、それから無造作に金色の髪  
をかきむしった。

「では リドの父君に伝えてくれ。私は元気にやってい  
る、と」

「父に…ですか？」

「私はあの人だけは好きだ」

「分かりました。そう伝えるように言いましょう」

セティは寢室の寢台のうえに座り、窓の棧に額をつけて虫除けの網を上げてぼつかりと口を開けた窓から外を眺めていた。無意識に吐き出されたため息が思いのほか酒臭くて、自分で思わず苦笑する。大地アナリ神殿の神官クラインに会うといつていたリドルフは、朝食もとらずいつもより大分早く出ていった。

昨夜の深酒の余韻をおおいに残している自分と、リドルフの出かけに交わした会話を想いだすと、なんだか情けなくていたたまれなくて、また一つ酒臭い息を吐き出す。

「セティ、あなたに花の精霊ネビネをつけておきます。何かあれば、すぐに私に知らせるようにしてありますから」

出かける支度をしていたリドルフが、ふと思いだしたようにそう言った。セティは一瞥して、けれど、返事をしなかった。リドルフはやんわりと苦笑した。

「ずいぶん、機嫌が悪いのですね」

「悪くない。いつもどおりだ」

「そうですか？」

「早く行かないと遅れるぞ」

いつまでも視線を合わせないセティに、リドルフは小さく息をつき、慣れた動作で大剣を背負う。視界の隅でそれを捉えたセティが、くるりと向き直ってじつと視線を注ぐ。

「それ、持っていくのか？」

「何かあるといけませんから」

「何かあったら、ほんとうに抜くのか」

「抜きますよ」

リドルフの表情はあくまでも穏やかだ。

「手を血に汚すのか」

「私の手など、いくらでも」

「そんなことを、言うな。そんなこと、リドの口から聞きたくない」  
叱咤するような言葉とは裏腹に、セティは厚めの唇をへの字に曲げて、今にも泣き出すのでないかというほどに顔を歪めた。

「セティ」

リドルフが大剣を背負ったまま歩み寄り、そして、ぽんぽんとあやすようにセティの金色の頭を二度やさしく叩く。

「あなたがやきもきしたり、気に病んだりする必要はなにもないのですよ。私は、自分の意思であなたと一緒にいるのです。私は、いつでもあなたの共犯者のつもりでいるのですよ」

頭に手を置いたままかがみこんで、視線の高さを合わせるリドルフに「子どもじゃない」と反論するつもりだった。しかし、鼻の奥がつんとして、喉になにかが詰まったようになにも言えなくなってしまう。

そんなセティにリドルフは目を細めてまた頭を撫でて、それからいつものようにゆったりとした歩調で部屋を出ていった。

自分が抱えているこの、もやもやしたものの正体が、リドルフには本人よりも分かっているようだった。自分でも扱えきれぬ苛立ちも、制御しきれない突発的な激情も、リドルフはいつもうけとめてくれる。

涼やかなテノールの声音が、澄んだ空色の瞳が、丁寧に紡がれる言葉が、心のなかの硬くなったところを、優しくときほぐしてくれる。まるで、幼子にするように、優しい目をして頭を撫でてくれることがある。そして、その置かれた手の重みに、なぜか安堵してしまう自分がいる。そんなことではいけないと分かっているのに、不意にそれに身を委ねてしまうときがある。

郷里を発ってからもうずいぶんと経つ。

北から南に旅をつづけ、国境の町で偶然にハルと出会い、ついにはガイゼスに入国した。

何者かがついてきているのは、薄々気が付いていた。

いつもは決して側を離れようとしないうリドルフが、たまにふらり

といなくなることがあるのだ。

それは決まってセティが深酒をした晩で、気がついたのは偶然だった。

気分が悪くなって目を醒ましたら、となりにいるはずのリドルフの姿がなかった。国の人間と連絡を取っているのだと気付いたとき、胸の奥が冷えた。

そして、真つ暗な部屋で一人きりなのだと認識した途端、酔いは一気に冷めた。それから、明け方リドルフが息を殺して扉を開けて戻ってくるまで、まどろむことさえできなかった。

リドルフは、決して国に帰れとは言わない。ただ、黙って行く先についてきてくれる。否やを唱えるのは、セティの身が危険に晒されるときだけでそれ以外は一切好きなようにさせてくれる。

なぜ、そこまでしてくれるのだろうか。

俗気が微塵もなく、皮肉なことに今のナディールでは珍しいほどにに神官らしい神官だった。誰よりも神殿での生活が似合う男だった。穏やかな人柄と、清廉で謙虚なところがおおくの人に慕われていた。国の、アナリ大神殿にはリドルフに面会を求める人の列が絶えなかった。

行動をとにもすることによって、リドルフに不利益こそあれど、一切の利益はない。だとしたら、彼の心になかにあるのはなんだろうか。

義務しか考えられない。

そこに到達した瞬間、胸の底にある氷塊が急激に勢力を増して、その体積をふやしていく。

自分の意思で行動をとにもしているのだと、リドルフは何度も言ってくる。彼が嘘いつわりを口にするような人間でないのも誰よりもよく分かっている。

それでも、まさに大地神アナリの化身のごとく懐の深いリドルフの心の底が見えない。そうやって、堂々巡りを繰り返して深みにはまってい。心が、かなしいほどに冷えきっていく。

階下で物音と人の話し声がして、それから少ししてから、大荷物を背負ったメイラが大通りに向かって歩いていった。どうやら仕事に出る時間らしい。

メイラがハルに忠義を尽くしている理由はなんだろう、と、ふと考えた。

彼女はいざというときには微塵のためらいもなく命を投げ出してハルを守ろうとするだろう。それは、やはり彼女がハルの侍従だからだろうか。人は立場や身分のために、命を投げ出すことなど厭わないのだろうか。それらを度外視した心のありさまはどこに、どのようにしてあるのだろうか。

ハルならば、どう考えるだろう。聞いてみたい、とセティは思った。

その黒髪の少年が、不意に、眼下に姿を現したことに驚き、もたれていた頭を上げた。

前の通りに出たハルは左右をちよつと見た。昨日の今日である。セティとハルの二人は外出をまたしばらく避けると昨夜皆で話し合っただけで、ハルの性格上それを無視するとは思えない。目を凝らしていたセティは、ハルが手に見慣れないものを持っているのに気がついた。

「笛……？」

昨日彼が変装のために腰に差していた、華奢なつくりの笛である。確か、メイラは大きな袋を持っていた。中身は昨日の変装のために店に入りしている芸人たちから借りた道具一式だろう。入れ忘れたのだろうか。

なにかを発見したらしいハルは右に向けて走り出した。見つけたのはメイラの背中かもしれない。彼女は出たばかりだ。すぐに追いつける。

しかし、再びセティが壁にもたれかかろうとしたそのとき、信じられない光景が目に見え始めた。

影のようどこからか姿を現した三人の人影が、ハルを囲んだ。

視力のよい淡紫色の瞳はそのなかの一人が、外套のしたに祖国を彷彿とさせる粗末な神官衣をまとっていることを見逃さなかった。

「ハル！」

セティは考えるよりもはやく、叫び、絡み付いてくる憂鬱を振り払い、飛び起きた。

愛剣の納められた鞘を引っつかんで、脱兎のごとく家を飛び出す。すでに、ハルの姿はない。

二股の道の前でどちらに進むか一瞬の半分だけ迷って、表通りに続く道とは反対側を選んでセティは駆けはじめた。

路地に入っすぐに、頬がひりつくような感覚に襲われた。

剣。右手は無意識に柄を握り、鞘走らせていた。

「グッ……」

攻撃自体は、相手の方が一呼吸早かった。しかし、セティの抜き打ちの速さが尋常でなかったというだけのことだ。

血飛沫を上げて倒れる男を視界の隅で確認しながら、セティは舌打ちした。自分を囲む刺客の存在にはない。手加減をする余裕がなく、一撃で絶命させてしまったことに、だ。

これだけの大都市である。法は整備されているし、治安も悪くない。いくら路地の奥といえども、人が死んでいればそのままで済むとは思えない。しかし、未だ手加減するゆとりはない。左右に一人、正面にもう一人。狭い路地は、軽捷けいしような身のこなしをうりにするセティにとってはあまり有難くない状況だった。

「法術大国ナディールは、誇りを捨ててまで私の命を欲するか！」

挑発と己を鼓舞する意味とを含めてセティは声高々に叫んだ。

ナディールに、剣を使うものは少ない。武具を用いるのは野蛮であるという考えが根強いのだ。しかし、返って来たのは奇妙な違和感であった。

返答はなかった。ただ、一瞬の間がセティに全てを悟らせた。

右と左に男を斬り伏せて、セティは眉根を寄せた。

「ナディール側の刺客ではないのか？」



独白のような問いには答えずに、気合の声を発しながら正面の男が上段から切り下げてくる。セティは両手で剣の柄を握り、珍しく真正面からそれを受けた。金属と金属がぶつかる甲高い音が晴れた空に鳴る。痺れた手に眉をしかめ、それから力任せに刃を薙ないだ。いつもとは違う軌道を描いて走った刃は、それでも男を絶命させるだけの力があつた。

セティは刃についた血も拭わぬまま、路地を進みはじめた。手がまだ痺れていた。

ハルを連れ去つたのは、確かに神官衣を纏つた人間だつた。しかし、今斬つた人間達の狙いは恐らく、自分ではなかつた。

行き止まりで地面に描かれた神霊文字サイラック下を見て、セティは小さくため息をついた。

黒髪の少女の身が気にかかるなら、南東の高台にひとりでおいでください。

神霊文字サイラック下。それは、法術を使うナディール人だけが解する文字である。これは、明らかに自分に宛てられた伝言だ。

「何がどうなっているんだ」

セティは頭を振り、目を閉じた。

リドルフが指定された店についたのは、ちょうど夜が明けたころだった。

繁華街の中心、路地にあるこの小さな店は朝昼は飯屋として、夜は酒場として一昼夜開けている。この時代、他の都市ではそのような店は非常に稀だが、このトウルフアという街には何軒かそういう店があった。そして、いずれも繁盛している。

この日も夜明け間もないというのに、大して広くもない店内に客が二組あり、いずれも朝食も真つ最中であつた。

リドルフは、一番奥の椅子に座っている剃髪した男をみつけると静かに歩みよつた。男は神官衣こそ纏っていないが、どこか周囲の空気に溶け込みきれていなかった。

「久しいな」

たたずむ長身の青年の姿に気がつくと、男は翡翠のような目を細めて人懐こく笑う。

「少しも変わらないな。その背中の中物騒なものを除けば」

「同輩に向けて、目で座るように言つと男はにやりと笑つた。

「卿けいの方から我らに連絡してくるなど、珍しいこともあるものだ」

「今日は私の方が聞きたいことがあつたのです。それを、カトラス殿の口から直接伺いたいと思ひまして」

リドルフは大剣を背から下ろすと壁に立てかけて、男カトラスの向かいに座つた。

「単刀直入に伺います」

注文を聞きにきた黒髪を三つ編みにした店員に、薔薇水を注文して、挨拶もそこそこに、リドルフはすぐに本題に入った。

「ナデイルではなにが起きているのですか？」

「なにが、とは？」

「国境を越えてから、二度ほど火精霊ラマンを使った襲撃を受けました。

術の種類、精度、規模から推察すると、恐れおおくもセティス様の御身を狙ったものだと思われます。さらに、昨日はお忍びで外出中のセティス様とそのご友人に、火神アテンの神官らしき男が身元を隠して接触してきています」

薔薇水が運ばれ、リドルフはいったん言葉を切った。

「なにゆえ、そのようなことになっているのですか？」

「卿けいもそのようなこわい顔をするのだな」

黙然と見つめ返す青い目が話しをはぐらかすな、と言っているようだった。カトラスは肩をすくめた。

「国が乱れている」

リドルフはじつと言葉の続きを待っていた。

「それに尽きる」

卓のうえに置かれていた汗のかいた杯を持ち、カトラスは少し口に含んだ。眉間にしわを寄せ、なんとか飲み込んでから中身を確認するように覗く。生まれも育ちも北国のリドルフの同輩には、南国の食物はもちろん、飲みものも合わないようだった。

「火神アテン神殿と風神フィリス神殿は、ガイゼスとの再戦を強く望んでいる」

ナデイルでは宗教と政治は分離されていない。むしろ、神殿の長である大神官クラヴァンや、次席である神官長クラメステルは政治家としても大きな発言力と、権力を持っている。これは、法術が国の要であるから、飛びぬけて法力が強い彼らがそうなるのは必然ともいえる。

高位の神官が、ガイゼスへの入国が容易に許可されるのは、彼らに政治家としての側面もあるからである。唯一の例外は、全知全能の神とされ、全ての生命と事象の運命を司るといわれる空神オリスに仕える神官達だ。強い法力を有する彼らはもともと神に近い存在であり、触れてはならぬ神聖なものとされているため、政はむろん、極力俗世のことには関知しない。

「特にイスファーン台下の発言力は、強い。女王陛下ですら、イスファーン台下のいうことに異論は唱えにくい」

「イスファーン台下とは、先に火神アテンの大神官クラヴァンに就任したお方ですね。

たしか、歴代のアデンの大神官のなかでも抜きん出て強い法力を有しているという」

カトラスは神妙に頷いた。

「イスファーン台下と近い法力を持っているのは、我らの大神官だけだ。ネトル様だけが、高らかに再戦に反対の意を唱えている」

「そもそも、火神アデン神殿と風神フィース神殿はなぜ、再戦を望んでいるのですか？」

セテイが以前言ったように、ナディールもガイゼスも十分に富んでいる。ナディールはガイゼスが独立する以前に比べると、国土は縮小したが経済や軍事にそこまでの痛手はないはずだ。

「かつては大陸一と言われた国の威厳を回復したいというのが建前だ」

「本音はなんですか？」

カトラスは声を落とした。

「軍部は政の主導権を握りたがっている。ゆくゆくは、国家の転覆も考えているやもしれん」

リドルフは目を伏せて、頭を振る。

「なんと、愚かしいのでしょうか。卑しくも神官という立場にある者が」

「国の均衡が崩れているのだ。女王陛下の力は秀抜しておらず、イスファーン台下の力は強すぎる」

ナディールは君主制を布いているが、君主の意思は絶対ではない。国の大事を決めるときには火神アデン、風神フィース、水女神シルヴァ、大地神アナリの四神クラヴァンの大神官たちが集まり、意見を交換する。水女神シルヴァと大地神アナリの大神官は他国でいえば、文官の役割が主で、火神アデンと風神フィースの大神官は武官の役割を担っている。

当然、最終的な判断は王が下す。ただ、他国と違うのは、どの懸案に関しても発言力と影響力が強いのはより法力が強い人間であることである。

これまでは王の力を大神官クラヴァンが超えることはなきに等し

かった。

しかし現在は大地神アナリの大神官クラヴァン、ネトルと、先に火神アデンの大神官クラヴァンに就任したイスファーンは女王の法力を凌いでいる。以前は王家の人間は絶対的な法力を有していたが、最近は王家の人間の法力が弱くなってきている傾向にある。それが国の体制には合っていないのだ。カトラスの言う、均衡が崩れているという意味はリドルフにもよく分かった。

「女王陛下は、セティスげいか猊下げいかがお戻りになることを強く望まれている」

「セティス様は、政に口を出すことなどされなんでしょう」

「口を出されなくても、その存在こそが重要なのだ。国におわずだけで、全ての勢力に対し牽制になる。いざというときには、オリスの信託があるのだから」

「だから、セティス様の存在がイスファーン台下には疎ましいのですね」

「イスファーン台下の指示か定かではないが、火神アデン神殿の神官らの一部には邪魔者を排除しようという動きがある」

「動いているのは、かなりの法力を有する神官です。上層部が絡んでいると考えると間違いないと思います」

「リドルフ」

意を決したかのように、カトラスが同輩の名を呼んだ。

「猊下げいかを、国にお連れ戻しできないだろうか」

リドルフは黙然と眼前の同輩を見つめた。手付かずの薔薇水が入った汗をかいた杯から雫が流れ、木製の卓をぬらす。

「国の分裂はもはや楽観できるような段階にない。ネトル様ひとりでは、イスファーン台下を抑えきれない。それどころか、このままではネトル様の暗殺の危惧すらある」

カトラスのいうことは、妄想でも誇張でもない、リドルフは思った。十分に考えられることである。何しろ彼らはあるの、セティスを亡き者にするこすすらも考えているのだ。

「セティス猊下げいかがおありになれば、オリスの神託さえあれば、国はまた一つにまとまる。それに、彼らも猊下げいかに手を出せるのは国外にいるうちだけだ。国内で害することなど企てようものなら、その罪は万死に値する」

目を閉じて静かに聞くリドルフに、カトラスが熱っぽく説く。しかし、ゆっくりと目を開けたリドルフの目は全くその熱に感化されていなかった。

「承知いたしかねます」

「リドルフ…！」

「セティス様には帰郷されるご意志がありません」

「このままでは、猊下のお命すら危ういのだぞ。卿の力けいだけでお守りすることなど、できるはずもない」

「確かに、私の力ごときでは不可能です。しかし、あの方は自分の身の安全など微塵もお考えなさらないでしょう」

声を荒げるカトラスに対し、リドルフは周囲を気遣う余裕すらみせて平然と言った。それが、余分に彼を勇ませたようだった。

「我らの大神官クラヴァンのお命にも関わることなのだぞ！ 国の未曾有みぞうの危機なのだぞ！ この隙にガイセスに出兵されてみる。大陸一の強国はあつというまに滅びる」

「私は、あの方の好きにさせてさしあげたいのです。心が満ち足りるまで」

微笑みすら浮かべて静かに返された答えがカトラスには常軌を逸しているとしか思えなかった。そして、動揺のあまり震える唇で呟いてしまった言葉を、カトラスは次の瞬間ひどく後悔することになる。

「もうあまり時間もないというのに」

深く考えて口に出したことはなかった。しかし、カトラスは肌を射るような視線に気がつき、自身の失言を認識した。平生は穏やかな男だけに、その凄みといったら尋常ではない。まるで山間の冬の凍てついた湖面のようだ。

「卿は猊下げいかのこととなると、まるで人が変わるな」

リドルフは開きかけた口を閉ざし、視線を虚空に泳がせた。それを、カトラスも目で追う。二人の視線の先には、小さな球形の光が落ち着きのない動きで飛び回っていた。むろん、これは法力がある人間にだけ見える精霊で、この場にいる他の人間にはそれは見えない。

「セティス様が…?」

やってきたのは、リドルフがセティに付けていた花の精霊ネジネであった。

「猊下げいかの御身に何かあったのか?」

「セティス様のご友人が何者かに連れ去られたようです。セティス様は単身でそれを追っていると」

「ご友人…?」

「セティス様にとつて、大事な方です」

壁に立てかけていた大剣を背負い、その存在を確かめるようにリドルフは一度柄を握った。そのさまを、カトラスが奇妙なものでも見るようなようすで見つめている。

「刃物がいつとう似合わぬ男が、そのようなものしいものを背負うか」

皮肉げな笑いに、リドルフは返事をしない。出口に向かって歩き出し、そして、なにかを思い出したように振り返った。

「元気でやっている、と」

カトラスが訝しげに眉を寄せる。

「そう、ネトル様にお伝え下さい。セティス様からの伝言です」

「クラメステル・リドルフ!」

カトラスの口から咄嗟に出たかつての呼び名に、リドルフは振り返らなかつた。

汗が流れている。

背に張りついた衣が気持ち悪い。

ぼんやりとした視界に黄土色の石の壁と、虫除けの網ごしに覗く青空を捉えた瞬間、生きているのだと、ハルはそう思った。

意識がはつきりと覚醒してきたのに比例して鮮明になってきた鳩尾あたりの鈍い痛みと、後ろ手にまわされた両の手首に食い込む鋭い痛みが、それを否がおうにも実感させてくれる。確かに、自分はまだ生きているのだ。

自分がなぜこのような状況に置かれているのか、記憶の糸をたぐってみる。

朝はいつもとあまり変わらなかった。

ただ、リドルフは用事があるとかでいつもよりも大分早く出て行き、セティはいつまでも階下したに降りてこなかった。出かけのリドルフに尋ねると、「ご機嫌斜めようです」と冗談めかして笑われたものの、あながち冗談とも思われなかった。セティは何事にも率直だ。きつと、降りてきたくないから降りてこないのだろうと思った。

それから、メイラがいつもの時間に出かけていった。見送った直後に、昨日自分が腰に差していた借物の笛が、卓のうえにぽつんと置かれているのに気がついた。つかのまだけ逡巡した。そして、結局メイラを追って一人で通りに出た。彼女の背中は大分小さくなっていったが、それでもまだ見える範囲だった。少し駆けて声を上げれば間に合う。そう、思ったのに。人型をした黒い塊が両脇から飛び出してきて、声を上げる間もなかった。鳩尾のあたりに衝撃を感じた瞬間、やられた、と思った。薄れ行く意識のなかで小さなメイラの背中を見て、セティの声を聞いたような気がした。意識が途切れる寸前に強く思ったのは、恐怖よりも後悔だった……。



ハルはもう一度視界に入るものを確認しようとした。

鈍く、重い鳩尾の痛みと、後ろ手に縛められた縄のせいで起き上がるのは困難だった。床に転がされたままの体勢で首を巡らせると目に入ったのはやはり黄土色の壁と、開け閉めしやすいように工夫された虫除け網付きの窓だけだ。それ以外のものは室内にはないよう、それらはここがガイゼス国内の一般的な住宅であることを端的に示していた。そして、この暑さ。恐らく時間は太陽が中天にかかるか、それを少しすぎたころだろう。

状況をさらに分析しようとしていたハルの思考を中断させるかのように、一人の男が現れた。

「気がつきましたか」

その容貌があまりにも意外で、ハルは咄嗟に口を利けなかった。

綺麗な発音のナディール語を発した小柄な男は、白皙で深い海のような色の目をしていて、背丈はリドルフよりもずっと低く、セテイよりもまだ低い。顎先あたりで直線に切り揃えられた髪は赤味を帯びた金髪だった。

手にしていた水差しと杯を床におき、屈みこんで床に転がっていたハルの体を起こした。

「水を飲みますか？」

丁寧な言葉と柔和な表情。しかし、その色素の薄い瞳に込められた真意を察するのは難しい。身近にいる白色人種といえ、体全体で感情を表現するような青年と、屈いだ大海のような懐の深い青年だけである。あまりにも数が少なすぎるし、彼らは標本として優れているとは言い難い。

「怯えることはありません。目的のために利用はさせてもらいますが、それ以上のことはしません。たとえダラメンといえども、女性を痛めつけるのは私たちの本意ではない」

ハルの頭は混乱を極めた。てつきり、自分が攫われたのは自分の命を狙う者だと思った。しかし、現れた男はナディール人で、自分のことをダラメンというかつてナディールで言われていた蔑称で

呼び、しかも、女として扱っている。自分が、このガイゼスの王子だということには知らないのか、それとも知らないふりをしているだけなのだろうか。

「喉が渴いたらいつでもください。外はずいぶん暑い。大事な人質に具合が悪くなられては困りますから」

視線を逸らさず、一言も口を利かないハルに、諦めたように男はふいと部屋を出ていってしまった。

現れた人間が、黒髪黒目の人間だったなら、自分をハル・アレンとして扱ってきたのならこれほどまでに混乱しなかつただろう。自分がどういう状況にあるのかハルには検討がつかなくなっていた。相手も狙いも分からない。だから、この場を優位にすすめるべき言葉が全く見当たらない。一体、どうしたらよいのだろうか。

。とにかく落ち着け。ハルは自分にそう言い聞かせた。

思考を整理する暇も与えられぬまま、二人の男達が入れ替わりにやってきた。

先の男と同じようないでたちではあるが、明らか違いをハルは直感的に感じていた。

「やあ、ダラメンにしてはきれいな顔しているぞ」

一人は痩身の男。もう一人はかなり大柄な男だ。

大柄な方の男が近づいてきて、すっとんきような声を上げた。屈み込み、顎に手をかけて不躰に顔を覗き込んでくる。

「ふうん」

ハルは思わず目を逸らした。なにかを考えるよりも早く、生理的な嫌悪感が先立ったのだ。卑俗な笑いは、昨日の無頼漢たちを彷彿とさせた。

「猥下はこういう女が好みなのか」

ゲイカ。耳慣れない言葉だった。しかし、ハルにはこの件に関する大事な手がかりのように思われた。思考能力が失われていく自分を叱咤しつつ、言葉の意味を必死に思い起こそうとしていた。しかしそれは次の瞬間、ぞっとするような恐怖に呆気なくも追

い払われてしまう。

「猯下の女を抱いてみるつてのは、魅惑的だな」

興味なさそうに壁にもたれて書物を開いていた痩身の男が、素っ気なく返事をした。

自分がどうい顔をしているのか分からない。けれど、ひどい顔なのだろうと思う。目の前の男は、それをも楽しんでいるようだった。

自分は、ガイゼスの王子だ。

咽喉まで出かかったその言葉を、ハルはあらんかぎりの理性で抑え込んだ。

それを明かすことは、目の前の恐怖を打開することにはなるかもしれない。しかし、それを宣言すれば、事態は今以上にこじれて複雑になってしまいそうな気がした。

こんなときセティならばどうするだろうか。

奔放で快活な青年が、実は頭の回転が速く、冷静な判断力を備えていることをハルは間近で目に知っていた。そして、状況を己で変えられるだけの力を持っていることも。

この世のものとは思われぬほどに美しい容貌をした、頭が良く、屈託がなくて、潔くて、ちよっぴり子供っぽい、行動力のある青年

セティ。その人のことを思い出したとたん、頭はよけいに冷静ではなくなった。こめかみの辺りが熱くなってきて、なぜか涙がこぼれそうになる。

「やめておけ」

壁にもたれていた男が、はじめて書物から顔をあげた。

「猯下はまだ生きている。オリスの神託を報復に受けたくはないだろう」

目の前の伸ばしかけていた手が何かに打たれたようにびくりと震え、男が気味悪がるように肩をすくめた。そして未練がましそうにしながらも離れて、もう一人の男と並んで壁にもたれた。

額に滲んだ汗がこめかみを流れていった。

ハルは息を吐いて、それから目を固く瞑った。

ほんとうならば、耳も塞ぎたいくらいであったが、後ろ手に縛り上げられているのでそれは叶わない。

状況を把握するために積極的に情報を取り入れることも、置かれている状況を推察することも止めた。何も見ず、何も聞かない。そうしなければ、大事ななにかが崩れてしまいそうで、最早、ハルはそうすることしか自分を保っていられそうになかった。

ほどなくして先ほどの男が戻ってきた。

じつと目を瞑って微動だにしないハルを不思議そうに見遣ったものの、部屋にいた二人の男に少女を抱えるように指示をする。

歩きたびに鳩尾が痛んだが、ハルはもうそれを気にすることもなかった。

目蓋の裏が白くなり、容赦のない日差しが肌をさしたのもつかの間のこと、すぐに粗末な輿こしのようなものに押しこまれた。どこに連れて行こうというのだろうか。

最早、死への恐怖は少しもなかった。いつそのこと一突きのもと死なせてくれたのなら、どれほど楽だろう。あるのは、もっとおぞましいものへの恐怖だ。その恐怖に浸食されてしまわぬように出来ることといえば、自分はこのガイゼスの王子だと己に言い聞かせることぐらいであった。

輿が止まり、ハルはまた両脇を抱えられて歩かされた。

潮のにおいをのせた風が頬をなぶり、髪を巻き上げる。あまりの強風に思わず薄く目を開ける。

目を開けると、飛びこんできたのは、陽光を紡いだような美しい、美しい髪をした青年の姿だった。

雲ひとつない抜けるような青い空に白磁の肌をさらし、陽光にあたるとしろがねに輝く宝玉の瞳は怒気をはらみ、射るようにハルの両脇を抱えるものと、そしてもう一人の男を見詰めている。

「お前、やはり昨日の」

男は笑って優雅に一礼した。

「こついうやり方は許さない。私に用事があるのなら、どうして直接言わない」

「直接にあなたさまと相見あいまみえられるほど肝のふとい人間は、我がナデールにはおりますまい」

「だったら周りを巻きこんでもいいというのか。この外道め」

慇懃な男の態度にもセティは全く態度を軟化させるようすはない。柳眉を逆立て、腕組みをしたまま吐きすてる。

「かなりご立腹だな。お美しいお顔が台無しだ」

左側の大柄な男は呟いた言葉の軽薄さとは裏腹に、神妙な顔つきをしていた。ハルの腕を持つ手にもじつとりと汗が滲んでいる。右側にいる瘦身の男は相変らずの無表情で、それどころか、どこか飄々ひょうひょうとしていようにも見える。

二人に両脇を抱えられたハルは事の成り行きと、セティと碧眼の目をした男のやりとりをじつと見ていた。

体が食い破られるような恐怖は、もうない。

それはセティの姿を見た瞬間に氷が溶けるようにして消えた。

状況は相変らず不透明であり、思わしくない。しかし、セティが現れた。それだけで、理性らしいものが戻ってきて、ハルの思考回路は状況を理解するべく活発に動きはじめていた。

「取引をしたいのだろう。さっさと条件をいえ」

まるでセティその言葉を待っていたかのように、男がハルを抱える男達に指示を出す。右側にいた瘦身の男の方が懐から小刀を出し、ハルの細い首筋に突きつけた。セティが訝しむようにそのさまを凝視する。

「慣れないことをするもんじゃない」

「ここはガイゼス王国。その国の流儀に従おうというところです。

いくら我らが剣に不得手といえども、この距離で両手を縛り上げた少女を殺めるくらいはわけがありません。あなた様に法術で仕掛けるよりも、よほど容易い」

「ふん」

セティは腕を組みなおした。

「なにと引き換えだ」

「セティス様のお命と」

間髪を入れぬ答え。刹那、まどっていた烈火のような怒気を身に

おさめ、セテイの口元が歪んだ弧をえがき、妖しい笑みの形をつくる。

「なんだ、そんなものでいいのか」

ナンダ ソンナモノデイイノカ。

ハルの頭のなかを、言葉が意味を成さない音のようにして通り抜けていく。反芻はんすうしようとする頭を止めてしまったのは、歪んだ冷たいセテイの笑みだ。ただならぬ陰気を匂わせるあんな表情は、未だかつて見たこともない。

セテイはそんなハルのことなど気にするようすもなく、それどころかその存在すら忘れてしまったかのように、腕組みをしたまま悠然と、地面と空中との境目の限界に移動する。

再び彼が一同の方に向き直ると、足元の小石が頼りない音を立てて、遙か下のうねりをあげる青い海へと飲み込まれていった。

「ハルを放すのが先だ。そうしたら、私はここから飛び下りよう」

「あなたが飛び下りるのが、先です。それを見届けたら、必ず」

「わかった」

セテイはあまりにも呆気なく頷いた。

「セテイ……」

乾ききった喉から絞り出した声は潮風に溶けて、セテイの耳には届かない。彼の顔には奇妙に歪んだ笑みが張り付いたままだ。

心臓が破裂しそうなほど早く、激しく、脈を打っている。耳なりがしていた。

セテイはちらりとも視線を合わせない。絹糸のような髪が風に巻き上げられて白いうなじが露わになる。

髪が落ちる一瞬に、そこに刻まれた藍色の文様が目に入った。セテイはいつも髪を自然に流したままで、結ったりはしない。あんな場所に入墨があることを、知らなかった。セテイがあんなふうにして、いびつな表情を浮かべることなど、知らなかった。

結局、彼のことなどにも知らないのだ。

セテイが空を仰ぎ、両手を広げた。その顔は満足げですらあり、

まるで天界に帰ろうとする神のおとしだねのようであった。

不意にハルの脳裏にある情景がひらめいた。

長い金色の髪、細い体をした女の後ろ姿。それは、今のようによく晴れた日だった。忘れようにも忘れられぬ、脳髄に深く刻み込まれたあの日。

あのときも、心臓は外に音が聞こえるのではないかと思えるほど、激しく打っていた。喉は干上がり、全身が汗にまみれていた。

その名を呼びたかった。叫びたかった。けれど、できなかった。自分はまた、できないのだろうか。

汗のおいに混じって、かすかなアルベルムの香りが立ち昇ってくる。いつものようにして朝、練り香をつけたことを思い出した。その瞬間、ここ数ヶ月のあいだに手に入れた、胸の置くにしまいこんでいた大事な記憶の欠片が引きずり出されるようにして溢れ、そして飛散した。

セテイが宙に向けて踏み出そうと足を上げた。

「セテイ!!!」

有らん限りの力を込めてその名を呼んでいた。

首筋に突き付けられた刃が食い込み、生温い液体が伝わったが、そんなことはすこしもハルの気を引かなかった。

万感の思いがこめられたその絶叫にも似た声は、セテイを雷のように打つ。

今まさに宙への一步を踏み出そうとしていたセテイは目を見開き、息を吸い、足を宙の半歩手前でつき、際どいところで体の均衡を立て直す。

慌てたのはハルの両脇を抱えていた二人の男だ。いままで気味悪いくらいにおとなしかった人質が急に暴れ出したのだ。

「そこまです。ダイラム卿」

大きくはないのによくとおる、凜とした声が響いた。

「リドルフ卿」

群を抜く長身に、剃髪した頭。粗末な神官衣に、肩から突き出た



大剣の柄。

リドルフはよほど急いできたらしく、珍しく肩を大きく上下させて呼吸を乱し、額には汗が滲んでいた。

「あなたの部下が手にかけているのは、ガイゼス王国の第二王子、ハル・アレン殿下です。それを承知のうえで、このような凶行に及びますか」

「王子…？」

「ナディール人のあなたが殿下に危害を加えるようなことがあれば、ガイゼスという国が黙っていないでしょう。開戦は望むところかもしれませんが。しかし、今のナディールの状況では、あなたの主も困るのではないですか？」

いつもよりも少々早口なれど、その声音も表情もリドルフは平生とほとんど変わりなく、冷静であった。ダイラムは振り返り、首筋から血を流している少女を凝視した。

「殿下を開放し、国に戻るのです。さもなければ」

ダイラムはリドルフが背中ごしに、握ったものをみて冷やかに笑う。

「あなたにそれが抜けますか」

「私は玩具を背負っているわけではありません。必要があれば、いつでも抜きますよ」

大剣の柄に手をかけた平素は慈愛に満ちた穏やかな空色の瞳が、冷やかな光を放ったようにも見えた。

「その人を解放して差し上げる」

すぐさま指示には従わず、物言いたげな二人の部下に向かって、ダイラムは苦笑した。

「リドルフ卿のいうことが真実かどうかの問題ではない。オリスが二人も相手では、あまりにも分が悪いからね。それだけのことさ」

口を開こうとした大柄の男を制し、右側の痩身の男は黙ってハルの両手を縛めている縄を切り、両手でハルの肩を押した。その勢いでハルは数歩よろめいて、セティの手前五カベル（約二・五メー

トル)ほどの位置で膝を着いた。

「また、お目にかかることもあるでしょう」

長い髪をなびかせたまま、放心したようなセティに向けて慇懃に一礼するとダイラムは二人の部下を連れて踵を返した。すれ違いざまにリドルフに向けても笑いかけたが、リドルフが反応を示した要因はダイラムではなかった。

「シユレバ……」

切れ長の瞳を大きくして信じられない、というように呟いた。

瘦身の男がリドルフを一瞬だけ見た。しかし、その顔は無表情だった。

三人の姿が見えなくなると、リドルフはすぐさまハルに駆け寄った。切れた首筋と腹を押さえる両の手首は紫色の痣になっていた。

「ハル様、お怪我は」

「大したことはありません」

ハルの返答はしつかりしており、膝についてはいたが毅然としたものだった。

「それよりもセティを、セティのようすがおかしいのです」

ハルの視線のさきで、セティは未だ呆然自失としたまま立ち尽くしていた。ぞつとするような歪んだ笑みはなかったが、そのかわり表情の失せた顔はつくりものようだった。

リドルフは頷くと静かにセティに歩み寄った。そして、いきなり白い頬を引つ叩いた。

「リド……」

「一体なにを考えているんです」

リドルフの顔も、声もさきほどとは比べものにならないほど険しい。

「自分の命を、そんなふうに扱って」

セティは打たれた頬を押さえることもなく、無表情に呟いた。

「ここで、死んでもいいと思ったんだ」

うつむいたのに合わせて、金色の髪がさらさらと流れる。

「それで、ハルが助かるのなら、それでもよかった」

「馬鹿な子ですね」

リドルフの声は、いつもの穏やかなものに戻っていた。

「あなたが飛び下りたあと、ダイラム卿がハル様を解放する確証がどこにあるというんです。助けにいったのなら

あなたがハ

ル様の友人ならば、きちんと最後まで見届けなさい」

鏡のように磨き上げられた上等な大理石の卓のうえに、無数の紙片が散乱している。

この時代、紙は日用品であるとは言えない。文字を記すのにもっとも一般的なのは羊皮紙である。しかし、大陸でも一、二を争う文明都市へと変貌を遂げた眠らない街、トゥルファでは紙はそれほど珍しいものでもない。外交官や大商人が宿泊するような宿の部屋には書きつけのための紙が必ず備え付けられているし、商人達が取引の際に交わす書類も紙が使われるのが常である。

背もたれから肘掛にかけて、職人の手作業による細かい細工がほどこされた見事な椅子にのけぞるような格好で、腕を組み、思案していたダイラムは部下に呼ばれて瞑っていた目を開けた。

「指示どおりにできましたが、本当にこれでいいんですか？」  
床に描かれた規則的な神霊文字サイラットを一瞥すると、ダイラムは紺色の瞳を細める。

「それでいい、そのまま送っておくれ」  
笑みになにか含むものを感じ取った部下は、訝しげに上司を見遣った。

「なにか？」  
「いいや、完璧な仕事だよ。フォンは、外見からはちょっと想像できないぐらいほんとうに几帳面に術式を守るな、と思ってね」

フォンと呼ばれた大柄な男は肩をすくめ、さらに薬草をつけた指先で文様の一部に神霊文字サイラッドを書き足した。

「ダイラム様ほどではありませんよ。外見からは考えられないほど肝が据わっていらっしやる。こんな報告書を送ったら、お頭さまがお怒りになるとは思わないんですか？」

「お怒りになどならないさ。この仕事がどれほど難しいかはあの方が一番よく分かっているらっしやる」

「それは、そうでしょうけど」

風の精霊<sup>エアル</sup>を自在に操る通信役であるフォンが、ダイラムから指示された本国への報告内容は、任務の失敗を簡潔に告げる内容であった。一切の経過説明も状況説明も、なにもない。失敗したという事実そのみである。

「過程など無意味さ。完了しないかぎり、それはなにもなかったのと変わらない。そうだろうか？」

あっけらかんとそう言われれば返すことばもない。フォンは諦めたように、「発動シユダイ」と唱えて、術を完成させた。これで、今回の件に関する報告は、明日の夜にはナディールの首都、ハプラティシユに着くはずだ。

「それにしても、どうしてセティス様はガイゼスの王子と行動を共にしていたのか……」

「あの女はほんとうに王子なのですか？」

「シユレバに情報を集めてもらっているが、可能性は高いだろうな。端正な顔立ちに、少女のように華奢な体。噂に聞く第二王子の姿とあまりにも当てはまる」

「女のようにしか見えませんが」

「最初に見たのが、女の姿だったからね」

ダイラムは苦笑した。整っているというよりは、どこか愛嬌のある顔立ちは人好きされやすい。

部下に対しても必要以上に立場を誇示することはなく、気取らない口調で話すため、彼に好意を覚えるものは多い。しかし自分より年少のこの男が機知に富み、また、信じられないような冷血な部分を備えていることをフォンはよく知っている。そうでなければ、国に行く先を左右するような、神オリスに逆らうような仕事の指揮を任せられるはずがないのだ。

「猥下<sup>げいか</sup>がどういつ目的で王子と行動をともにしているか、よく調べ必要があるな。それがはっきりとするまでは手が出しにくい」

「面倒なことになりましたね」

「フォンは、猊下をはじめて間近で目にしてどう思った？」

唐突に話題を転換されて、己の頭を切り替えるのにフォンはほんの少しの時間を要した。ダイラムのこういうところにはすでに慣れている。

「美しさは噂以上ですね。とても、この世のものとは思えません」

「確かにね。でも、それだけ？」

「怖い。そう思いました」

ダイラムは満足げに微笑んだ。

「正直でけっこう。ナディール人ならば誰でも、セティス様は崇敬と同時に畏怖の対象にもなる」

「ダイラム様も？」

「私は神オリスなど信じていないからね。例外というものは何事にも存在するさ」

やや婉曲的に否定をして、ダイラムは手にしていたペンを器用に回転させて柄のさきで自分のこめかみを軽く二度突いた。

「だからこそ、私にはリドルフ卿が猊下と一緒に出奔したことも、ガイゼスの王子と行動をともししている理由も分からない」

「どついう意味で…？」

ダイラムは口元だけで笑うと、筆の柄を訝しがる目の前の部下に向けた。

「フォン、陛下やネトル台下が秘密裏にリドルフ卿かセティス様と接触した形跡がないか、精霊たちに調べさせてくれ。この街には、ずいぶん大地神アナリの神官が入っているようだからね」

「はい」

「あまり派手には動かすなよ。リドルフ卿とセティス様、それにカトラスあたりはすぐに気がつく。今、捕まるのは得策とはいえない」

「承知」

フォンが部屋を出て行ったのと入れ替わりに、もう一人の部下をダイラムは呼んだ。

彼が携えてきた情報の書かれた紙片にひととおり目をおし、労

をねぎらうとダイラムは部下にかけようように言う。

「さて、シユレバは、大地神の元神官長リドルフと面識があつたのかい？」

無表情の顔が、じつとダイラムを見詰めた。

「別に詮索したいわけじゃない。はじめに伝えたように、我々のような生業のものに素姓など無意味な情報だからね」

ダイラムはペンを卓のうえに置いた。紙片がかさりと音をたてる。リドルフ卿の存在は我々にとって、大きな障害になっている。法力だけでも十分に手ごわい相手なのに、国を出るときにあんな物騒なもので背負ってしまった。それに、今日という好機をものにならなかったことによつて、リドルフ卿はより一層セティス様のお側を離れなくなるだろう」

シユレバは子供がするような仕草で頷いた。

「もしもなにか我々にとつて優位になるような情報があれば、知りたい。それだけだ」

青年の翡翠のような目は鏡面のようにな磨かれた大理石の卓の一点に注がれていた。ダイラムは小首を傾げ、彼が口を開くのをずっと待った。

「あの人は……ずっと以前から優れた術者で、完璧な人でした。私  
が知っているのは、それだけです」

「そうか、分かった」

ダイラムはまたペンを取り、器用に手のなかで回転させる。

「下がつていいよ。今日はもうお前も部屋に戻つておやすみ」

感情の欠落したような顔のまま戸口で一礼をして、踵を返した青年を見送り、ダイラムはまた椅子にのけぞつた。

「神官長リドルフ、ガイゼスの第二王子……」

持っていた筆の柄でこん、と大理石の卓を一つ叩く。

「さて、どうしたものか」

はつきりとした強い清潔感ある匂いのなかに、どこか優しさをも秘めた独特の香りが部屋を満たしていた。

ハルは寝台に横になったまま、この香りにいつのまにか安堵を覚えるようになった自分に気がついた。リドルフがいつも治療のときに使うこの薬草の匂いは、彼の体にも染み付いている。

薬を入れた乳鉢を手にした優しい目をした青年が視界に現れた。

いつものように穏やかな声で「失礼します」というと、そつと首筋を覆っていた布をはがす。首筋をぬらした清潔な布で丁寧に拭き、傷口をあらためると安堵したように小さく息を吐いた。

「出血量のわりには傷は浅くすんでいますよ。大丈夫、これならすぐによくなります」

ハルの細い首に斜めに走った傷口は、見事に頸動脈を横断していたのだ。あともうほんのわずかでも深く刃が食い込めば、大惨事は免れなかったであろう。

「薬を塗りますからね。少ししみますよ」

構えてはいたものの、薬草を水に溶いたものをつけたリドルフの指先が傷に触れると、ハルはわずかに眉をしかめた。

「すぐにおわりますから、もう少しだけ我慢してくださいね」

青色の瞳がやさしく微笑む。極端に高くも低くもないその声音は心地よく響き、落ち着かない心をなだめていく。ガイゼス人であるハルには「神」というものの観念が薄い、もしも存在するとしてもそういうものだろうと、屈託なくそう思えてしまう、そういう瞳だ。

リドルフは南東の高台からずっと、ハルを背負い、そしてセティの手を引いてきた。

解放された直後は気分が高揚していたせいかハルは、不思議と首も腹も痛みは感じなかったが、体に力が入らず、体は思ったように



動かなかった。首からの出血が続いていた。昔から医師に血が人より少ないから気をつけるようにと言われていたのを思い出した。

家にはすでにリドルフが手回しをしたらしく、メイラが待機していた。

彼女は王子の首筋にとめられた血の滲む布と、紫色に変わった手首を見て顔色を失った。そして、リドルフに手を引かれ、木偶のように歩くセテイの姿に眉を顰めた。

いつも使っている寝室の寝台にハルを下ろして寝かせると、リドルフはセテイをひよいと横抱きにして彼が使っている寝室に連れていった。気が強く、快活なはずの青年はされるがままだった。

一度にいろいろなことが起こりすぎて、なにがなんだか分からない。

しかし、閉じた目蓋の裏に一番に浮かんでくるのは、セテイの歪んだ笑いだ。あれは、一体なんだったのだろうか。

「ハル様？」

気がつくのと、いつのまにかリドルフが遠慮がちに顔を覗いていた。ハルがはっとして視線を合わせると、よく澄んだ青い瞳がまるで心を見透かしたようにまた穏やかに微笑む。

「なにか伺えばよいのか、頭のなかをうまく整理できないのです。寝台のうえに体を起こそうとするハルを、リドルフは止めなかった。それどころか逆に薬の入った器を置き、華奢な少年の背と寝台の前板のあいだにケットをまるめたものを差し込み、体を起こしやすいうように気遣ってやる。

「何かからお話するべきなのか、私も迷っています」

ハルは大きな安堵のようなものに包まれたような気がした。この人に心押し隠すようなことはしなくていいのだと、理屈抜きでそう思える。

「セテイがああいう顔をするのを、私は知りませんでした」

心によどんでいたものをハルが吐露すると、リドルフは面食らったような顔をした。しかし、それは一瞬のことで、すぐにいつもの

ように人を包み込むような穏やかな表情を浮かべた。

「がっかりしましたか？」

ハルが慌てて首を振る。

「そんなこと。ただ、哀しくなりました」

「どうしてですか？」

「私はセティの友人だと思っていました。それなのに、彼のことはなにも知らないのだと、あらためて痛感して」

ハルは長い睫を伏せた。

「独りよがりで自己満足的な感情かもしれませんが、でも、私はいつも私を支えてくれる大事な友人のことをもっと知りたいし、そうすることによって、与えてもらうばかりではなくて、逆になにかを提供したいと、そう思うのです」

「それは、独善でもなんでもありませんよ。とても、自然で健全な感情です」

視線のさきでリドルフがこのうえなく優しく微笑し、それから少しづつまを正した。

「人には誰にでも陽の部分と陰の部分があります」

「はい」

「陽は光。光が強ければ強いほど、陰もまた、深くなるのが条理というものです。そして、セティはとても強い陽の部分を持っています」

ハルは師匠に教えを請う弟子のように素直に頷いた。

「セティは周囲に陽の部分だけを強く求められすぎてきたのです。そして、その期待にも十分応えてきました。しかし、陽と陰の関係は今お話ししたとおり……。あの子は陽の部分だけを求められるあまりに、陰の部分を昇華させることもできず、いつしか闇は己でも認識できないくらいに濃く、深くなってしまいました」

「陰の部分……」

「そして、今やそれは何人の干渉を許さず、ときにはセティ自身を飲み込もうとすることさえあります」

「では、どうしたら闇は昇華できるのですか？」

リドルフは哀しげに首を降った。

「彼の闇はすべてを拒絶します」

「リドルフ殿も？」

静かに頷くリドルフが、ハルには信じられなかった。傍目に見てもリドルフはセテイをひどく大事にしているし、セテイもまた彼をよく信頼しているように思える。それなのにそのリドルフですら、彼の闇というものには手がつけられないのだろうか。

「けれどハル様は、セテイの闇に触れられるかもしれないかもれません」

不意に、思いもよらぬ言葉がリドルフの口から飛びだしてきて、

ハルは驚愕をこえて狼狽した。

「私にそんな大それたことは」

「あのとき、ハル様がセテイを呼んでくれなければ、あの子は間違はなくそのまま飛び降りていたでしょう」

「あの場には、リドルフ殿がいらしたではないですか」

「いいえ」

リドルフはまた哀しげに、というよりは苦しげに首を振った。

「あれは私では駄目なのです。ああいうときのセテイに私の声は届きません。誰の声も響かない。けれど、ハル様の声は確かにセテイを打ちました」

無我夢中でただその名を呼んでいた。驚くほど大きな声が、腹の底から沸いてきて、思い返せばどうしてそんなことができたのか、自分でも分からなかった。

「でも、なんとなく私にはその理由が分かったような気がします」

「理由：ですか？」

「セテイがどういう人間なのか、彼がどうして命を狙われたのか、ハル様は当然それを第一に気にされているだろうと、私は思っていました」

ハルは口を片手で覆い、赤面してうつむいた。今更ながら自分の着眼点がひどく的外れだったように思われて気恥ずかしかった。確

認しなければいけないことは他にも多々あった。それなのに口を開いてみれば、真っ先に飛び出したものはそれだった。

「けれど、ハル様が一番に目を向けてくださっていたのは、セテイの闇の部分、彼の本質でした。そして、私にはそれがとても嬉しかったのです」

リドルフの笑みはいつものものとは種類が少し違っていて、ハルはリドルフのこういう顔もはじめて見た気がした。

「セテイが国でどういう立場で、どうして命を狙われたのかは私の口からお話しいたしません。それをすれば、友人に勝手なことをするなときつとセテイに叱られるでしょう」

澄んだ瞳が真っ直ぐにハルを見つめた。

「ハル様」

「はい」

「これからもどうかセテイの友人でいてやって下さい。ハル様のような友人ができて、セテイは本当にしあわせなのです」

黒。真つ暗な世界。

自分の両の手のひらさえも確認できぬ、不確かで得体のしれない世界。

どこに向いているのかも分からない。それどころか、天と地の境すらもおぼろげな空間をあてもなくさまよう。

どのくらい時間が経ったのだろうか。どのくらい進んだのだろうか。

いつまで経っても、どれだけ歩いてもなにも変わらない。なにも見えない。

早歩きになり、小走りになり、そして全力で駆ける。

息が切れ、汗が流れ、足がもつれてきてもなにも世界に少しの変化もない。けれど、駆けることもやめられない。諦めてしまえば楽になれるのに、それもできない。

前触れもなく鋭い痛みが胸をつらぬく

つんのめり、そして

倒れた。

腹から、腿から、頬から伝わる、ぞつとするほどに冷たい感触。

からだのなかから、なにか大事なものが抜けていく。

このままではいけない。このままでは終われない。立ち上がらなければいけない。

しかし、起きあがろうとしても、足にも腕にも力が入らない。そのうちに意識が曖昧になってきて、目蓋が重くなってくる……。

セテイは飛び起きた。

右手で胸を掻きむしる。全身が汗にまみれていた。

肩を上下させて呼吸をしていると、衣擦れのかすかな音とともに

人の気配を感じた。

「目が覚めたか」

「……婆さん」

メイラは汲んできたばかりらしい清水を杯にそそぎ、セティに差し向けた。セティはそれを受けとると一息に飲み干した。その動作を二度ほどつつづけ、無造作に手の甲で口元を拭い、眼前の老婆を見つめた。

「そこに着替えがある。ひどく汗をかいていたから、着替えたほうがいい。腹は、空いているか？」

矢継ぎ早に尋ねられ、気圧されたセティが曖昧に頷くと、メイラがいつもどおりの厳しい顔で言った。

「何かもってこよう」

寝台のわきに水差しと杯をおき、メイラが立ちあがった。出ていこうとしたその小さな背中をセティが呼びとめる。

「どうして、婆さんが」

「殿下はリドルフ殿に任せたほうがいい。童わっはを見ているぐらいなら私でもできるだろ」

メイラがセティの顔を見て、そっけなく付け加えた。

「殿下は軽傷だ」

階段を降りていく律動的な足音を聞きながら、セティは大きく息を吐き出した。

吐き出された息にはかすかに酒の臭いが残っていた。

嫌な夢を見ていた。二年ほど前から毎晩のように見るようになったあの夢を、故郷から出て見たことはあまり、ない。

家につくなり、珍しくリドルフのほうから酒を勧められた。言われるがまま、葡萄酒シャルルをあおり、寝台に横になった。飲み慣れたシャルルの香りのなかに、いつもと違う香りが混ざっていた。なにが入れられているのかは、ほとんどすぐに気がついた。その心遣いが癢にさわるようで、でも、ありがたいような気もした。どちらにしても不満も謝辞も口に出す気力すらなくて、誘われるままに眠りに落

ちた。

ハルを助けにいったはずだった。

馬鹿に丁寧な対応の昨日の男と、後ろ手に縛り上げられた格好で両脇を固められたハルの姿を見た瞬間、体中の血が沸騰するような感覚に陥った。

しかし、途中から記憶が曖昧ではつきりしなくなる。

何かに操られていたような気もする。けれども、あれも自分なのだという気もする。

黒くてどろどろしたようなものが、体の奥底から這い出してきて、抗うすべもなく浸食されていった。一体あれはなんだったのだろうか。

セティは肺を空にするほど大きく息を吐き、一つ頭を振ると勢いよく反動をつけて立ち上がった。汗で背に服が張り付いて気持ち悪かった。

きちんと畳まれた着替えの脇には、体を拭くために濡らして固く絞られた布もあった。上衣を脱ぎ捨てて体を拭き、着替えた。洗濯したてらしいそれは陰気のかけらもない太陽の匂いがして、セティはなんだかいたたまれない気がした。今更ながら、リドルフに叩かれた頬がじんじんと痛んでいるような気がした。

「おっ、ちゃんと着替えたな」

戻ってきたメイラは手に盆をのせ、そのうえに置かれた器からは湯気が立っていた。なんともいえぬ食欲をそそる匂いが部屋に広がる。

「好き嫌いなどないだろう。大食らいのくせにどうした」

いつまでも手をつけようとせず、腿のうえに手を揃えてうつむいたままのセティの顔をメイラが覗き込む。

「リドルフ殿は、口の中は切れていないと言っていたが、どこか他に痛むのか？」

「婆さん」

ぎゅっとセティは拳を握った。

「私のせいでハルを危険な目に遭わせて、しかも、怪我までさせた」

「ああ　　大体の話はリドルフ殿から聞いた」

メイラはセテイの斜めよこに腰掛けた。

「けれど、どうしてそれが小童のせいということになるんだ？」

セテイが弾かれたように顔を上げる。

「だって、ハルは、私と取引するために人質として攫われたんだ。

私のせいじゃないか」

「では、殿下をお守りするためにアイデンの町の側で多くの部下が死んだのは、殿下のせいか？　カイが瀕死の重傷を負ったのも殿下のせいか？」

「それとこれとは違う」

「なにも変わらないさ。それと同じことだ」

メイラはふつと顔をゆるめた。

「だいたいにして、小僧が責任などということを考えること自体が小賢しい。そういうことは大人が考えるものだ」

「婆さん……」

「分かつたらさっさと飯を食い、その似合わない鬱陶しい顔をなんとかしろ」

ぶつきらぼうに言い捨てて、いつもようにふいと横を向くメイラにセテイは少しだけ救われた気がした。それは詭弁に違いなかった。それでも、セテイはメイラがそう言ってくれたことが嬉しかった。目が覚めて、側にいてくれたのがリドルフではなくメイラで、よかったと思つた。リドルフだったなら、いつものように甘えて心にもない言葉を浴びせてしまいそうだった。

器に入っていたのは米を色とりどりの野菜と何かのスープで一緒に炊いた料理だった。匙さじをとり、口に入れると優しい味が口中に広がる。

「うまいな」

「そうだろう。それは、私の得意料理だ」

「ふうん」



「剣の試合に負けた夜、息子によく食べさせた」

息子がいたのか。そう言おうと思った。しかし、メイラの目が見たことがないくらいに穏やかで、優しく、遠くを見ているような気がしてその言葉を飲み込んだ。

ガイゼスで食べたどの料理よりも、故国で食べたどの料理よりも、メイラの手料理は体にしみわたるようで、ひどく美味かった。

「婆さんの息子はきつと幸せだな」

いくらか熱の和らいだ橙色の光が差し込みはじめていた。

賑やかだった港には人影がまばらになり、かわりに灯りの点りはじめた繁華街が賑やかになりはじめた。湿気を含んだ生ぬるい海風を浴びながら飲む、冷えた麦酒フエーガが仕事を終えた体に染みる時間だ。

居住区の一角にあるこの小さな借家でも、いつもなら一同が会して夕食を取りはじめる時間である。しかし、今、食卓についているのは剃髪した頭に切れ長の空色の瞳をした青年と、美しいブロンドの髪を自然に流したままの稀代の美青年の二人だけであり、彼らの前にも夕食はなく、あるのはすでに中身が温くなった杯だけである。「婆さん、遅いな」

ふつ、とため息をつくその姿を悩ましげに見せるのは、彼の美貌が成せる技にちがいない。しかし、傍らのリドルフはそんなようすを見遣って、慈母のような表情を浮かべるだけであった。

メイラは先ほど、街のようすを確認しに出て行った。

彼女の心のこもった料理をたいらげたセティは、人心地つくと同時に、ハルを追うあいだに覆面に襲われて四人を切ったことを思い出した。トウルファはおおくの人種が滞在、居住する一大貿易都市である。当然、それに見合うように治安機構は整備され、正確に機能している。路地で人が死んでいれば、騒ぎになっていないはずがなかった。

騒ぎになっているようならば、役人の手が伸びるまえにトウルファの都督であり、ハルの実の叔父にあたるロガン公のもとに駆け込んだうえで、事情を説明するのが得策であると思われた。拘留されたうえで、彼らの身元を明かせば事態はよけいに混乱するに違いない。しかし、逆に騒ぎになっていなければ、それはそれで憂慮すべき事態でもある。一味を差しむけたのが、トウルファの保安機構をも操作できる権力のある人物である、ということを確認するような

ことであるからだ。

今から三刻ほどまえに、階下したにおりてきたセテイは、いつも皆で食事をする広間にリドルフの姿しかないと認めると、ばつが悪そうに頭をかき、それでも無言で卓をかこむ椅子に腰かけた。リドルフの方もなにも言わずに二つの杯を取り出し、一つをセテイの前に、もう一つをその隣の空の椅子のまえに置き、自分も席についた。

「心配かけて、悪かったな」

中身を半分ほど減らしてからセテイが呟くように言った。

リドルフはおもむろに手をのばすと、セテイの顎に手をかけ、親指で唇のはしを軽く押す。

「やっぱり、切れていないですね」

セテイが彼の突発的な行動の意味を理解したのは、そう言ったりドルフがいつものように穏やかに微笑んでからだだった。先制攻撃を受けたようなばつの悪さに思わず、手を振り払い、腕組みをして横を向く。

「リドの生易しい張り手で切るほど、ヤワじゃない」

すべてを見透かしたように空色の瞳が細められる。

「ハルのようすは……どうだ？」

「怪我自体は重傷のものはありません。ただ、熱が出てきたので、薬を飲ませました。今は眠っています」

「そ、か」

うつむいたきりセテイはなにも言わなくなった。リドルフもなにも言わなかった。

メイラが戻ってきたのは、街が宵闇に包まれはじめたころだった。セテイが四人を斬ったはずの路地に遺体はなかった。それどころか、血に汚れたはずの地面や壁まできれいに洗い流されて乾いており、周囲の住民に尋ねても役人がきた形跡はまったくなくという。まるで、そこで騒ぎがあったことなど夢か幻のようだというのだ。

一応メイラはセテイにその場所を再度確認した。しかし、それは

彼の言うことを疑つてのことではない。彼女はセティのことを「小童」扱いしてはいるが、実のところ彼女のなかで青年の評価は決して低くない。彼が場所を勘違いした可能性など、ほとんど考えていないのだ。

「ということとは、全ては迅速に処理されたということでしょうか」「黒幕がほんとうに王太子殿下なら、そのぐらい造作もないだろうな。さて」

メイラはいったん言葉を切つて、それからリドルフとセティの真正面に座り、続けた。

「早急に動く必要はなくなつたところで、詳しい話を聞かせてもらおうか」

息を詰めてセティがリドルフを見る。リドルフは金色の頭をひとつ優しく叩き、それからメイラに向き直つた。

「私は今日、郷里の人間と会つて話をしてきました」

リドルフの声音は、平生となにひとつ変わらない。

「そこで、セティの命を狙うものがあることを知りました」

「小童の命……」

「あまり詳しくお話ししないほうが、メイラ様とハル様のためにもよろしいと思うのですが、これだけはお伝えします」

リドルフは息を吸い、一息に言った。

「セティはナディールで非常に大きな影響力を持つ立場の人間です」メイラが目を見開き、セティの端麗な面を注視する。青年は視線を落とす、卓の一点を見つめていた。

「彼は二年ほど前に、国を出奔しました。むろん、その時から命を狙われていたわけではありません。彼は本来、崇敬されるべき対象であり、決して忌まれる対象ではありません。しかし、王都を離れているあいだに情勢が変わり、彼を疎んじる勢力が現れたようです」

セティもはじめて知る内容である。今日、リドルフは大地神アナリの神官に会い、それを確認してきたのだらう、と思った。

「道中での法術を使った襲撃は、いずれもハル様ではなくセティを

狙ったものでした。そして、今日の一件も、セティを亡きものにするためにハル様を巻き込むような形でした」

リドルフが立ち上がり、深々と頭を下げる。

「これはすべて、彼の守護として、従者として同行している私の浅慮と力不足によるものです。ハル殿下を巻き込み、危険な目に遭わせたことを心よりお詫び申し上げる所存です」

「リド！」

セティが椅子を揺らせて立ち上がる。

「どうしてリドがそんなことを言うんだ。悪いのは私で

」

「セティ」

リドルフが穏やかな瞳で見つめた。

「部屋に戻っていなさい。私は、メイラ様とこれからのことを相談しなければなりません」

「これからの……こと？」

「ガイゼス王国の王子殿下を、ナディールの人間が危険な目に遭わせたのです。簡単にすまされることはありません。これは、外交問題に発展してもおかしくないことなのですよ」

言葉なくうつむいたセティに、メイラが続けた。

「大人同士の話だ。小僧は引っ込んでいろ」

セティは言いかけた言葉を飲み込み、しばし目を瞑り、そして手のひらを固く握って踵を返した。勢いよく階段を駆け上がる音がリドルフとメイラの二人きりになった空間に響く。その音を止むのを待つて、メイラが苦笑した。

「厳しいことをいう」

「甘やかすばかりではいけませんので」

目尻の皺をさらに深く刻んだメイラに、リドルフは改めて向き直った。

「本当にこの度のことは、なんとお詫び申し上げてよいのか

いえ、お詫びなどですまいことは重々承知しております。しかし、ただ一つ、お伝えしたいのは、セティにやましいものは微塵もない

ということですよ」

空色の澄んだ瞳がまっすぐにメイラに向いていた。

「何もかもを捨てて国を出たというのは、真実です。彼に政治的な意図などは全くありません。下心があつて王子殿下、、、に近づいたのではなく、ただ、純粹にハル様、、、のお人柄に惹かれてのことですよ」

「そんなことは、とうに分かっている」

メイラは手振りでリドルフに座るように言う。

「そうでなければ、殿下がああいう表情をお見せになるはずもない。おいたわしいほどに、神経の細やかなお方なのだ」

リドルフが頷いた。ハルの人柄は、ここしばらくのあいだ寝食をともにしてきたリドルフにもなんとなく掴めている。

「それに、セテイ殿に嫌な気がないのは、剣を交えた私にもよく分かる」

メイラが顔をゆるめる。

「巻き込んだのは、お互いさまだ。ハル様は王太子殿下にお命を狙われているかもしれぬ。」

我国のお家騒動にナデイルで政治的に影響力のある御仁が関わっているとなれば、貴国の重臣たちも心穏やかではいらぬでしょう。余計な猜疑をかけられるやもしれぬ」

リドルフは肯定も否定もしなかった。それこそが、彼がなるべく他人との接触を、特に身分や社会的地位の高そうな人間と極力関わらないようにしてきた理由であつた。すべては大人達の彼を利用しようとする勝手極まりない思惑や、あらぬ疑いからセテイを守るためにしてきたことだ。

「アイデンでお二人に会わなければ、殿下はそこで終わりだつたいう気もする」

セテイの剣技とリドルフの法術がなければ、現実にはラガシュまで到達することは難しかった。しかし、それ以上に彼の存在がなくては、ラガシュでシノレから話を聞いたハルが、剣を持ち、立ち上

がることもきつとできなかつた。それは、七年間もずっと側に仕えているメイラが一番よく分かつていた。

「リドルフ殿、これは難しい申し出だと私もよく承知している。それでも、聞いていただきたい」

「なんでしようか」

「セテイ殿に当面、国にお戻りになる予定がないのなら、もう少しだけ殿下の道行きにお付き合いただけないだろうか。そのためならば、私はセテイ殿と殿下の身の安全のために、卑小の身ながら尽力したいと思っていますのです」

卓のうえに組んだメイラのしわだらけの手が、震えた。

「今の殿下には、どうしてもセテイ殿が必要なのです。そうでなければ、殿下のお心はしおれてしまう」

リドルフはアイデンの町での、あの夜のことを思い出していた。

一見して身分の高い人間だと分かる、小柄な少年の頼みをセテイは容易く受け容れた。自分が置かれている状況も、リドルフが危惧していることも全てを承知のうえで。あのときから、ダイスは投げられたのだ。転がり続けるダイスを止めることは不自然だ。

「私も同じことを申し上げようと思っておりました」

「同じこと？」

「今のセテイにはハル様が絶対的に必要です。今日、私はそれを確信しました」

「では」

「私も力を尽くします。だから、もう少しだけ、セテイをハル様のお側にいさせて欲しいのです」

セティは階段を駆け上がったそのままの勢いで部屋に入り、寝台に力なく倒れこんだ。

決して上等ではないが小まめに洗濯された、清潔な寝具のうえに金色の絹糸のような髪が扇状に広がる。

これは、外交問題に発展してもおかしくないことなのですよ。

頭の中でその言葉がぐるぐると回っている。

少し考えれば思い行き着きそうなものなのに、どうして今まで思い当たらなかつたのだろうか。一瞬、らしくないとも思ったが、すぐに自分はこの程度なのだと思います。

リドルフが大人だと感じるのはこういうときだ。

悠然というよりは超然としていて、うろたえたり、動揺するところなど見たこともない。

いつでも物事を客観的に捉え、冷静に対処していく。今の自分の年齢としのころも知っているが、それでも今の自分とは全く違ったような気がする。

ああ、でも、そのリドルフに殴られたのだ。

しかも、よく考えてみれば、誰かに殴られたこと自体はじめてだった。

不意に笑いがこみ上げてきて、セティは声を押し殺して、一人笑ってみる。殴られた理由はいまいち理解できていないが、リドルフに殴られたのだと思つたらなんだか不思議と悪くない気分だった。

ひとしきり笑ってから、寝台のうえを転がって脚を床に落としたまま斜めに大の字になる。

今夜は新月のようで部屋に差し込む明かりは弱い。いつもは不快に思えた生ぬるい潮風が肌をなでて、今はそれがいとおしく感じる。



薄暗い部屋で黄土色の天井を見ながら、脈絡なく浮かんでは消える雑多な思考にしばしのあいだ身を任せてつかのまの逃避をしても、やはり避けようもない重い問題が頭をもたげてきて、セティは否がおうにもそれと正対しなければいけない。

これから、どうなるのだろうか。

リドルフはメイラとこれからのことを話し合おうと言った。国の人間から、自分の命を狙っているものがいることを聞いたとも言った。メイラは難しい顔をして腕組みしていた。リドルフはメイラに何と言うのだろうか。メイラは何と答えるのだろうか。やは

り、国に戻らなければいけないのだろうか。国に帰るということはハルとは別れなければいけないということか。

ハルと別れる。考えがそこに到達した瞬間、セティは固まった。

心のなかを突如、まるで故国の冬の夜のような寒々しい風が吹き抜けて行く。目の前の情景がたちまち色あせていく。驚くほど衝撃を受けている自分が意外すぎて、またそれに戸惑う。一体どうしてしまったというのか。

「セティ」

自分のなかに没入していたセティは、遠慮がちに自分の名を呼ぶ少し高い声に、おおいに驚いて跳ね起きた。

「ハル」

戸口に立つ、寝巻き姿の黒髪の少年がはにかむように笑った。

「階下したに降りようと思ったら、姿が見えたので」

「ふらふら歩いたりして大丈夫なのか？ 怪我は、痛まないのか？」  
大股に、ハルに近づいた。

「熱は？」

セティはやおら屈みこむと、自然な動作で自分の額をハルの額につける。万人を恍惚とさせ、歎息させる類稀な美貌を至近距離で見せつけられたハルは慌てて顎をひいた。

「もう下がりました！」

俯いたハルに今度は手を伸ばして、セティは額に触れた。

「まだ熱い。まだ、下がってないな」

セティはハルの腕を引くと、「いや」とか「あの」とか何度も言いかけたハルをもものともせず、自分が寝転がっていた寝台に寝かせた。結局、丁寧にケツトまでかけられて、宝玉よりも希少で美しい瞳に優しくみつめられてはハルもなにも言えなくなってしまう。

「セティ」

寝台の縁に腰掛けたまま、ぽんぽんと優しくケツトのうえを叩く青年の名をハルは呼んだ。

「なんだ」

「助けにきてくれて、ありがとう」

淡い月明かりに照らされた、白い面が力なく笑う。

「あれは私のせいだったんだ。それに、私は　　きちんと助けられなかった」

「いいえ。私は、セティの姿を見たとき、涙が出るほどほっとしたのです」

情けない話ですが、とハルが苦笑する。

「来てくれて、本当に嬉しかった」

屈託のない瞳がセティにはひどく眩しかった。薄闇のなかで漆黒に見える、真っ直ぐに向けられたこの瞳から目を逸らしてはいけない、そう思った。

「ハル」

無垢な瞳が不思議そうに見つめていた。

「私は……私は、ナディールで　　」

意を決して紡ぎはじめた言葉はそこで呆気なく止められた。口を、柔らかい、小さな手のひらに覆われたのだ。

「言わなくていいのです」

体を起こしたハルがセティの口を手で覆ったまま言う。

「あなたは私の失いがたい大事な友人です。それだけが、私にとっ

「唯一で、絶対の事実です」

澄んだ瞳が視界のなかで笑った。

それを認めた瞬間、セティは心に広がっていた暗雲が音をたてて引いていくのを感じた。それどころか、なにか優しい光のようなものに心が満たされていく。未だかつてこのような感情を覚えたことがあつただろうか。誰かの言葉に、これほどまでに心が震わされるようなことがあつただろうか。

メイラとリドルフが何を話しているかなど、もうどうでもよかつた。二人の下した決断がなにであろうと、明日の朝一番にすることはもう決めた。そうだ、自分はセティス・クラヴァン・オリスではなく、セティ・コヴェエだつた！

セティはハルの細い、紫色に変色した手首をやんわりと取った。

「どこかで聞いた科白せりふだな」

あ、とハルが口を覆つて赤面する。

「でも、もっと、ずっと上出来だ」

セティは顔をくしゃりと歪ませて、弾けるように笑った。

スカーレットにカーマイン、ローズピンク、ジョンブリアン……。南国に相応しい極彩色の花々にいるどられた広大な庭の中央には、正方形に切られた白亜の石版が三枚分ほどの幅をとって、ゆうゆうとゆるやかな曲線を描いている。

隙間なく埋められた石版で形作られる通路のさきに見えるのは、同じく白亜の亭である。作りこそごんまりとしているが、それがただの亭でないことは遠目にも明らかだ。

寄棟作りの建物は四方が吹きさらしにされておらず、透明で流動的な壁のようなものに覆われている。その正体は、屋根から流れ落ちつづける水である。四方を水の壁に覆われた亭のなかの空気は澄み、たいそう爽快らしい。

今、トウルファアではガイゼスの技術力の集大成とも言えるこのあずまやが、貴人や有力者（お金持ち）のあいだでは流行りらしい。

ガイゼスの最重要商業都市トウルファアは、国境の狭間の港町アイデンよりもずっと南、ラガシュよりもまだ南東に位置し、空気は湿り気を帯びて気温もかなり上がる。高温多湿のこの大都市では商談や会談のときにいかに快適な環境を作りだせるか、というのがその人物の力量を示す一つの目安でもあるらしいのだ。

「陽にあたりすぎてはいけませんよ。あなたの肌に南の日差しはきつすぎるのですから」

白皙の美青年はずいぶん前から窓辺に張りついたままだった。風通りのよいように大きく取られた窓には色彩の美しい、上品な紗がかけられているが、青年はその紗を押し上げてじつと外を見ていた。「分かっているよ」

保護者面をするこの男のお小言を聞くのにはもう慣れていた。それでも、セティは日よけの紗をおろし、窓辺から離れた。ちょうど外を見るのにも飽いていたところだったのだ。

ハル王子ら一行は、この街で最大の権力と富を有しているはずの人物であり、彼の叔父でもあるトゥルファ都督ロガン・タナトの屋敷の一室にいた。

昨夜遅くまで今後の行動と対策について、具体的に煮詰めていたメイラとリドルフの二人は、話がおおよそまとまったところで区切りを付けて、寝室にいるはずの二人のようすを見るために階段を上がった。

どちらの部屋にも灯りはなく、弱い月明かりが差し込んでいた。ただ。

まずメイラが王子が眠っているはずの部屋を覗くと、寝台のうえに人影がなく、驚いた。そのまま慌ててリドルフがようすを見に行つたもう一つの寝室に行くと、リドルフは薄闇で微笑んで唇の前で人差し指を立て、寝台を示した。

二人の目の前で、一つの寝台をハルとセティが仲良く分け合つて眠っていた。

向かいあい、額をつけるような格好で眠る二人は、眉毛が下がり安穩とした表情をしていた。それは、まるで幼児の昼寝のように和やかな光景であつた。

「朝までこのままにしておきましょう。二人とも、せっかく気持ち良さそうに眠っていますから」

リドルフは二人の肩まで隠れるようにケットをかけ直してやり、それから複雑な表情を浮かべるメイラに向き直つた。

「大丈夫です。セティはなにも気づいておりませんので」

いつもと変わらぬ穏やかな口調に、メイラはあやうくその言葉を聞き逃すところだった。戸口に向かつて歩きだしたリドルフを慌てて追うと、空色の瞳が微笑んでいた。

不意に、メイラはラガシユの城でハルを横抱きにしたリドルフが言った言葉を思い出した。

そうして結局、小さくため息をつき、肩をすくめてみせてメイラはリドルフと一緒に部屋を出たのであつた。

寝乱れた姿のままのセテイが血相変えて階段を下りてきたのは、夜も完全に明けきつてすでに街が活発に動いている時間である。

食堂にいたのは、昨日と同じくリドルフ一人であった。実は、このときメイラはこの借家を引き払うべく外出していたのだが、セテイがそれを知るよしもない。

「よく眠れましたか？」

またしても温和な微笑という先制攻撃を受けたセテイは、不本意ながら出鼻を挫かれたような格好となった。

「ハル様は？」

「あ、いや。まだ寝ていた」

何ごともなかったかのようにおっとりと質問され、セテイは糸口をつかめずリドルフのペースに引き込まれてしまう。

「それは珍しい。よほどセテイの横が心地良かったのですね」

ばつが悪そうに、セテイは乱暴に自分の頭をかいた。介抱するつもりが、いつのまにかハルの横で眠っていたらしい。

「でも、そろそろ起こして差し上げてください。朝食を終えたらすぐに出かけなければなりませんから」

「リド！ 私は」

「トウルファの都督殿の邸宅へ」

セテイとリドルフの言葉は全く同時であった。よく聞き取れなかったセテイが思わず固まる。

「今、なんて？」

二つの杯にオレンジを絞った汁を入れながら言った、リドルフの声音はいつもと少しも変わらない。

「セテイも身支度を整えていらっしやい。王子殿下に同行するのですから、そんな身なりではいけませんよ」

このとき、昨晚固めた決心は全く不必要なものであったことをセテイはようやく確信した。リドルフとメイラがその結論に達した過程に全く興味がなかったといえ、それは嘘になる。しかし、それ以上にせつかくうまくいつていることに水を差したくないという思

いの方がセテイの中で先立った。

「ハルを起こしてくる！」

今降りてきたばかりの階段を騒々しく上がっていく青年の足音を背景音に聞きながら、作業を続けるリドルフは口元をほころばせたのであった。

これが今日の朝のことで、結局屋敷についたのはちょうど昼ごろであった。そして、今は西日が差し込みはじめる時刻である。

「一体いつまで待たされるんだ」

窓辺から離れたセテイは硝子製の杯を持ち上げて、すでに何杯目かのオレンジ水を飲んだ。

「来客中とのことでしたから、ハル様との面談もまだかもしれませぬね」

書物に目を落としたままのリドルフをちらりと見遣り、セテイは大きく伸びて、やたらとすわり心地のよい長いすに行儀悪くのけぞった。

邸宅に着くなり、家令にハルが訪問とその意図を告げると一行はすぐさま客間に案内された。ただし、ラガシユを訪れたときは違い、王子とその従者とナディール人の二人は別室に通された。

彼らが案内された客間からは、よく手入れされたさきの美しい庭と紺青の海が望め、さぞ高名な名工がてがけたであろう上品な調度品と、大陸中の珍しい工芸品の数々とがうまく調和した洗練された一室であった。さらには、よく冷やされた無花果いちじくや石榴ざくろ、オレンジなどといった果物や、ナツメヤシのあんが入った焼き菓子などが供され、飲みものはぬるくなるころには新しいものが運ばれてくる。

ナディール人の二人への対応は行き届いており、決してないがしろにされたようなものではなかった。しかし、それでもセテイがハルとメイラと別室に通されたことが面白くないと思うのは当然で、待機時間が長くなるにつれて、じっとしていられない性分の青年がじりじりするのは仕方のないことであった。

「大丈夫かな、ハル」

思わず漏れたような呟きに、リドルフは書から顔を上げた。

「お心を強く乱されるようなことが、知らされなければよいのです  
が」

唇をへの字に歪めて、セティが息を吐く。

「こればかりは私たちはもちろん、メイラ様でさえもお供できません  
んからね」



セテイがくすぶっていた同時刻、別室でハル・アレン王子は同じような景色を眺めながら頼杖をつき、ひとりため息を漏らしていた。彼のため息の理由は、彼の二人の友人が懸念していることとおおよそ一致している。しかし、それとは別に余人には決して言えぬ理由もあった。

実はハルはロガン・タナトという人が苦手なのだ。

青い英雄王と謳われた前王イミシユと、微笑みの賢王と称される現王アンキウスの二人の兄を持つ、歳の離れた末弟ロガンが、トゥルフアの都督という地位を手にしたのは決して兄達の威光をかさにきてのことではない。

十七年前のヤルカドの会戦当時、青年であつたロガンも二人の兄とともに兵を率いて戦場を駆け回つたが、名だたる戦果の大半は二人の兄と他の勇将のもので、それよりも、彼は終戦後の国の建て直しにアンキウスの隠れた右腕として優れた手腕を発揮し、一躍その名を有名にしたのだ。ちょうど、アンキウスが兄王イミシユが健在のときに片腕として彼を支えたように。

ガイゼスの国民は、それぞれに母の違う優越した三兄弟を、勇将イミシユ、賢将アンキウス、知将ロガン、と敬愛と親愛を込めて呼ぶことがある。彼ら三人がいたから今日のガイゼスがあると言っても過言ではないのだ。

そんな名実ともにガイゼスを代表するような人物である叔父、ロガン・タナトに対してハルが好意的ではない感情、というべきか一抹の違和感のようなものを覚えることに気がついたのはもう随分前のことになる。

具体的に言いが、と言われれば言葉にするのは難しい。それは、理由なくセテイとリドルフを信頼できる感覚と近いものなのだ。

それは、ちよつとした仕草や言葉、もう少し具体的に突き詰めれ

ば、友人だと伝えたナディール人の二人とはこうやって別室に通されるようなことかもしれない。

ナディール人に対する感情が、大戦前生まれの人間と、自分のような戦後生まれの人間が違うのは当然のことなのだ、理解はしている。それでもなお失望にも似た感情を覚えるのだ。

そもそもハル・アレンという少年が、誰かに対してこういう感情を覚えること自体が珍しいことであり、それについて、なによりも本人が一番驚き、戸惑っていた。この感情をどう処理していいのか、もう随分前から考えあぐねているのだから。

物思いにふけていたハルは、家令が遠慮がちにかける声によろやく気がついた。

別の客人が辞し、ようやくロガンの手が空いたとのことである。

部屋を出る際に、ハルはもう一度窓から外を見遣った。斜陽が目に眩しかった。

案内されたのは広大な邸宅の離れにある一室である。そこは、主が私的な客人と会うときに使われる部屋であり、何度かハルも足を踏み入れたことがある。

家令がハルの訪問を告げ、扉を開けた。部屋に入ると肘掛のついた椅子にゆつたりと腰掛けた、この邸宅の主の姿があった。

「ご無沙汰しております。閣下」

跪いて型通りの礼をほどこす。

「堅苦しい挨拶はいい。よく、来てくれた」

公人としてはハルは巡検使であり、このガイゼス王国の第二王子である。しかし、この部屋に招かれた時点で、トウルファの都督は巡検使に面会しようとしているのではなく、私人として甥に会おうとしているのだとハルは察した。しかし、それをあえて巡検使として参上させたその感情を噛み砕くことは、今のハルには難しい。

親しげに腕を取り、ハルを立ち上がらせると、ロガンは眉をひそめた。

「その傷は、いかがされたのだ？」

訝しげな視線の終着地に気がついて、思わず右手で首筋を隠す。

「先日、襲撃を受けた際に浅手を負いました」

それは真実に他ならない。ただし、襲撃者の狙いは自分ではなかったのだが。

こういう事態を予期していたのか、リドルフは出かけに法術を施してくれた。そのおかげで首の傷も手首の痣も大分薄くなっていたが、完全に癒えるには至っていない。

「医者には診せたのか？ 知人に良い腕の者がいる。すぐに呼ばせよう」

「私に同行してくれている一人が、人を診ることを生業としておりますので」

「ナディール人の僧、か」

家令から彼の同行者については聞いていたらしく、ロガンは複雑な感情を口元にひらめかせ、それきりその話題には触れなかった。

飲みものだけを運ばせて人払いすると、前置きも省いてロガンはハルに話を促した。

アイデンの町の近くで大規模な襲撃に遭い、部下のほとんどを失ったこと。ラガシユへの道中でまた襲撃を受けたこと。ラガシユの領内でセテイとシノレが襲われたこと。そして、ラガシユでシノレから聞いた内容。

ハルはこれまでのことを順序だてて、主観を交えずに伝えた。ただし、法術による攻撃、そして先の誘拐事件はセテイ絡みのものであることが明白になったのでそれは伏せて。

「実はこのトゥルファの街でも、私の友人が一人で街を散策しているときに、路地裏で襲われました」

「神官殿が？」

「いいえ、もう一人の友人です」

「ああ 稀代の美青年だという」

主人にそれを伝えたのは女性の家令であった。つくりもののように美しい白皙の王子の友人の存在を、彼女が熱心に伝えたのは不謹

憤ながらも仕方のないことであつたかもしれない。

「幸い彼は剣の達人ですので大事には至らなかつたのですが、度々仕掛けてくる輩と目的は同じと考えてよさそうなのです」

ハルを救出しようとしていたセテイが単独で何者かに襲われたという事実をハルが知つたのは、つい先頃のことである。

この屋敷をおとなう前に四人で並んで軽い昼食を取っているときに、セテイ本人の口からそれを聞いた。確たる証拠があるわけではないが、セテイがガイゼス側の刺客であると推測したことも。メイラヤリドルフがそうであるように、ハルもまたセテイの感覚を信用していた。

「ロガン様」

持ち上げた瑠璃色の杯を手にしたまま、ロガンがハルを見る。

「一体この国でなにが起こっているのでしょうか。私ごときの命がなぜ欲されているのでしょうか。ロガン様をご存知のことを私にお教えいただけないでしょうか」

不穏な沈黙。

ロガンは持ち上げた杯を口につけずに卓に戻した。そして、それから静かに口を開いた。

「シノレは、王太子殿下がハル殿を害そうとしていると、私がそう言つたと言つたのだな」

「はい」

ロガンは苦い笑いを口元に浮かべた。

「とんだ道化師だ」

ハルは瞬間、我が耳を疑つた。ゆっくりとひとつ息を吸ってから押し殺したような声で問う。

「どういう意味でございましょう?」

「シノレがハル殿に言つた内容は全てが事実ではない。確かに、国王の病は篤い。しかし、王太子殿下が実の弟君であるハル殿のお命を狙っているなどと、そのような嘆かわしい話を私はしていない」

「それでは」

なんとか紡いだ言葉はひどく震え、以後の言葉をハルはつなげない。

「対立しているのは、シノレと、王太子殿下フェウス様だ」

自分の顔から音をたてて血の気が引いていくのを感じた。固く目を瞑り、うな垂れる。

「国王の病は、公表されているよりもずっと篤い。近臣たちのなかでは当然、それどころか近頃は王都やこのトゥルファの民にすら、次の王という話が囁かれている」

うな垂れたままのハルの言葉はほとんど眩きに近かった。

「……陛下は憂慮すべき事態に備え、王位継承順位を制定なされました。たとえ、万が一のことがあるうとも、我々はそれに従うのが道理」

「道理がとおる世界ならば、この世に不幸は存在し得ないということになる」

ロガンは平然と言い返して、今度こそ杯に口をつけて中身を飲む。うつむいていたハルは頭の片隅からある重大な事実を引っ張りだし、顔を上げた。

「シノレ公は自ら王位継承権第一位をご辞退された身のはずです」

現在の王位継承権は、一位がアンキウスの長子であるフェウス・アレン、二位が先王の長子であるシノレ・アンヴァーン、三位が王弟ロガン・タナト、そして四位がアンキウスの末子で未だ幼いシエオン・アレンで、以下十二位まで定められている。

当初、アンキウス王は先王の長子であり、文武ともに秀で人望も厚いシノレを第一位にするつもりであった。しかし、その旨をシノレに告げると彼は恬淡でんたんとして「私は王の器にございません」と言っただけ、太子の座を辞退したというのは国民なら誰でも知る有名な話だ。

「それが、国民の支持を得るための入念な演技パフォーマンスだとすれば？」

一般に、シノレが王太子の座を辞退した理由は、アンキウスの子

らとその周囲の人間たちへの配慮だと言われている。

有能で公正なアンキウスは、王位の無条件世襲を是としなかった。国を治めるのに相応しい器のものがそうすべきであると。そうして、近臣たちの意見も取り入れ熟慮した結果が、前王の長子シノレ・アソヴァーンを王太子とするものであった。しかし、それに納得しないのがフェウスの母たる王妃や、その周囲の人間たちである。シノレは彼らの心情を配慮し、余計な混乱が起こるのを回避しようとしたためにこのような選択をしたというのが、今も人々の口に語られている真実である。

もつとも、シノレ自身がそれを公言したことはなく、真偽のほどは彼の胸の内のみぞ知るところなのだ。

「しかし、シノレ公がそのような」

ハルは声を大にして反論することができなかった。この一件を介し、シノレの清廉な人柄は国中に広がることとなり、彼の人気は今や不動のものになったのはまぎれようもない事実である。

「この国にいるほとんどの人間が、今、彼が虎視眈々と王位を狙っているのだと言われても、“あのシノレが”と考えるだろう。それどころか、逆に喜んでそれを支持するものの方が多いかも知れぬ。それこそが、シノレの狙いだ。私が先頃シノレをわざわざラガシユから呼んだのは、この国の未来を憂慮するもの一人として、血の繋がりのある叔父として、シノレに忠告するためであった」

この後に及んでもなお、ハルにはロガンのいうことがどこか絵空事のように思えてならなかった。ほんとうに、あのシノレがそんなことを考えるのだろうか。しかし、ハルはあることを思い出した。

ラガシユの道中での襲撃。重ねられた布の下にあった、緑の盾と金の王冠のなかに描かれた勇壮な一匹の獅子の紋章。 。 おおきな目を見開き、唇をわななかせて視線を泳がせたハルに、ロガンは続ける。

「そして、ハル殿が王位継承権を有さぬことを残念に思う者が、国民に多いのも事実。隠れた支持を誇り、有力な対抗馬になり得る八

ル殿のお命を狙っているのが、シノレか、フェウス様か　　は  
たまた双方なのか、私には分からぬ。しかし、二人にとってハル殿  
が疎ましい存在であることは間違いないであろう」

「私は法によつて、王位継承権を持たぬ身です。そのような戯言を  
誰が、どうして信じられるというのでしょうか」

「ガイゼスは、神が作った国ではない。民が力を合わせて興した国  
だ。当然、民の意思は王の選出にも大きく関わってくる」

ロガンはいったん言葉を切つて、一層神妙な顔をつくつた。

「繰り返すが、国王の病状はすでに楽観できる段階にない。王座争  
いは今は水面下で起きているが、国王の崩御とともに露呈し、激化  
するのは必至。さらには具合の悪いことに、ナディールには再戦へ  
の動きがあるとも言つ」

ロガンの言葉はもはやハルには遠かつた。

「事はもはや国の存亡にすら関わることなのだ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2228b/>

---

シャングリラ 奔流

2011年12月23日04時56分発行